

ホームレスの逆襲

作 夏之始

蒸し暑い夏の日の夜に、突然黒い雲がわき起こってきたなと思つた瞬間、暗い闇を切り裂くように何本もの稲妻が走り、眼下の無数の光が織りなす東京の夜景を破壊するように青白い光の筋が覆つた。次の瞬間、鼓膜の振動が分かるくらいの轟音が窓ガラスをゆすつた。

「きゃあつ！」

涼子が耳を押さえる。

眞木健二は、ソファに座って涼子の肩を強く抱きしめた。

「だいじょうぶだよ、このマンションがどうなるわけでもない」
さらにまた稲妻が走つた。今度は、かなり近い。涼子の肩を抱き

しめながら、だんだん稲妻が近づいてきて、眞木の家が襲われるのではないかという錯覚にとらわれた。怖がっている涼子をさらに強く抱きしめる。また稲妻が走った。何かの予兆を暗示しているような感覚に陥ったが、頭を振ってその感覚を振り払おうとした。

眞木健二は、遅い夕食を終えて外の夜景を見ながら妻の涼子に愚痴をこぼしていた時の出来事であった。

「やっと稲妻が止んだようね、突然でびっくりしたわ」

「だんだん近づいて来て、何かが起こる前兆のような気になった」

「嫌なこと言わないでよ、たかだか雷が鳴っただけよ」

涼子は切り替えが早い。

「考えすぎだな。このところ思うように仕事が進まず悪い方に考えてしまうことがある」

「そうよ、ストレスが溜まっているのよ。少しは、ゆっくりする時間を作らないと体壊すわよ」

「ああ、しかし客からは満足なデータもないのに、分析結果を早く出せとせつつかれているからストレスがあるのは分かっているけどやるしかない」

「もう何年も同じことを言いながら、同じようにやってきたのだから、一度中断して休みを取った方がいいじゃないの」

「そうだな、今の仕事が終わったら、どこかにゆっくり旅行に行くか」

「いつもそう言うけど実現したことがないわ。当てにしないで待っていまーす」

ここは西新宿にある五十五階建ての高層マンションで、眞木の家はその四十階にある。昼には眼下に新宿中央公園の広大な緑の森が広がっており、その先のすぐに手の届きそうなところに都庁などの高層ビル群が乱立している。そのビル群の間からスカイツリーが見え、その奥にはベイエリアの高層ビル群が遥かに霞んでいる。夜には無数の光が織りなす東京の夜景が一望できる。地上一二〇メートルの高層階から東京の夜景を作り出している眼下の家々を見てみると、それらの家の人々より上に住んでいるという変な優越感のようなものが感じられる。

眞木健二は、四十五才、ひとりで経営コンサルタントをやっている。経営コンサルタントというのは一般に、企業や団体などの依頼を受けて、問題点を調査・分析して原因を見つけ、解決策を

提案する。依頼される分野は、経営戦略、財務・会計、生産効率、組織・人事、営業・マーケティングなど多岐にわたる。特定の企業の顧問に就任するケースもあるが、一般的には、大企業が顧客の場合は大手の経営コンサルタント会社が、中小企業の場合は、フリーや個人事務所が担当するのが一般的である。経験や知識が問われる仕事であり、情報収集のノウハウや分析力、報告書を的確に作成する力、顧客を説得する力が必要である。眞木は、長年大手のＩＴ企業で経営企画の仕事をしてきたが、能力と成果が十分に給料に反映されないもどかしさから、思い切って六年前に会社をやめて経営コンサルタントとして独立した。したがって、それまでの経験を生かすという主眼から眞木の顧客は主として中小のＩＴ企業である。

ＩＴ産業は、生活やビジネスにおけるＩＴの割合が今後もま

すます増えて行くと予想され最も期待される成長産業である。特に、AI（人口知能）の発達とそれを応用した自動運転技術、医療分野でのAIによる診断、機械設計の最適化など産業革命以来と言われるとてつもない科学技術の進歩が起ころうとしており、今がその端緒であると言われている。つまり、この業界では、先端技術をさらに高めて新しい世界を開けるか、あるいはその流れに取り残されるか熾烈な競争の中にあるのが現状である。

現在、眞木がかかえている依頼は二件あり、今日取り組んでいるのはSNシステムズの前田専務からの依頼で会社の財務に関する問題であった。専務の前田浩一は、眞木が以前勤めていたAITTテクノソリューションズ時代の知り合いで面識があった。眞木は独立してから会ったことがなかったが二週間前に急に電話があり、依頼したい仕事があると言われた。古い知り合いから

の依頼であり、ほかに仕事も抱えていたが断らなかつた。それまでに貰った資料によると、SNシステムズはここ数年売り上げが伸びているものの利益は逆に大きく減り赤字が続いているという状況であった。売り上げが増えたのは海外の顧客からの受注が増えたことによるものが大きな要因であるが、利益が上がらず赤字を増幅しているのである。ひとつの大きな要因は、中東のドバイにあるDANAという会社に多額の投資をしているのであるが、投資に見合う利益があがっていないのである。他にも幾つかの海外投資をしているものの、投資額に見合う利益が少ない。眞木は、限られた資料から利益が上がらない要因について分析を試みていた。しかし、すでにSNシステムズの内部でいろいろな検討が行われたものの原因がはっきりしないために眞木に依頼してきたわけで容易に答えが出る問題ではなかつた。さらに

このような分析にはよほど詳細なデータがないと原因の特定はできないのであるが、部外者である眞木には限られた資料しか与えられていない。眞木は夕食を終えた後も仕事部屋にこもっているいろいろな面からの分析を試みた。ただ駆使する手法はあってもデータが不足しては満足な解答は得られない。結局夜中の二時を回ったところで、明日もう一度ＳＮシステムズを訪ねて今までの経過を報告して、さらに必要な資料を見せてもらえないかお願いしてみようと思った。

次の日の午後、眞木は大崎にあるＳＮシステムズを訪ねた。ひと口にＩＴ業界と言っても様々な業種がある。たとえば、ウェブサイトの制作、ネットワークの構築、インターネット広告などを行うインターネット関連業、ＩＴコンサルタントとして企業の

情報システムを構築するなどの情報処理サービス業、パソコンやスマートフォンなどのアプリケーションを製作するソフトウェア業とパソコンやその周辺機器を製造するハードウェア業などがある。この分類を使うとするとSNシステムズは主にソフトウェア業に属し、顧客のコンピュータシステムを企画・立案し、設計から開発・メンテナンスまで行っている。年間の売り上げが五〇億円から七〇億円の中堅企業である。

受付で原田専務とアポイントがある旨を伝えると、そのまま五階の会議室に案内された。会議室の片側は全面が窓になっており、隣のビルがすぐ近くに見える。部屋の中央にテーブルが置かれ、両側に六脚ずつ椅子が並べられている。入口近くの椅子に掛けてしばらく待っていると、原田が管理部長の吉田を連れて入って来た。原田はショートヘアの大柄な男で、きりつとした顔

立ちの男である。逆に吉田は眼鏡をかけた小柄な男で、IT企業には珍しくいつもネクタイをしている。専務と管理部長と言っても、二人とも四十才を超えたくらいで眞木よりも若い。IT企業では特段珍しいことではない。原田と吉田が窓側の席に着いたのを見てから彼らの正面の椅子に掛けた。

「やあ、眞木さん、どんな具合ですか？」と早速聞いて来た。

「お忙しい中、時間を割いていただきありがとうございます。お電話で申し上げましたように、もう少しいろいろな資料とデータをを見せていただかないと十分満足いただけるようなレポートができません。なんとかお願いできないかということ伺いました」

「それは困りましたな。最初に申し上げたように差し上げた資料の範囲で要因を考えてほしいということですよ」

「そう言われたのはよく覚えていません。しかし、いただいたのは一般的な財務関係の資料で、具体的に海外でどんなビジネスを展開しておられるのかが分からないと分析のしようがありません。特にドバイの DANA という会社に多額の投資をされていますが、DANA がどんなビジネスをしているのか不明です」

「あなたも十分にご存知のはずですが、IT 業界は常に先端的なビジネスを展開しているわけで部外者の人にディスクロージャーできる範囲は限られています。お渡しした財務関連の資料から、あなたの経験や他社の例などを生かして分析をお願いしているのです」

「困りました。何とかお役に立ちたいとこの案件をお引き受けさせていただきました。私としても満足のいく解答をお出ししたいと思っています。何度も言っていますように、守秘義務は絶

対に守ります。これは経営コンサルタントとしての第一義です」
「これ以上は見せられんというスタンスに変わりはないが、たとえどんな資料が必要なのか具体的に言ってみてください」と、少しだけ軟化の様相が出て来た。眞木は用意してきた資料リストを鞆から取り出しながら、

「できましたら、このリストにある資料を見せていただきたいのですが、」と言って、原田の顔にすぎるような目を向けた。原田は資料を手に取ってしばらく見ていたが、

「こんな資料を出せるわけではないだろう？」と資料を手渡ししながら吉田に向かって言った。吉田は、黙ってしばらく見た後に、

「そうですね、基本的に無理ですね。ただ、眞木さんが困っておられるようですし、専務が依頼された趣旨も分かっただけなら必要があるとは思いますが、少し考えてみましょうか」

そう言って、少し上の方を見ながら考え始めた。

「大丈夫なのか、おい。しかし、管理部長のお前がそう言うのなら少し考えてみてくれるか」

眞木が内心に安堵感を持つとうとしたとき、

「ただ眞木さん、期待してもらっては困るよ。さっき言ったように基本スタンスは変わらんのだからな」と釘を刺された。そして、さらに続けて、

「これはわが社の命取りになる要因を含んでいるかもしれないのだ。いろんな角度から見たレポートを頼む。評論はいらんからね」

十分に納得いくものを出すようにと念を入れるのも忘れなかった。SNシステムズは、社長の林源太郎が創業した中堅のIT企業で、林の言うことは絶対なのであるが、それが原因で何度か窮

地にたたされたことがあった。専務の原田は、林社長の強引なビジネスを常に横から支えてきたのである。「命取りになるかもしれない」と言ったのは、そうした立場にある原田特有の感が言われたのかもしれないと思った。

そのとき、じっと考えていた吉田が、

「少しお待ちください。適当な資料を持って来ましょう」と言って立ち上がり、部屋を出て行った。

しばらく手持ち無沙汰のまま原田と向かい合って待っていると、再び吉田が入ってきて真木のところに歩み寄った。

「あまりご要望にお応えできないかもしれませんが、問題視されている海外プロジェクトの概要が入っています」と言って、メモリースティック（USB）を差し出した。

「すみません、コンピュータを持ってきていませんので、これ

をお借りできないでしょうか？」

「もちろんそのまま差し上げます。じっくり読んでみてください」

眞木は安堵の気持ちを抑えられず、何度もお礼を言った。

何が入っているかは分からないが、今の状況よりはよくなるだろうと思いつながら山手線の吊皮につかまり、車窓を流れていく夕方の景色を眺めていた。今は七月の初めで、外には夕方とはいえ蒸し暑い空気が満ちている。エアコンの効いた車内は、ぼつと考え事をするには快適な空間でもある。

経営コンサルティングというのは、膨大な資料の収集や分析をし、レポートを作成して顧客に報告する仕事で、顧客の要求によつては徹夜になることもある激務の仕事である。眞木は独立し

てから、ひとりでいくつもの案件を抱えながら激務をこなしてきた。幸いに仕事をすればするほど眞木に対する信頼が増し、顧客の数は鰻登りに増えていた。そのおかげで広くはないが都心のタワーマンションの高層階の部屋を手に入れることができた。一方で、こんな激務の仕事を続けていては身も心も朽ちて行くような気がするのだが、一步休んだらそこで仕事が途切れてしまふような焦燥感が常にある。

新宿駅は夕方の混雑でうろろうしている。ホームからこぼれ落ちそうなほどである。ホームを歩いていると、人ごみと暑さでよけいに気怠さと疲労感が増してくる。駅の西口を出て都庁に向かう道路を歩いて行く。ワイシャツ一枚着ているだけだが額から汗がふき出てくる。

歩道には高層ビルのオフィスから吐き出されてくる人で溢れており、すれ違うのも簡単ではない。さらに進んで行くと都庁の地下入口に続く道路に入って行く。このあたりは一九六五年まで淀橋浄水場のあったところで新宿駅と比べて元の地面が低いため、そのまま進むと坂を下って行くのである。都庁の一階の入り口は、その低い地面の上に高架道路を作ってそこから出入りするようになっていた。坂を下ってさらにその先には新宿中央公園が広がっている。眞木のマンションは公園を横切った先にある。

坂を下って行くと高架道路の下の歩道の隅にダンボールで作った高さ一メートル、長さ二、三メートルの箱が長く連なっている。ホームレスたちの寝床である。上から見ただけでは、上の蓋が閉じていて中に人がいるのかどうか分からない。眞木はダン

ボールの寢床を横目で見ながら、中央公園に向かって緩やかな坂を登って行く。ここまできると先ほどの人ごみが嘘のように歩道を歩いている人はまばらになっている。公園通りを横切つて階段を登ると公園の中に入って行く。公園は夕暮れが迫り、電灯が付き始めた。いつものように芝生の広場の横の道を進んで行く。広大な芝生の広場を囲むように造られた小道に沿って何脚ものベンチが据え付けられていて、何組ものカップルが占領している。ベンチの後ろに植えられている多くの木立がわずかに涼しさを演出しているように感じる。前方のベンチのひとつにホームレスと思われる二人連れが、ワンカップを片手に大きな声で話をしているのが見えた。眞木は知らぬふりをして二人の前を通り過ぎようとした。そのとき、ホームレスのひとりが、「社長、なんか死にそうな顔しているな。一杯やらんと本当に死

んでしまんじゃないか」と言った。どきつとして一瞬立ち止まり、話しかけて来た男を見た。男は白髪を短く刈ってホームレスにしてはこぎれいな格好をしている。眞木と同じくらいの年頃か、あるいは五十代かなと思った。もうひとり若く、長めの黒髪をぼさぼさにしている。ふたりとも草履をはいており裸足の足をベンチから突き出して掛けている。

「なんだ、本当に深刻そうだな」

「なんでもないですよ」と答えてしまった。

「そんなことはないだろう。今日は、ワンカップが何本もあるから金を払ってくれたら一本やるよ」と言って、ワンカップを差し出した。何か、そうしてもいいと言っているような気がして、差し出されたワンカップをつい手に取ってしまった。そして、小銭入れにあった五百円玉を男に渡した。

「おお、悪いな。まあ一口やれや」

男は、すかさず五百円玉をポケットに入れた後、自分のワンカップを一口飲んだ。眞木もつられてワンカップの口を開けてぐつと飲んだ。

「立ったままでは落ち着かんだろう」と言っただけで男は、ベンチに座るようにスペースを開けてくれた。眞木は公園でホームレスに話しかけられて、一緒に酒を飲むことになろうとは思ひもしなかったが、そのまま家に帰る気もしなくて、つい開けてくれたベンチのスペースに腰を下ろした。ホームレスの男ふたりが並んで座り、眞木が声をかけてきた男の横に座ることになった。

「儂らは単に生きているだけだが、一杯やると生きている感じがするぜ」

男はすでに少し酔っているようである。眞木は黙ってさらに一

口飲んだ。飲みながら、やはりホームレスは臭いがするなと思った。

「お前、何があったか知らんが、一杯やるとつまらんことも忘れるさ」

眞木は、黙ってまた大きく一口飲んだ。

「おお、お前けっこういける口だな」

男と隣の少し若い男も笑いながらワンカップを啜るように一口飲んだ。

「あんたら、いつもこうして公園で酒を飲んでいるのか」

眞木は自分でも下らんことを言っていると思いつながら声に出していた。

「ああ、そうさ。俺たちに住む家なんか無い。空の下が俺たちの家だからな。こうしていると、たまにお前みたいなのが金をく

れたりするしな」

「野外生活と言うわけだ」

また変なことを言っていると思いなから声に出していた。

「そうだ、路上生活者と言うか野外生活者と言うかでちよっと感じが違うな」

男も何か自分でまともなことを言ったという風で、言った後に満足そうに一口飲んだ。

「新宿で野外生活するというのはけっこう贅沢かもしれんな」
今度は、眞木も自分で面白いことを言っているなと思った。

「お前何を言っているんだ。ずっと外で生活するのがどれだけ大変かお前らには分かららん。人間、毎日何かを食わなかったら生きていけない。雨が降ってずぶぬれになって寒さで震えても外にいるしかない。お前、自分がそうになったら、そんな呑気なこと

言っていていられるわけがねえ」

「しかし、あんたらは何かに縛られてはいない」

「ああ、そうだ。儂らは何にも縛られていない。その代り、誰からも相手にされない。お前も一度やってみるか？」

「すこし羨ましい気もするけど無理ですね。たぶん」

「だって、お前、さっきは死にそうな顔していたぞ。どんなことになっているのか知らんが、儂らはそんな顔にはならん。毎日生きるために必死だからな」

「もう大丈夫です。ワンカップをありがとう」

ワンカップを一気に飲み干しながら立ち上がった。

「お前、何となく面白いやつだ。また一杯やろうぜ」

「ああ、そうですね」

曖昧な返事をしてベンチを離れた。

ホームレスの男と三〇分くらい話したであろうか、まわりは夕闇が迫っていた。公園を抜けて真木の高層マンションに着いた。玄関には呼び出し用のテンキーのついたセキュリティ装置が扉の横にあるが、マンションの住人は自分の家のキーを差し込んで回せば扉が開く。扉が開いて中に入った途端にエアコンの涼しい風が流れて来て、汗だくだった身体が生き返ったようになる。扉の中には、広いロビーがあり大きな木をイメージした鉄製のオブジェが中央に置かれ、窓際にいくつかのソファが並んでいる。三人の男女がソファに座って話に夢中になっている。それらの人の横を通りながらエレベーターホールに向かう。真木は、ロビーを歩きながら先ほどのホームレスとの会話を思い出していた。夕暮れの公園のベンチで声をかけられて、つい彼

らといっしょにワンカップの酒を飲んでしまった。一般の人はおそらく一瞥してホームレスと分かった途端、関わり合いになるのを避けるようにわざと彼らを見殺しして通り過ぎるだろう。ところが、眞木は彼らと三〇分あまりもコミュニケーションを持ち、話をしてみると、けっこう話が続いた。会話の中で、眞木が自分で言った「新宿で野外生活」と言う言葉がずっと脳裏に残っていた。

高層階用のエレベーターを待っている間も、SNシステムのことを忘れて、ホームレスとの会話のほうに思い出していた。そして、そのことが最近の仕事と対比するように思い出される。ここ何年も毎日朝から夜中まで顧客の要望を取り入れて資料作りをして働いてきた。顧客の要望に必死で応えるために働いてきた結果である。しかし、今日のSNシステムのケースのように所

詮、眞木は部外者であり、あくまでもサポーターであって会社の判断に口を出すことはない。眞木が身を粉にして作ったレポートの意見がそのまま会社の判断になることは珍しいとも言える。一方で、十分にインパクトのあるレポートを作り、説得力のあるプレゼンをしないと眞木の信用が失われる。かたや顧客の方は払っている対価よりさらに多くの情報を求めてくるのは当然である。眞木は、自分が疲れているのは分かっているが、そんなことで今の仕事を投げ出すような軟な人間ではないとも思っている。しかし、ホームレスが言っていたようにストレスの影響で顔色まで悪くなっているのかもしれない。涼子が言うように少し休む必要はあるかなと思った。

家の玄関を開けて靴を脱ぎながら、

「今、帰ったよ」と言ったが返事がない。玄関から右に曲がった

ところにあるリビングのドアを開けると、涼子がソファに座って携帯電話に夢中で話しかけていた。少し間をおいて眞木の顔を見ると、

「ああ、分かりました。では明日話をさせていただきます」と言
って電話を切った。

「あら、あなた早かったのね。午後から出かけたからＳＮシステムズの人と食事でもしてくるのかと思っていたわ」

「いや、先方は早くやれと言っていて食事などする余裕もくれ
なかった。ところでえらく真剣に電話していたようだけど仕事
の話？」

「ええ、そうなの。今やっているプロジェクトが佳境に入ってい
て、電話で具体的な方法を話し合っていたのよ」

眞木と涼子との間に子供はなく、ずっと二人で肩を寄せ合っ

て生きてきた。涼子は、三十九才、今も現役のCCTソリューションズという大手のIT会社の敏腕プログラマーである。結婚する前からCCTソリューションズの社員だったが、結婚を機にCCTソリューションズ専属のプログラマーとして家で仕事をしようになっていた。SEの仕事は、必ずしも会社のオフィスに出勤して仕事をする必要はない。もちろんチームとしてシステム作りを行うので綿密なコミュニケーションは必要であるが、その他は自分のオフィスで自分のペースで仕事をする方が、能率が上がる場合が多い。CCTソリューションズも涼子の能力を高く評価していて、涼子のわがままを聞いてくれたのである。その結果、マンションの部屋は健二の仕事部屋と涼子の仕事部屋に分かれて、あたかも小さい会社のオフィスが二つ隣り合っ
て共存しているかのような状態なのである。同じ部屋に住ん

でいるのだが、それぞれ自分のペースで仕事をしているので、夕食と一緒にする以外は、ほとんど顔を合わさないこともある。

「涼子も忙しそうだけど、今やっているプロジェクトは、どんなプロジェクトなの？」

「そうね、普通の会社のシステムではなくてかなり特殊なシステムなので私も神経質になっているのよ」

「そうか、僕が聞いてもよくわからないけど、お互い息抜きは必要なようだな」

「そうね。少し休んでいて。すぐに夕食の支度をするわね」と言っ
ってキッチンに入って行った。

夕食ができるまで仕事をするかと考え、自分の仕事部屋に入る。コンピュータの電源を入れ、管理部長の吉田からもらったUSBを差し込んだ。中のフォルダーが表示されると同時にセ

キュリティープログラムが反応してファイルのチェックをするかどうか訊いて来た。このセキュリティプログラムは外部メモリに対しては常に反応するようになっていたのだが、それにはかまわずフォルダーを開いた。フォルダーには、ふたつのPDFの資料が入っており、最初のファイルを開く。タイトルは、「D-Projectの概要」とあった。スクロールしながら全体を眺めてみた。全体で7ページの資料であるが、プロジェクトの予算などに関する表などは見当たらない。これではたいした参考にはならないなと直感的に思った。後でざっと読んで参考にならないかと思ったら、さらに新たな資料を要求するしかないかなと思うと、頭の中は仕事から遠ざかって行った。そして、また先ほどのホームレスとの会話を思い出していた。

夕食は、野菜中心の料理で、豚肉と茄子のみそ炒め、胡瓜の胡麻和えなどである。涼子は、自身が忙しい身であるが、料理が得意で家にいるときは必ず旨い夕食を出してくれる。缶ビールを一本ずつ開けて乾杯した後、食事に入った。食事をしながらSNSシステムズでの話をした後に、新宿中央公園でホームレスと話したことを切り出した。

「ところで、帰り道に家の前の公園でホームレスと話をした。けっこう興味ある話だった」と言って、白髪のホームレスとの話がかいつまんで話した。

「なにそれ、そんな連中と付き合わないでよ。何かを強請って家にまで来たらどうするのよ」

「そんなことはないと思うよ。連中は一般人から無視されていると思ってるし、彼らは自分から一般人に関わりうとも思っ

ていない」

「あなた、少しその人たちと話をしただけでどんな本性の人たちか分からないでしょ」

「興味あると言ったのは、貧しいけど束縛がなく生きていくということだな」

「あなた、そういう生活に憧れると言いたいわけではないでしょうね」

「昨日涼子も言っていたように、最近ストレスが溜まっていて少し休みを取った方がいいかと思っっているわけだ。そこで、遠くまで行かなくてもすぐ前の公園で数日間、野外生活をするというのはいかがでしょうかと思ったのだよ」

「あなたも変なことを考える人ね。野外生活と言ってもそのホームレスと一緒に暮らすと言うわけではないでしょうね」

「いや、ホームレスというと軽蔑したような響きがあるが、野外でサバイバル生活をおくるサバイバーと言うと見方が変わるのではないかと思ったわけだ」

「言葉の問題ではないでしょ。クーラーの効いた部屋で朝から夜遅くまで仕事をしていて、昼食を外に食べに行く以外はほとんど外出もしない人が、この暑さの中で、屋外で生活するなんてできっこないわよ」

「いや、そういう不健康な生活をしていてストレスが限界にきているので、健康的に野外生活をしたらどうかと思ったのだよ」
「はい、はい、では一晩、公園で蚊に刺されながら寝てきたら」

野外生活

次の日、眞木は昨日SNシステムの吉田からもらった二つ目の資料をざっと読んだが、やはり契約に関わることはほとんど載っておらず、これでは分析のしようがないなと思った。そして、吉田に資料をくれたことへのお礼を綴った後、このプロジェクトの契約とその実行予算に関する資料をもらえないかとメールをした。

このメールに対してすぐに返事が来るとは思えない。今日は金曜日である。少なくとも返事が来るのは月曜日であろう。眞木は、本当に野外生活をしようとする準備をすることにした。そこで、まずどの辺りにテントを張るか下見に行くことにした。新宿中

央公園は、眞木のマンションから道路を隔てた反対側の敷地に
広大に広がっている。おそらく周囲を一周すると1.5〜2キロ
メートルくらいはあるだろう。公園に入ると、正面に広大な芝生
の広場がある。いつも通っている広場である。午前中の夏の太陽
はすでに人々を木陰に追いやり、芝生の中に人はいない。昨日ホ
ームレスが座っていたたくさんのベンチにも人影はまばらであ
る。芝生の広場を右に進むと壁から水が滝のように流れ、流れ落
ちた水が壁の下の池に溜まっていて場所がある。水の広場と案
内板に書かれている。五、六人の子供たちが池に入り、ビーチボ
ールで騒いでいるのを母親らが木陰で見ながら話しに夢中にな
っている。池の前を、照り付ける太陽で乾いたコンクリートの上
を歩いて進むと、背の高い木々の茂った場所がある。眞木はテン
トを張るならこのあたりだろうと見当をつけていた。歩道から

森のようになっっている木々の間に入ると、上の方で太陽の光が遮断されて涼しいくらいである。森を進むと、やはり三つほどのブルーシートの小屋があった。暑いのだろう、小屋の入口は開けてある。一番手前の小屋の中を覗いてみると人ひとりが横になれるくらいのスペースにいろいろな家財道具が並んでおり、その隙間に男が寝ている。

「おはようございます」と眞木が寝ている男に声をかけた。

返事がなく、寝入っている。再度、

「おはようございます」と少し大きな声で話しかけた。

「何だ、うるせえな。誰だ？」と男は顔をこちらに向けた。やはり昨日話をしたホームレスである。

「おはようございます。昨日、そのベンチでワンカップを貰ったものです」

「ああ、お前は昨日のやつか。何の用だ？」と不審そうな目をした。

「いや、用はないのですが、昨日あなたと話をした後、いろいろ考えて僕も野外生活をすることにしたのです。それで近くにテントを張ろうと思って、挨拶にきました」

「はあ？」

「ですから、僕も野外生活をすることにしたので、近くにテントを張りますのでよろしく」

「キャンプでもするつもりなら勝手にどこでもやれ。儂らの知った事じゃない。なんだ、朝っぱらから変な奴だな」

「分かりました。ではまた後ほど来ます」

眞木は、マンションに帰った後、キャンプ道具を納戸から取り

出し、必要なものをチェックし出した。若いころには涼子と北海道や東北のキャンプ場を巡ったことがあったが、もう十年以上そんなこともない。昔を思い出して、何となくわくわくしてきた。リビングの床にキャンプ道具を広げて、座り込んでいる眞木の背中に、涼子の声があった。

「あなた、本当に今日、公園で寝るつもりなの？」

「そうだよ、やると決めたら即やらないと気が変わるかもしれないからね」

「まあ、でも遠くに行くわけでもないから一晩寝たら何かストレスの解消になるかもしれないね」

「やっと、認めてくれてありがとう。ただ一晩ではなく、三泊して月曜日に帰ってくるつもりだ」

「そう、いつでも帰れるから気を付けて行っていらっしやい」

涼子も昨日のようには反対せず、ちよつとした遊びくらいに思
つてくれたようである。続けて、

「それはそうと、あなたのパソコン、何か調子悪くない？」

「いや、今日も普通に仕事ができているから問題ないと思うけ
ど、」

「サーバーの端末が私と同じだから、何か変だったら調べてみ
た方がいいよ」

「分かった。月曜日に帰ったら調べてみるよ」

「もおつ、キャンプのことで頭が一杯ね」

「キャンプではなく、野外のサバイバル生活と言ってほしいね」

午後になり、眞木はキャンプ道具を担いで午前中に目星を付
けておいた場所に向かった。午前中よりさらに気温が上がり公

園の歩道を歩く人以外にベンチなどでくつろいでいる人はいない。林の中に入り、ブルーシートの小屋から十メートルほど離れた所に平らな地面があるのを見つけ、そこにテントを張ることにした。都心でのサバイバル生活と想像しているので、お金もクレジットカードも携帯電話も持ってこなかった。さらに食料や料理道具も最低限のものしか持ってきていない。

テントを張った後、中に寝ころびながら考えた。

―さてどうやって三日間を過ごすか？

―食料としてカップ麺が二個しかない。今日は昼食をまだ食べていないのでとりあえず、後で公園のトイレで水を汲み、湯を沸かしてひとつ食べよう。そうすると、夕方の時点でカップ麺がひとつだけになる。まずは食料を調達しないと、三日間持ちこたえられない。

—ホームレスの連中が繁華街のごみ箱をあさっているのを、たまに目にするところがある。他には、ホームレスの支援活動で炊き出しにたくさんの人が並んでいるのをテレビで見たことがある。—またほかには賞味期限切れの食品をコンビニなどでくれるという話を聞いたことがある。しかし、どこでいつくれるのか分からない。直接コンビニに行って、頼んでみるという手もあるが、ここはやはりホームレスの先輩である隣のブルーシートの小屋の連中に聞くのが早いだろう。

眞木は、そこまで考えて、午前中に挨拶に行ったホームレスに後で再度挨拶に行ってみることにした。その前に、まず水を汲むために、取手の付いた小鍋を持って林を抜けてトイレを探した。林を出て滝のある広場までくると、池のほとりに水飲み場があり、蛇口もついているのが遠くからでも目に飛び込んで

きた。普段は気にせず公園の通路を歩いていたが、目的を持って歩くと違う視点があるものだと思った。水を汲んでテントに戻り、湯を沸かすことにした。家にあったカセットコンロを持ってきていた。このコンロと小鍋があれば、ちよつとした料理はできるはずである。テントの外で小鍋をコンロにかけてしばらくすると、泡が出て沸騰してきた。コンロの火を消そうとしたとき、テントの横から声がした。

「お前、変わったやつだな。本当にここで野宿するつもりか？」
身を乗り出してテントの横を見ると、朝方話したホームレスであつた。

「ああ、そうですよ。後で挨拶に行こうと思つていました。丁度カップ麺を食べようとしていたのですが、ひとついかがですか？」

「おお、それは悪いな」と遠慮しないで言う。

「かまいませんよ、いろいろお話を伺いたいことがありますので、」

これをひとつ彼にあげると、いよいよカップ麺もなくなるなと思いつながら、二個のカップ麺に湯を注いだ。

「あなたは、名前はなんといいます？　僕は眞木と言います」

「ホームレスが、いちいち名前を名乗り合うわけないだろう」

「しかし、ちよつと呼びかけるのにも名前を知らないと不便ですよ」

「お前にはかなわねえな。まあ、他の連中は、『山さん』と言っているがな」

「ありがとうございます。山さん、」と言って、湯の入ったカップ麺と割りばしを渡した。森の木陰で食べるカップ麺は格別だ

なと思ひながら、二人並んでテントの前の地面に座つて麵を啜つた。

「山さん、ひとつ教えていただきたいのですが、今夜の夕食をただで手に入れたと思つていますが、一番いい方法はなんでしょうか？」

「馬鹿か、お前は？ そんなことをいちいち教えてくれるやつがいる訳ないだろう。エサ取りは、儂らの一番大事な仕事だ。競争相手に教えてくれる奴はいねえよ」

「そうですね、食料をただで手に入れるのは簡単にいかないのですね。どのレストランでも食材を余らせて捨てているし、賞味期限の食品をどんどん捨てているはずなんですけどね」

「そうかもしれんが、簡単に儂らにくれるところはないのさ。いつどこに行ったらそういうエサにありつけるかは、儂ら個人の

秘密なのだ。同じ所にいっぱいホームレスが群がったら、ありつけない奴が出てくるし、店も困るわな」

「そうですか。しかし、今のカップ麺が僕の全食料で、お金も持っていないのです。何としても、どこかで食料を手に入れないといけないのです」

「おいおい、儂を脅すのか？ 別に一日くらい食べなくても死にはしねえよ」

「いえ、最低三日はサバイバル生活をする予定なのでどうか教えてください。お願いします」

「だめだ。試しにホームレスの真似事しようなんていい加減な奴が儂らみたいなのができるわけがねえんだよ。さっさと、家に帰りな」

「ちよつと待ってくださいよ」と言っつて、眞木はテントの荷物を

探した。そして、

「山さん、お近づきにと思って、ワンカップを持ってきました。

昨日の様子だとお酒には目がないと思ひましてね」と言つて、ワンカップを山さんの手に差し出した。

「今度は酒で釣ろうつて魂胆か？」と言ひながら、山さんはワンカップを受け取つた。

「では、山さん、再会を祝して乾杯しましょう」

眞木もワンカップの口を開けた。

「お前には、かなわんよ。だがな、最初に一言言つておくが、酒飲んで酔つ払う奴はホームレスでは生きていけないぜ。外で寝ているといろんな敵がいるし、エサ取りは必死にならないと取れない。エサが取れなければ野たれ死ぬしかない。襲われて死ぬのは、外で寝ている奴の自業自得だ」

山さんは、ひと口飲んだ後に忠告をした。

眞木は、言っていることとやっていることがやや矛盾しているなど思いながら、一方でその言葉にホームレスの魂のようなものも感じた。都心で野外のサバイバルという言葉に酔っている場合ではないかもしれないと思った。それでも二人は、ワンカップを二本ずつ飲み干して別れた。エサ取りは、深夜に行くということで、それまで互いのテントと小屋で休むことになった。

その日の深夜一時過ぎに、ふたりは歩いて公園を出て、都庁を過ぎ、JRの大ガードを渡って歌舞伎町に向かった。深夜ともなると蒸し暑い夏の夜も少しは涼しさが感じられる。二人ともTシャツに黒っぽいズボンとスニーカーといった出で立ちで、一見したところホームレスには見えない。山さんは靖国通りを曲

がって、『歌舞伎町一番街』と書かれたネオンの大きな看板が上の方に掲げられたゲートから歌舞伎町に入って行った。深夜とはいえ、今日は特に金曜日の夜である。深夜一時を過ぎて閉店した店も目立つが、店のネオンは輝き続け、人通りが絶えることはない。黒の派手なワイシャツの遊び人風の男、鞆を持った若い勤め人風の男、タンクトップにミニスカートの女、それらのほとんどがすでに酒が入り、たむろしたり大声で話をしたりしている。山さんはそれらの酔っ払いをよけながら確かな足取りで進んで行く。東宝シネマの広場の前を横切り、区役所通りに向かっているようである。道全体に酔い客と店の呼び込みの男や女が溢れている。しかし、それらの連中は、山さんと眞木には特に気にもかけていないようで、呼び止めたり雑言を言ったりするものもない。

山さんは、タクシーが行き交っている区役所通りを横切り、通りに面した「喜楽」という焼肉店の横の脇道に入って行った。正面の入口の照明は消えており、店は明らかにすでに閉店しているようである。山さんは、「喜楽」の薄暗い脇道で立ち止まり、たばこに火を付けた。

「ここで残飯のようなものをもらえるのですか？」

「ああ、そうだ。残飯とはいえ先ほどまで客に出していた肉や野菜だ。上等なエサだ」

「そうですね。それはうまそうだ。いつもこの時間に出してくるのですね」

「焼肉屋は、肉だけでなく、いろいろな野菜や飯も出しているから一石二鳥だ」

などという会話をしていると、脇道側のドアが開き、店員が出て

来た。二人は黙った。店員は十メートルほど離れたところにいる二人を一瞥した後、ドアを開けたままごみのケースを運び出した。山さんは近寄らず、離れた所でタバコを悠然と吸っている。すると再びドアが開き、同じ店員がビニール袋に入れたものをごみケースの上に置いて店の中に入って行った。山さんはゆっくりとごみケースに近寄り、ビニール袋を手を取った。袋は二つに分かれていた。眞木は山さんの後ろについて行った。

「山さん、それはわざわざごみケースとは別に食料として出してくれたのですか？」

山さんは、黙ったままひとつの袋を眞木に差し出した。眞木がそれを受取るうと手を伸ばしたとき、区役所通りからこの路地に駆け込んでくる足音がした。その人影に振り向きうとしたとき、眞木が差し出した腕と肩にその人影が強烈に当たり、ビニール

袋ともども路地の隅の方に転がった。一瞬のことであつた。転がったのは女だつた。

「大丈夫ですか？」と声を掛けたが、女はよろけながら無言で立ち上がろうとする。が、そのとき三人の男が路地に駆け込んできた。

「助けて、」

女が小さく囁いた。

眞木の身体は自然と男たちの行く手を遮った。

「どけっ、」

凄みのある声で言つて、先頭の男が眞木の顔に殴りかかった。一瞬にしてファイティングポーズをとり、相手のパンチを左腕でよけながら、眞木の右拳が相手の腹部にヒットした。

「うっ、」と唸つて前のめりにかがみこむ。

さらに追ってきた一人が、

「邪魔するな！」

大声で言つて、眞木に殴りかかってくる。と同時に、もう一人が女に殴りかかった。殴りかかってきた男のパンチを右腕で払いながら、同時に女に殴りかかった男の腰に眞木の強烈な回し蹴りが入った。男は横に飛ばされる。

「逃げろ！」

山さんと女に言ったが、言い終わる間もなく、最初の男が眞木のわき腹を蹴った。

「ぐっ、」と唸って後ずさりした途端、もう一人の男のパンチが眞木の顎にヒットした。仰向けに倒れる。山さんと女は逃げようとするところを回りこまれる。

「何も関係のない奴が邪魔するんじゃないやねえ」

さらに眞木の顔を目がけて蹴りが飛んできた。その瞬間、バック転をしてかわして立ち上がる。

と同時に眞木の身体が宙に飛び上がり、「いやあつ、」と鋭い気合とともに蹴りを入れてきた男の顎に回し蹴りがヒットする。男は路地の隅まで飛ばされた。眞木の体全体から発せられる鋭い気合いに他の二人は一瞬たじろぐ。

「くそつ、この野郎、」

二人がファイティングポーズをとる。眞木の身体が目にも止まらない速さで瞬時に片方の男に迫る。と同時に右拳が鳩尾にめり込む。男はたまらず腹を抱えて前のめりになる。もう一人は、眞木の強さに後ずさりした。

「走れっ！」

後ずさりした一瞬のスキに、路地の奥に向かって走った。山さん

と女は眞木の前を走る。女はショートパンツに裸足である。

路地を一〇〇メートルも走ると小さなバーがひしめく『新宿ゴールデン街』に出た。一〇〇メートル四方くらいのところに二〇〇軒以上の店がいくつもの筋を隔てて連なっている古い飲み屋街である。深夜で人通りはまばらになっていくが店のネオンは点いており、どの店も営業しているのが分かる。三人は息を切らしてこの飲み屋街に走り込んだ。何番目の筋か分からないが、先頭を走る山さんが店と店のわずかなすき間に走り込んだ。走り込んだ後、眞木が店の陰に隠れながら外を窺った。男たちの姿は見えない。他の筋を探しているのかもしれない。この迷路のよきな飲み屋街に紛れ込んだら探すのはほとんど無理だろうと勝手に思った。山さんは、ゆっくり歩きながら人ひとりを通れるくらいの狭いスペースを奥に進んで行く。ここも路地になってい

て奥に店の入り口があった。「Liza」という緑色のネオンのついた店のドアを開けて入っていく。中は五人くらいが座れる小さなバーになっているが客はいないようである。

「あら、山さんじゃあないの。どうしていたのよ、もう半年以上にもなるじゃない」とバーの中の女が言った。

「いやあ、ママ久しぶりだな。悪いが今日は客じゃあないんだ。こういう事情かわからんが、この娘が男らに追われているようなのだ。匿ってもらえないか」

「やだ、久しぶりに来て、訳ありの話かい。変な噂でもたったら困ったもんだ、帰っておくれ、と言うところだけど、もう遅くて客も来ないだろうから、しばらくここで休んでいきな」

「悪いな、ママ。今度お礼に来るよ」

「半年以上ご無沙汰しておいて、またお礼に来るよもないもん

だ。ところでどうしたんだい」

ママがビールの栓を抜きながら、女と眞木のほうを見た。ママは五十過ぎの気風のよさそうな小柄な女性である。

「いや、すぐそこの焼き肉屋の横でこの娘が男三人に襲われそうになったところに行くわしたのだが、この男がその三人をやっつけてしまったのだよ」

山さんはママからビールを注いでもらった。

「へええ、あんた強いんだねえ。何をしているんだい」
眞木にもビールを注いでくれる。

「いや、昔空手をやっていたので、つい手が出てしまったのです」

「はあ、道理だね、この歌舞伎町で立ち回りができるわけだ。しかし、気を付けないと相手がやくざだったらとことん探し出さ

れて殺されるかもしれないよ。ところで、あんた、なんで襲われたんだい」と女の方を見て言った。眞木と山さんも女の方を振り向く。

「助けていただきありがとうございます。私、斉田美紀と言います。本当にありがとうございます」

やっと女が口をきいた。まだ青ざめているようである。続けて、

「ただ私にも襲われた理由がわからないんです。区役所通りのお店で働いているのですが、お店が終わって外に出たところに、突然三人の男が現れ、私が何かを盗んだと言って車に連れ込もうとしたのです。私、何か盗んだ覚えはないし、まったく何が何だかわからないのです」と言った。

「何だい、それじゃあ人違いかもしれないってことかい？ まあいいや、しばらくここにいて見つからないように帰いな。ここ

ろで、山さん、しばらく来なかったけど、どうしていたんだい」
自分もビールを飲みながら山さんの方に向かって言った。

「いや、いろいろあって、今ホームレスをしているんだよ」

「はあっ！　今なんて言ったの？　天才数学者と言われた山下耕助がホームレス？　どういうことよ？」とびっくりした顔を
した。

「天才数学者？」

眞木もびっくりして呟いた。

「そうだよ、この人は大学教授で有名な数学者よ。たまに学生ら
を連れてここに飲みに来てくれていたんだよ。それがホームレ
スって、何があったのよ？」

「いや、これには深い事情があってママにも話せないんだよ。悪
いね」

「そう、よほどの事情があったんだねえ。いいよ、今日は飲んで行っておくれ」と言っつて、山さんのコップにビールを注いだ。眞木は、何がなんだかわからず困惑していた。新宿中央公園に小屋を作つて住んでいる男が、有名な天才数学者だという。

「じゃあ、あんたもホームレスなのかい？」とママが眞木に訊いた。

「僕も今日から野外生活をしています」

「まあっ、今日は変な客ばかりだね。しかし、それもゴールデン街のいいところだね」

眞木らは、五時ころまで「Liza」について店を出た。外はすでに明るくなつており朝の空気が心地よい。細い路地の角から筋の様子を覗う。土曜日の朝で、ひとりの酔っ払いが少し離れた道の

脇に寝込んでいる以外に人通りもない。三人は、歌舞伎町に戻るのには危ないと考え、逆方向の花園神社の境内を横切り、明治通り方向に向かった。齊田美紀は大久保に住んでいるとのことで、神社を出たところで美紀をタクシーに乗せて別れようと話ながら歩いた。

土曜の早朝とあって車も少なく、手を上げると四〇メートルも離れたところのタクシーが駐車ランプをつけながら近づいてきた。とその時、明治通りと靖国通りの交差点近くに停まっていた黒色の車が急発進したのが見えた。駐車ランプを点けながらタクシーが停まり、ドアが開こうとしたその時、黒色の車がタクシーの後ろに突っ込んできて急ブレーキをかけた。ブレーキが十分効かずタクシーの後ろに「ガシャッ！」という音を立てて当たった。タクシーは反動で二、三メートルはじき出された。三人

は、びっくりして茫然と立ち尽くしていた。

しかし、はじき出されたタクシーから運転手が勢いよく飛び出してきて黒色の車に駆け寄る。すると黒色の車の運転席からゆっくり男が出て来たかと思うと、何か言おうとした運転手をいきなり殴り倒した。運転手は仰向けに倒れたまま唸っている。同時に歩道側の二つのドアが開き、二人の男がゆっくりと出て来た。手にはナイフのようなものが光っている。

昨夜の男たちだと直感的に思った。眞木は咄嗟に、タクシーに向かって走りながら、山さんと美紀をタクシーの開いているドアの方向に押した。

「早く乗って！」

二人に叫びながら、自分は運転席に飛び乗った。眞木がタクシーを急発進させると、走り寄ろうとした男たちのひとりが、タクシ

ーに持っていたナイフを投げた。

「くっそう、逃がすか！」

「カーン」と鈍い音がしたが、後ろの窓が割れることはなかった。

眞木は目いっぱいアクセルを踏み込む。タクシーのタイヤが急回転して白い煙が出ると同時に、車は急発進した。すぐに新宿六丁目の信号が迫る。信号は赤色に変わったがかまわず突き切る。バックミラーに黒い車が凄いスピードで迫ってくるのが映る。前を行く車を左右にかわしながら追い越して行くが、次の信号がすぐさま目前に迫ってくる。またも赤信号である。大通りで左右から車が来ており、眞木がわずかにブレーキを踏む。同時に黒い車が隣に並びたてた。

「つかまっている！」と後ろの二人に叫んでアクセルを踏み込

み交差点に突っ込む。右方向から青色の乗用車が大きくクラクションを鳴らして入って来た。

「きゃあー」

美紀が悲鳴を上げたが、わずかにかわした。後から続いてきた黒い車は、クラクションを鳴らしながら来た青色の車の先端に衝突した。「ガーンー」と大きな音がして、黒い車が衝突した青色の車のバンパーをそぎ落とした。青色の車は右にスピニングながら滑って行き、反対車線の横断歩道の前で停まっていた車に衝突した。黒い車は衝撃で左右に蛇行したが、そのままさらにスピードを上げて追いかけてくる。二台の車は猛スピードで明治通りを池袋方面に向かって走って行く。黒い車が遂に真木のタクシーの右側に並びたてて体当たりしてきた。

またも「きゃあー」と美紀が悲鳴を上げたが、タクシーは歩道側

に振られてガードレールにこするものの態勢を立て直して突き進む。すぐに次の大久保通りの交差点に差し掛かるが運よく青信号である。

眞木はアクセルを踏み込んで交差点を突っ切る。しかし、今度は黒い車が後ろから衝突してきた。美紀の悲鳴とともに衝撃で一瞬、身体が座席シートに押し付けられる。とその時、山さんが後ろから、

「次の信号を左に曲がれ！」と叫んだ。

「えっ」と眞木が声に出す間もなく次の信号が迫る。

T字路で右から来る車はない。タクシーは、信号の手前で急ブレーキをかけて「きゅきゅきゅきゅっ」とタイヤをきしませながら狭い道路に入って行った。右側のレーンを走っていた黒い車は、即座に追従できず、瞬く間に信号を五十メートルほど行き過

ぎた。

眞木のタクシーが猛スピードで三〇〇メートルほど細い道路を進むと右側に「早稲田大学理工学部」の看板が見えた。

「大学に入りますか？」と山さんに尋ねる。

「いや、まっすぐ行ってくれ」

大学の入口を通り越し、山さんの指示で左に曲がったり右に曲がったりを繰り返した後、線路の下をくぐった。おそらく山手線であろう。黒い車の影はバックミラーに映らなくなった。線路をくぐった後、さらにまっすぐに行くと言った。眞木は山さんがこの辺りの地理によほど詳しいのだなと思わざるを得ない。

「その信号を左に行ったら大久保駅だ」

山さんのナビゲーションは的確である。

「美紀さん、あなたの家は近くか？」

「私のアパートは、北新宿公園の近くよ。家まで送ってくださるの？」

「ああ、それにあんたに聞きたいことがある」

眞木が美紀を振り返って言った。

美紀の部屋は、大久保駅から大久保通りを一キロほど西の方に行ったところにある北新宿公園という小さな公園の近くの三階建てのアパートの三階にあった。タクシーをアパートから十分ほど歩いたところにある神社の駐車場に停めた後、三人は美紀の部屋に入って行った。典型的なワンルームマンションである。若い女の部屋らしく壁には、白い衣装を着た若い男のグループがポーズをとっている大きな写真が貼ってある。ベッドにはいくつかのぬいぐるみが置かれている。部屋の中央に置かれた

小さなテーブルの周りに座りながら、

「僕たち、昨日から何も食べていないのだよ。何か食べるものはないかね」

眞木が立ったままにいる美紀に言った。

「あんたたち、助けてくれたのはありがたいけどホームレスなんでしょ？ カップ麺食べたらずら出て行ってもらえる？」と迷惑そうな顔で応える。

「ああ、あんたに迷惑はかけないよ。食べたら出て行くさ」

美紀は、それを聞いて安心したように台所に行ってカップ麺を作り始めた。しばらくして三個のカップ麺と水を盆にのせて運んできた。眞木と山さんはさっそく夢中で麺を啜った。二人とも、あつという間にスープまで啜り終わった。水を飲みながら、「美紀さん、あんたにひとつ聞きたいことがあるのだがね」と眞

木が切り出した。美紀は不審そうな顔を眞木と山さんに向ける。
「あんたが歌舞伎町で男たちに追われているところを、たまたまあの場所にいた僕たちが助けた。そして山さんの知り合いのバーに逃げ込んで追手をかわした。そのバーで、あんたは『なんで追われているのか理由がまったくわからない』と言った。しかし、連中は僕たちがゴールデン街から出てくるのを朝まで待っていた。しかも僕たちが歌舞伎町とは逆方向から出てくるだろうと読んで、靖国通りと明治通りの両方を見渡せるところで見張っていた。そして目的のためなら僕たちを殺しても捕まえようとした。これは相当なプロのやりかだ。つまり、あんたは理由もなく追いかけられたと言ったが、そうは思えないということだ」

「そんなこと言われても、何がなんだかわからないのよ！ 助

けてくれたのはありがたいけど、私を疑うのはやめて」
美紀は食べていたカップ麺を置いて、真剣な顔で言う。

「あんたは昨夜、連中に追いかけられていた時、裸足になって必死で逃げて来たが、持っていたハンドバックはしっかりと首にかけて放そうとはしなかった。さつき花園神社の前でタクシーに必死で乗り込んだときもそうだ」

「そんなの当たり前でしょ。お財布とか携帯が入っているのよ。簡単に捨てられるわけがないでしょ」

「では、そのハンドバックの中を見せてもらえないかね。こっちも殺されかけたわけだ。見せてもらうくらいよからう」

「いやよ、」と美紀が言ったとき、ハンドバックの中の携帯が鳴った。美紀が携帯を取り出そうとしたとき、眞木もハンドバックに手を伸ばした。二人が引っ張りあった反動で、ハンドバックが

ひっくり返し、中身がこぼれ出てしまった。美紀は、忌々しそうにしながらまず携帯に出た。

「もしもし、ああ、亮ちゃん。．．．．．」

美紀は電話をしながらこぼれ出たものをかき集めようとする。それらは化粧品、財布、ティッシュなどであった。しかし、その中に手のひらサイズの茶封筒があり、一見して他のものと比べて違う種類のものに分かる。眞木が、封筒を拾い上げると、

「だめ！」

携帯を耳にあてながら叫び、眞木の手から引張り取ろうとする。眞木はかまわず中を開いた。美紀は、携帯を耳にあてたまま話している。

「昨夜、助けしてくれたホームレスの二人が部屋にいるのよ。．．．．．。そうなのよ。それで封

筒をホームレスが取り上げてしまつて、……。ごめんなさい。分かったわ」と言つて、そこで電話を切つた。眞木が封筒を逆さにすると、スルツと薄い透明のケースが手のひらに落ちた。コンパクトディスク（CD）であつた。

「これは何だい。あんたらがいつも持ち歩いているような音楽のCDとは違ふようだな」

「だめ！ 返してよ！」

美紀がCDの入つたケースを眞木の手から取ろうとする。

「返してやれよ。面倒に巻き込まれるのは嫌だね」

今まで黙っていた山さんが言つた。

「しかし、どういふことで襲われたか知つておかないと、また僕たちまで襲われる可能性がありますよ」

「それを知つたら、よけいに狙われるということもあるぞ」

「そうかもしれないませんが、ここまで来て怪しいCDが出てきたら中を見てみたいと思いませんか？これのために僕たちは殺されかけたかもしれないのですよ」

「そうだな、しかしパソコンなど持っていないだろう。あんた、」と美紀の方を見た。普通のホームレスの言葉とは思えない。

「そんなのあるわけないでしょ。とにかくそれを返してよ。あんた達とは関係ないものよ」

とそのとき、ドアノブを回す音がした。

三人がドアを見た。

「ガチャツ」と音がして茶髪の男が入って来た。

「あっ、亮ちゃん！」と美紀が叫んだ。

「こいつらか、ホームレスというのは」と言いながら眞木と山さんを睨め付けながら向かってきた。

「さっさと美紀から取ったものを返せ！」

と言う間もなく、眞木の顔面に向かってパンチを繰り出した。左腕でそれをかわしながら「いやあっ！」と気合とともに右拳が男の鳩尾にめり込んだ。男は前のめりに倒れ込む。

「くっ、くっそう、」と言いなながらよろよろと立ち上がり、前蹴りを繰り出す。それが左拳で強烈に払われ、反動で男の体はベッドまで転がる。ベッドから起き上がりながら、ポケットからナイフを出した。

「この野郎、殺してやる」

ナイフをかまえながら近づいてくる。

「亮ちゃん、やめて！」

美紀が男の体に抱きついて止めようとする。

男は、「どけっ、」と美紀を振り払い、眞木の胴を目がけて突き刺

そうと突進した。同時に眞木の身体が横に回り込むように倒れる。倒れながら左回し蹴りがナイフを持った手を蹴り上げる。ナイフは男の手を離れ、部屋の天井に突き刺さった。男の身体が横に傾いた瞬間、眞木の右の回し蹴りが男の後頭部に入る。男は音を立てて顔から床に倒れこむ。気絶したかに見えたが、少し間をおいて「うっうっ」と唸りながら起き上がるうとする。

「もうやめて！ この人、私を追いかけて来た男を三人ともひとりだけでやっつけたのよ。このままだったら亮ちゃんも殺されちゃうわ」

美紀が男に覆いかぶさるように抱きついた。

「断っておくが、僕らはあんたの商売の邪魔をするつもりはない。ただこの人を助けたおかげで、僕らも狙われる可能性が出て来た。どんな顛末だったのか知る権利はあると思うがね」

眞木が男に向かって言った。

「分かった、分かったわ、私が言うからこれ以上亮ちゃんをいじめないで！」

「やめろ、美紀！」

倒れたまま茶髪の男が遮ろうとする。

「だけど、あんなコンピューターのCDなんか手に入れても私たちではどうしようもないんじゃない。この人たち、ホームレスだって言っているけど、私たちよりコンピューターに詳しくさうよ」

美紀に言われた男は、「畜生っ、」と言ったまま黙った。

「亮ちゃんは稲荷会の下っ端だけど顔が広くて、いろいろな話を聞いて来るのよ。昨日のことは稲荷会と対抗している尾沢組が私の勤めている『クラブ恵』でちよっとした取引をするという

話を亮ちゃんが聞いて来たのよ。『クラブ恵』は尾沢組の息がかかっているのよ」

「ということは、やはりやくざの取引のいざこざに巻き込まれたというわけか」と山さんがため息をついた。

「亮ちゃんが聞いて来たのは、何かとても大切なコンピュータ―情報を尾沢組が手に入れて、それを欲しがっている会社に売るらしいという話だったのよ。亮ちゃんは稲荷会の一員として、それを奪い取って尾沢組に一泡吹かせるという計画だった」

「美紀さん、あんたそんな無謀な計画に、失敗したらとても生きてはおられないかもしれないと思わなかったのかね」

眞木が美紀を諭すように言った。

「亮ちゃんに頼まれて、後の事考えないでやっちゃったのよ。でもうまく手に入れたから、稲荷会からご褒美が出るし、私たちも

匿ってくれるわ」

「そんな甘い話があるわけないだろう。尾沢組があんたらを探しているということは、まだ金が手に入っていない。つまり、昨夜は取引が成立しておらず、ブツを途中で横取りされたというわけだ。もしそれを横取りしたのが稲荷会の仕業だと分かたら戦争になる。あんたら下っ端は、所詮使い捨てだ。ブツを手に入れたら、あんたらは尾沢組に差し出されるぜ」と山さんが言った。それを聞いて、ふたりは我に返ったように山さんを見た。「それにしても、美紀さん、どうやってこれを手に入れたの？いくら小さな封筒でも、そんな簡単に奪うことはできないだろう」と眞木が訊いた。

「昨日の夜、『クラブ恵』の奥のボックス席に組長の尾沢錬次と二人の手下が、サラリーマン風の男ふたりと向かい合って話を

しているのを見たわ。女たちは呼ばれていなかったけど、近くの席から見ていたのよ。尾沢がその封筒をサラリーマン風の男に渡すと、ひとりがコンピューターを取り出し、そのCDをケースから出してコンピューターに入れ込んで操作し出したわ。しばらくして満足そうにコンピューターを閉じて、CDを封筒に入れてコンピューターの入った鞆に入れた。その後女たちが呼ばれて、私はサラリーマンの男の隣に座ったのよ。後はご想像に任せるわ」

「ご想像にお任せしますと言われるても、一歩間違えばただじゃすまないだろう」

「こいつは、こう見えてもこういうことの天才だ」
倒れていた男が起き上がりながら小声で呟いた。

「つまり、スリの天才ということか」眞木が美紀を見ながら言っ

た。

「そんな、天才だなんて言わないで」

美紀が照れながら応えた。照れるようなことではないがなと、眞木は思った。

「いずれにしてもこれを稲荷会に届けたところで、あんたらは無事では済まない。俺たちもやくざから狙われることになる。早めにここも引き払う必要がある。ここに居たらいずれ見つかってしまうだろう」

山さんが皆を鋭く見つめながら言った。

「ええっ、じゃあ、どうしたらいいのよ？ 亮ちゃん、どうする？」

美紀が青ざめて言うと、茶髪の男も、眞木に殴りかかったときの威勢のよさはなくなった。

四人は、暗くなるまで美紀の部屋にいて、眞木と山さんたちがねぐらにしている新宿中央公園まで歩いて行くことにした。美紀のアパートから新宿中央公園までは近道を行けば、三、四〇分であるが見つからないように、大久保通をさらに西に行って神田川沿いを南下することにした。公園で野宿すると聞いた美紀が必要なものをいろいろと持っていきたいと言い出し、美紀の部屋にあった生活用品と食料品を可能な限り持ち出すことになった。男三人で分担して担いだり、両手いっぱいにつたりして歩き出した。七月の夜は陽が沈んでも蒸し暑さはなかなか和らがない。すぐに汗が噴き出す。当の美紀は男たちがやめろと言うのにも関わらず、大きなアヒルのぬいぐるみを片手に抱えて汗だくになっている。昨夜はショートパンツに裸足で逃げてきた

美紀であるが、今はジーパンにTシャツのいでたちである。茶髪の男は、光真亮太というらしい。稲荷会の組員だと言っているが、歌舞伎町を中心にその日暮らしをしているいわゆるチンピラというところだろうと眞木も山さんも思った。

たくさんの荷物を持って歩いてきたのと、なるべく人目を避けるように歩いてきたせいで、二時間近くかかって新宿中央公園に着いた。持って来た荷物を山さんの小屋に入れた後、小屋の前に座って一息つくことにした。

「やくざも僕たちがこの公園のテントにいるとは思わないだろう。明日になったらインターネットカフェに行つて、このCDの中身を見てみよう。中身が分かったら身を守る手段が見つかるかもしれない」

実のところ、眞木はCDの中身が気になるのだ。

「中身が分かってても助かるとは思えない。早く『クラブ恵』にでも返しに行った方がいいぜ。そうすりゃあ、儂らは狙われることはない」

山さんとしてはこれ以上関わりたくない。

「それじゃあ、私たちはどうなるのよ」

美紀が訴えるような顔をする。

「ブツを返してもあんたらの仕業だということとはつきりと分かっている。見つかったら命はないだろう。もつと遠くに逃げるしかない」

「私たちを見捨てるというわけね」

「見捨てるも何も、もともと儂らとは関係ないことだ。自分らで蒔いた種だ。自分で始末するしかない」

「まあ、山さん、なんかの縁でここまで来たんだから、CDを開

くまで付き合ってみませんか？　やくざも公園の小屋にいるとは思わないでしょう」

眞木は二人の間に入って話を前に進めようとする。

「お前と儂と一緒にするな。お前は今だって自分の家に帰れば、今日のごとは他人ごとで儂とは無関係だ。儂らはこの街のおこぼれを貰って生きている。街に敵がいたんじゃあ生きていけない。お前ら全員、早くどこかに行ってくれ」

「分かりました。しかし、今日のところは僕たちにとってここが一番安全な場所です。他に行く場所がありません。行く場所が見つかるまでもう一日ここに居させてください。あんたらも山さんをお願いしなさい」と眞木が美紀と亮太に言った。チンピラとその彼女がホームレスの男に泊めてほしいとお願いするというのも変な話であるが、二人にとっては他に選択肢がない。

結局、山さんが折れて美紀と亮太は眞木の狭いテントで、眞木は山さんの小屋でそれぞれ分かれて寝ることになった。少し涼しくなった公園の林の中で、昨夜からろくに寝ていない眞木と山さんはすぐに寢息をかきだした。美紀と亮太も、何やら小声で話している声が狭いテントの中から漏れていたが、いつの間にか木々の静けさに消されていった。

次の朝、陽が木立からこぼれて小屋のブルーシートにあたり、小屋の中が暑くなってきた。皆、同じところに寝苦しさから目を覚まし、外に出て来た。眞木の持って来たポータブルコンロを使って、美紀の家から持ってきた米を炊くことにした。山さん以外の三人はキャンプに来たような感覚である。小さな鍋しかなく、四人分を炊こうとすると二回に分ける必要があるなど思っている

と、山さんが、「これを使え」と煮物用の鍋を小屋から出してきた。コンロの火を調節しながら、しばらく待っていると鍋蓋がコトコトと音を出し始める。さらにすこし経つと中のお湯が噴き出し始める。

炊きあがったご飯を、やはり美紀の家から持って来たパックに入ったいくつかの総菜をおかずにして食べる。屋外の草の上で食事するのもいいものである。いつの間にか太陽は頭の上に差し掛かろうとしている。

「ではご飯が済んだら洗い物をして、それが済んだら近くのインターネットカフェに行ってみよう。山さんも来ますよね」と山さんを見る。

「俺は行かねえよ。これ以上関わり合いになるのはごめんだ」
「そんなこと言わないでくださいよ、有名な天才数学者、山下教

授。情報システムの話となるときっと、山さんの助けが必要だと思えます」

「えっ、」と亮太が短く声を出して山さんをまじまじと見た。

「それを言うな。そいつはとっくにこの世界にいないんだ」

「どうということがあったのか知りませんが、天才数学者であることは変わりません。お願いします」

気の進まない山さんを伴って、公園の西側に出て西新宿駅の方面に歩いて行った。新宿駅周辺はやくざに見つかる可能性が高い。西新宿駅から方南通りをさらに二〇〇メートルほど行ったところに、『マンボ』というインターネットカフェがあった。入口を入ると左側に受付カウンターがあり、右側には漫画の本棚が並んでいる。料金は三時間でひとり一、〇〇〇円。お金を持

っていない眞木と山さんに代わって美紀が四人分を渋々払った。奥に進むと内部は薄暗く、高さ一、六メートルくらいの壁で仕切られた個室スペースが続いている。廊下はひっそりとしており、個室がどのくらい埋っているのかわからない。渡された部屋番号の個室に入ると、幅一、六メートル、奥行き一、八メートルほどのスペースになっており、大きなモニター画面とキーボードが正面の机の上に置かれている。それに向かって、座椅子が二つ並んでいる。この個室は、アベック向けなのだなど眞木は思った。

眞木は、コンピューターを起動させ、すぐにCDをCDドライブに差し込んだ。CDの中には、『R2030』という名前のフォルダーがひとつだけ入っていた。クリックしてフォルダーを開く。中には、『A』、『B』、『C』という三つのファイルがあっ

た。『A』をダブルクリックする。パスワードを訊いてくる。同じように『B』と『C』を開こうとしてもパスワードがないと開けない。当然であろう、お金を出して買い取ろうというほど重要なものなのだ。簡単に他人が開くことができるようにはなっていない。

「だめですね。パスワードがないと開けない。」と眞木が肩を落とす。

「なんだ、お前、昨日からえらそうにして、どうしようもないのかよ、まったく。くっそう!」

後ろで黙って見ていた亮太が、不満を爆発しようとする。

「なによ、あんた。せっかくここまで来たのにどうしてくれるのよ。なんのために昨日からやってきたのよ!」

美紀も眞木の背中に向かって叫ぶ。とそのとき、

「まあ、そんなに焦るな。儂に貸してみな」と山さんが横から言った。

「えっ、パスワードが分からなくても開くことができるのですか？」

「できるかどうかかわらんが、やってみるか」と言ってみる。真木と席を代わる。

「これは！」

山さんが、画面を見て驚きの表情を浮かべた。

「山さん、これについて何か心当たりがあるのですか？」

「いや、なにも知らん」

しばらく黙って画面を見て考えていたが、ゆっくりと操作を始めた。

真木は、山さんはこれについて何かを知っているのではないか

と直感的に思った。

席を代わった山さんは、まずインターネットにつなげて、BOXに接続する。BOXというのはインターネットに接続して、どこからでもアクセスできるクラウドストレージのひとつである。その中からひとつのファイルを取り出す。そのファイルに『A』のファイルをドラッグしてオーバーラップする。するとプログラムが起動してすごいスピードで文字列が流れて行く。

「すごいー！」

美紀が感嘆の声を上げる。

数分すると文字列の流れが止まり、「Analysis completed」と打ち出され、その下に「Pass Word : pkm7mggh6931vf45」と表示された。表示されたパスワードをコピーして、『A』ファイルを開いて、パスワードの欄に貼り付ける。すると、ファイルが開いた。

「やったあ！」

三人が歓声を上げる。

しかし、出て来たのは、膨大な数字の羅列であった。これでは何のことか分からない。

「なんだ、これは、」

三人の落胆の声が続いて起こる。

「まあ、待て。そんなに一喜一憂するな」と山さんが言って、次の『B』と『C』についても同じことをする。それぞれのファイルが開いた。しかし、『B』と『C』も同じように膨大な数字の羅列があるのみであった。三人の落胆のため息が狭い空間に充滿する。

「これじゃあ、いくらなんでもどうしようもないだろう」

亮太が山さんに詰め寄る。それには答えず、山さんは開いたファ

イルを順次見ながら、じっと考え込む。五分、十分と静寂の時間が過ぎて行く。そして、

「これは、暗号だな」と呟いた。

「ええっ、暗号なんですか。とすると暗号が解けないと核心には迫れないですね。こんな複雑な暗号では仕方ないですね、あきらめましょうか」と眞木が山さんを慰めるように言った。

「誰も解けないとは言っていないだろう」

「ええっ、解けるのですか？」

「まあ、やってみないと分からんがな。この暗号を作ったアルゴリズムがあるはずだが、過去には膨大な数のアルゴリズムが考え出されており、それを全部試すのは不可能と言える。しかし、最適化シュミレーターを使うと、その中から最適解に近いやつをあぶり出すことができる。それがヒットするかどうかだな」

眞木には意味不明のことを言って、山さんは先ほどのBOXに接続していくつかのプログラムを取りだした。とても公園のブルーシートの小屋に住むホームレスとは思えない。さらにどこか別のクラウドと連結して、取り出したプログラムを起動させる。起動したプログラムに『A』のファイルを読み込ませる。再びプログラムが起動して、真っ暗な画面の上を白い文字列がすごいスピードで流れて行く。途中で停まると、山さんは何かを素早く打ち込む。すると再び文字列が流れる。これを十分ほど繰り返すと、再びプログラムが止まった。

「いくつかヒットしたな。こいつらを試してみて、小さいじれば解けるかもしれない」と言って、別のプログラムを開いて、『A』のファイルを読み込ませて、起動させる。そして、さらに十分ほどが過ぎた。

「ひとつ解けたな」と言った。

「ええっ、解けたのですか、すごい！」

眞木が感嘆の声を上げる。

山さんの背中の後ろで、いちやついていた亮太と美紀も、

「お前、すごい奴だな！ やっぱりただのホームレスとは違うな。で、何が書いてあったんだ？」と言って画面を覗き込む。

「いや、暗号は解けたが、「一覧の通り、何かのプログラムが隠されていたが何のためのプログラムかはわからない」と言って画面を指さした。そして、「Solution result:」をクリックすると、また画面上を何かのプログラムのようなものが凄いです。ピードで流れて行って止まった。

「これがそのプログラムだ」

「ひとつ解けるとまた次の謎が出てくる。これじゃあ、いつまで

経っても終わらないわ」

美紀が落胆の声を上げる。

「お前ら、ほんとうにこらえ性のない奴らだな。これは、おそらく何かの大きなシステムを動かすための起動プログラムのようなものだな。残りのファイルも解析してみるから少し待っている」と言って、同じような手順で、『B』と『C』についても解読を始めた。

美紀と亮太はあきらめぎみになり、再び山さんの後ろでいちやつき始める。眞木は山さんの横でじっと画面を見ている。そして、さらに十分が過ぎた。

『B』も解けたぜ。しかし、結果は似たようなものだな」と山さんが画面を指さしながら眞木に言った。

「そうですね、先ほどの結果と似たような膨大な文字列に変わ

っただけですね。やはり、何かのプログラムですかね」
もはや、美紀と亮太は画面を見ようとしめない。

「いずれにしても、解読のアルゴリズムは同じだ。『C』についてもやってみよう。すぐに出るぜ」と言って、再びコンピュータを操作しだした。そして、さらに十分が過ぎた。

「やはり、似たような結果だな」と眞木に言って、続けて、
「これはおそらく、何か重要なシステムを起動させるためのいわゆるシステムキーのようなものだと思う。これが三段階になっているのか、システムが三つあるのか分からないがな」と言った。

「しかし、それがどんなシステムなのか雲をつかむような話です。『B2030』という名前について何か知っているのではありませんか？」

「いや、知らんな。なんのことだかわからん」と山さんはすぐに言ったが、そのしぐさから真木は、山さんにはやはり何か思い当たることがあるように見えた。

真木は、『R2030』というのをgoogleの検索に載せてみたが、それらしきものは見つからない。次の謎解きは、容易ではなさそうである。後でもう一度山さんに尋ねてみるかと思った。それに入場してから三時間が経とうとしていた。

「そろそろ時間だ、とにかく厩に帰ろう。帰ってじっくり考えてみよう」と真木が三人に言っつて、ブースを出た。真木が山さんを見ると、山さんは店を出た後も何かを考えているようである。

「結局、何もわからなかったのと同じだな。これからどうするんだよ」

亮太と美紀が不満を言いながら、眞木と山さんの後に付いて来る。店を出ると薄暗い店内と打って変わり、夏の太陽がまぶしい。

店から一〇メートルほど歩いたところで、柄シャツのふたりの男とすれ違った。眞木は、ふっと殺気のようなものを感じたが、振り返ることはしなかった。が、一瞬の後、後ろで誰かが殴られたような音がした。

「やめろ、やめてくれ！」

亮太が叫んでいる。逃げようとする亮太を男ふたりが前後に挟むようにして囲んでいる。

「逃げろ！」

眞木は、美紀と山さんに大声で言って、新宿中央公園とは逆方向の山手通りに向かって走った。

「あんた、亮太を助けてよ！」

後ろで美紀が立ち止まって叫んでいる。そう言われ、眞木は男たちのところに戻った。遠くで山さんが様子を覗っている。暑い昼間であるが、通行人が何人も遠巻きにして見ている。

「こんなところで、立ち回りをしたら警察がすぐに飛んで来るぜ」

眞木が威圧するように空手のかまえをとる。

「お前だな、昨日、仲間をやってくれたのは、」とひとりが言った。同時に、眞木の顔面を目がけてパンチを飛ばしてきた。左腕でかわすと同時に、右拳が相手の鳩尾にめり込む。もうひとりが、左横からパンチを繰り出す。それよりも速く眞木の左回し蹴りが相手の首にヒットする。ふたりの男が歩道に倒れ込む。

「走れ！」

亮太と美紀に叫んだ。

四人は山手通りを甲州街道の方に向かってに走った。真夏の太陽が照り付ける昼下がりである。すぐに息が切れ、汗がふき出てくる。

「どこまで行くんだ！」と亮太が大きく息を吐きながら言う。美紀と山さんが遅れ始めている。

「とにかく走れ！ 仲間に連絡しているかもしれない」

眞木は、尾沢組のやくざが連絡をとって自分たちの逃げた方向を仲間に知らせている可能性が高いと考え、甲州街道を越えてさらに南に向かって走った。他の三人もよろよろしながら眞木についてきている。甲州街道を越えて五〇〇メートルほど行くと、参宮橋の陸橋が見えてくる。陸橋を渡って、明治神宮の西門

を入れる。ここでやっと走るのをやめて歩き出した。

「もう限界だ。休ませてくれ、」

汗だくになった山さんがかすれた声で言って立ち止まる。美紀と亮太も大きく息を休めていて声も出ない。大きな木立に囲まれた神宮の森では、太陽は遮られて木洩れ日がわずかに地面を照らすほどで、涼しい風が緩やかに抜けて行く。ゆっくりと本殿の方向に向かう小道を進んで行く。しばらく行くと、「清正井（きよまさのいど）」という湧き水の井戸があった。この地に加藤清正の子・忠弘の下屋敷があったことからこの名前が付けられたとある。

「ここでひと休みしよう。喉がカラカラだ」

さっそく眞木が井戸の周りに流れ出た湧き水を手ですくって飲む。他の三人もそれに続いて必死になって水をすくった。

「結局、四人とも尾沢組に追われることになってしまったな。ちよつとした野外生活がとんだことになってしまった」と眞木が井戸の周りの石に腰をおろしながら呟いた。

「そうだ、だからこいつらにかまうなと言ったはずだ」と言いながら、山さんも石に腰を下ろした。本当の井戸端会議のようである。

「しかし、山さん、あんたも嬉々としてコンピュータをいじっていましたよ。やっぱり、只者ではない」

「そんなことより、今からどうするのよ。公園の小屋にいろいろな物を置いてきてしまったわ」と美紀が言う。

「今は公園に戻るのには危険だな。美紀さん、あんた後いくら持っている？」と眞木が訊いた。

「何よ、私のお金ばかりあてにして！ さっきの漫画喫茶で四

千円払ったから、もう一万円もないわよ、どうしてくれるのよ」
「とりあえず、今日のところはそのお金で何か買って食べよう。
明日になったら様子を見ながら僕が家に帰って何か持ってこよう」

「ああ、そう、あんた、やっぱりホームレスじゃあないのね。よかったわ、私たちを何とかして助けてちょうだい」

「降りかかった火の粉を何とか払わないとね。しかし、食料があったとしても、今日はこのあたりで野宿するしかなさそうだし」
「どこかないのかよ、こんなところで寝たら蚊に刺され放題だし」

亮太が殴られて腫れた顔で文句を言う。

「もとはと言え、お前がバカなことを考えるからだろが、山さんが睨み付けた。続けて、

「今日は時に帰れないとなると、この先のたまり場に行ってみるか。何か土産でも持っていけば何とかなるかもしれない」と言った。

「たまり場というのは、代々木公園のことですね。知り合いでもおられるのですか？」

「ああ、代々木の番頭と言われているホームレスの達人がいるのだ。何でも街で拾ってくるし、いろんな食材をもらってきては、他のホームレスに食事を作ってやっている。ただし、気難しいじいさんだから、それなりの土産を持って行かないといかん」

四人は、「清正井」から西に向かって歩き出した。表参道を外れた森の中は、巨大な木々が天をつくように茂っており、とても東京の真ん中にいるとは思えない。ひんやりとした空気がゆっ

たりと流れ、汗をかいた身体を癒してくれるようである。神宮の森に隣接しているオリンピックセンターを通り過ぎ、小田急線沿いの道路に出る。目に付いたコンビニで、おにぎり、総菜などを買って再び森の中に入って行く。代金は、美紀が渋々払わされた。

新宿中央公園と違い、代々木公園にはたくさんブルーシート的小屋が林の中に見える。山さんはそれらの小屋を横目で見ながら小道を進んで行く。どこかに目当てのホームレスの達人がいるのだろう。しばらく行くと、小道から外れた林の中に蒲鉾型の白い小屋が見えた。小さなビニールハウスのような形をしている。

「浩さん、居るかい？」と言って、山さんが蒲鉾型の小屋の端にある扉を開けた。他の三人は、少し離れた所で様子を覗っている。

る。

「おお、山さんじゃあねえか、久しぶりだな。どうだい、少しは慣れたかい？」という声の中から聞こえてきた。

「今日は、少し困りごとがあつて来たんだ」

「ほう、珍しいことがあるもんだな。何か分からんが、まあ、とにかく中に入れ」

「いや、俺ひとりじゃなく、連れがいるんだよ」

「厄介ごととは嫌だが、わざわざ山さんが訪ねて来たんだ、その連れも呼べよ」

他の三人も、山さんに続いて浩さんの小屋に入った。

入った瞬間、真木は、「えっ、」と小さく驚きの声を上げた。

その中は、よく見かけるブルーシートの小屋の中を想像していたのとは違い、奥行きが七、八メートルもあり、高さも人が十分

に立って動けるだけのスペースがあった。しかも、いろいろな丁度品が整然と隅に並べられている。これは、ちよつとしたこぎれいな部屋だなと眞木は思った。さらに驚いたのは、たくさんの本が積み上げられており、今まさに浩さんは読書中だったようである。浩さんは、髪が薄く、白髪を短く刈っている。年はおそらく、六十才を超えたくらいかなと眞木は思った。

「なんだ、連れは三人もいるのかよ。それも若い別嬪さんといっしょとはな。で何があったんだ？ 深刻そうな話みたいだな」
浩さんの言葉に、山さんが、金曜の夜からのことを簡単に説明した。

「それじゃあ、やくざに追いかけられているから匿ってほしいということか。それはいくら俺でも嫌だね、と言うところだが、俺はやくざが大嫌いだ。路上で必死になって生きている何人も

のホームレスが、やくざやチンピラに虫けらのようにやられて大けがをさせられたりしてきた。やつらこそ、街の虫けらだ」

「そんなに迷惑かけないから、一日か二日、罫を用意してもらえないかなと思って来たんだが、」と山さんが言いかけると、

「いいよ、狭いところだが、詰めればここで四人くらい寝られるだろう。夏だから敷物だけでいいだろう。若い娘が俺の小屋で寝るなんて初めてだな」とおどけて言ってくれた。

気難しいじいさんと言っていたが、浩さんはけっこう物分かりのよさそうな人で快く小屋に泊めてくれることになった。買って来た手土産を広げて、まずは焼酎を小屋にあったコップについて乾杯した。

「それにしても、やくざをやっつけるとは、あんた、いい度胸しているな」

浩さんが焼酎を啜りながら眞木を見た。

「つい二、三日、公園で野外生活しようとして、山さんを事件に巻き込んでしまいました。何とか逃れる方法を考えないといけないと思っています」

「なんだ、あんた、冷やかしの一般人かい。だったらさっさと家に帰って、知らん顔していたらいいじゃないか」

「いえ、僕が山さんを巻き込んでしまったので何とかしようと思っっているのです」

「変なやつだな。しかし、今の話じゃ、このあたりをうろろろしていたら、いずれは捕まるぜ。そんなにいい方法なんかないだろう」と言われ、皆が困った顔になり言葉が続かない。街の虫けらだと言われてむっとした亮太だったが、自分がチンピラだと公言するのも、場の雰囲気からはばかれ、美紀と一緒に隅で黙って

座っている。そんな中、山さんが眞木を見ながら、

「このCDの中身については、やくざでは手も足も出ない。もし起動プログラムのようなものの意味が分かれば万一やくざに捕まっても、取引材料になるかもしれない」と言って考え込んだ。

「おお、ひさしぶりに山さんの小難しい話を聞いたぜ。ということとは、これはインテリホームレスの出番というわけか」と浩さんが言い、続けて、

「とりあえず、今日のところはやくざから逃れられたわけだから、山さんの言っている小難しい問題は明日にでもゆっくり考えればいいじゃないか。持ってきてくれた土産がたくさんある。ゆっくりしてくれ」と言ってくれた。皆の緊張も徐々に和らぎ、焼酎の杯を重ねながら夜の暗闇が蒲鉾型の小屋を包んでいった。

リアルホームレス

次ぎの日、眞木は用心しながら、一旦家に帰ることにした。追われていた仕事のこととも一気に気になり始めたし、第一お金も携帯電話もなくては暮らしていけない。浩さんが作ってくれた朝飯を全員で食べた後、眞木は昨日走って逃げて来た山手通りを一人でゆつくりと新宿中央公園の西側にそびえる高層マンションに向かった。すでに朝の太陽が歩道を眩しく照り付けている。金曜日に野外生活をすると言って家を出てからあまりにいろいろなことが起こった。涼子も心配しているだろう。

眞木のマンションは入口にセキュリティキーがあり、簡単に外部の人間が入れないようになっている。金曜日に家を出る

ときに家のキーも置いて来たので、部屋番号をプッシュして涼子を呼び出す。しかし、少し待っても応答がない。しばらくして、もう一度プッシュして呼び出す。応答がない。出かけているのかなと考えたが、月曜日のこの時間は、自分の部屋で仕事に没頭しているはずである。そのとき、背後から入って来たマンションの住人が、自分の家のキーでセキュリティキーを回して入口のドアを開けて入って行こうとする。眞木は、咄嗟にその住人の後ろについて開いたドアに滑り込んだ。前に入った住人は怪しみもせず、エレベーターホールに向かう。眞木もそれに続いて、エレベーターに乗って四十階に向かった。家のチャイムを鳴らす。しかし、反応がない。何度も鳴らす。反応がない。これは出かけているとしか思えない。一階のホールで待つしかないなと思いい、再びエレベーターに向かおうとした。そのとき、ドアの横に

かかっていた表札がなくなっていることに気づいた。「これは、
どういうことだ。何かあったのかな」と少し不安が芽生える。

一階のホールに降り、隅にある受付カウンターで何か変わったことはなかったか聞いてみることにした。カウンターに近づくのと、いつも見かける五十過ぎと思われる女性が笑顔を見せた。「すみません。四〇一九号の眞木ですが、家の表札がなくなっているのですが、四〇階で何か変わったことはなかったですか？」
「少々、お待ちください。」と言ってカウンターの中で、調べ出した。しばらくして、

「お待たせしました。四〇一九号室は昨日引っ越しされましたね。そのため表札がないのだと思います」

「ええっ、なんて言いました？ そんなはずはない！ 僕が四〇一九号の住人の眞木です。僕が引っ越すわけがないのです！」

眞木は、気が動転して頭の中が真っ白になり、何を言ったがいかも分からない。

「でも、昨日、代理と言われる方が来られて家のキーを置いて行かれましたよ」と言っていてキーを見せる。

「そんなことがあるはずがない。僕に黙って家内が引越すわけがないですよ。家の中を見せてくれませんか」と叫ぶように言った。

「まだ新しく入居される方は来られていませんが、すでに所有権が変わっていると言われましたので、その方の承諾がないと中に入ることはできません。」

「誰なんですか、その所有者というのは？」

「吉田様と言われますね」

その名前を眞木が知る由もない。

「その人の連絡先を教えてください！」

「それは、個人情報になりますので、お教えするわけには参りませ
ん。」

「参りましたね。では、とにかく家の中を見せていただけませんか。引越したというなら、家の中は空っぽなのでしょう。空っぽの家を見るくらいで、問題になることもないのではないですか？」

「私どもでは中に何かあるのかはわかりません。とにかく所有者の承諾なく、入ることはできません」

「では、その吉田さんに連絡して、元の持ち主の眞木がお話したいと言っていると言ってもらえませんか」

「分かりました。少々、お待ちください」と言って電話をかけてくれた。

「もしもし、西新宿タワーのフロントをしています柳谷と申しますが、吉田様をお願いします。．．．．．はい、そうです。眞木様という方が来られて、吉田様とお話ししたいとおっしゃっているのですが、．．．．．、そうですか。分かりました」と言って電話を切った。

「ええっ、なんで電話を切ったのですか？」

「吉田様は、今おられないとのことですよ。代わりに出られた方がおっしゃいますには、すでに眞木様とは売買契約も済んでおり、お話しすることはないと思います、とのことでした」

「そんなはずがあるわけがないですよ。ここの家は、家内と僕との共同名義なのですよ。僕が売っていないのに売買契約が成立するはずがない」

「とおっしゃいまして、私どもでは内容までは分かりかねま

すので、「逆に眞木のことを不審そうな目で見ろ。」

「では、家内は何と言って出て行ったのですか？」

「特に何もおっしゃらず、お連れの方と急いで駐車場に向かわれたようでした」

「それで、出て行ったとき、家内はひとりだったのですか？」

「いえ、三、四人の男の方と一緒でしたね」

「ええっ、ではその三、四人の男たちに拉致されたのですよ、それは！」

眞木は、これは何らかの事件に巻き込まれたのだと思った。しかし、フロントの女性は、

「しかし、出て行かれるときは、その人たちと話しながら出て行かれたので、拉致とかいうようなことではありませんでした」と事件性を否定する。

「今、キーをひとつ置いて行ったと言いましたよね。そのキーはもともと僕のです。見せてもらえませんか？」

キーを取られるのではと警戒しながらも涼子が置いていったキーを改めて見せてくれた。キーにはキーホルダーがついたままになっており、見慣れない像の飾りがついている。これは涼子のもでもないし自分のものでもないと思ったが、眞木は咄嗟に、「すみませんが、これは僕のキーホルダーなのでキーは差し上げますが、キーホルダーは頂きますよ」と言った。女性は、少しどうしたものかと迷ったあげく、

「そうですか、キーをいただければ、キーホルダーは持っていていただいても結構です」と言ってくれた。

それ以上は何も情報が得られず、マンシヨンを後にするしか

なかった。あまりの出来事に、眞木の顔からは血の気が引き、身体感覚が薄れて立っているのがやっとだった。歩道に出ると、眞夏の太陽が照り付け汗がふき出るが、暑いという感覚が起こらない。何かを考えなければならぬと思うものの何をどう考えればいいのか分からない。結局、代々木公園に向かってトボトボと夢遊病者のように歩いていった。

そして、マンションを出てから長い時間が過ぎ、眞木は代々木公園の木立の中を歩いていった。頭の中には何も浮かんでいないが、目の方向は浩さんの蒲鉾型の小屋に向かっていった。さらに公園の歩道を歩いていくと、

「あんた、ほんとうに帰って来たんだね。もう帰ってこないだろうって、みんなと話していたんだよ」と木陰から声が聞こえて来た。美紀だった。振り返ってみると、木立の中に蒲鉾小屋が見え

る。気が付かなかったが、小屋の前まで来ていたのだ。連中は小屋の前でわずかな総菜を並べて食事をしているところのようである。

「やあ、」と言ったが、その後の言葉が続かない。

「どうしたんだ、なんか死んだような顔色しているぜ。どうしたんだい？」と山さんが声を掛ける。

「そうですか、」と言っても後が続かない。

「お前も食べるかい、先ほど山さんが自分の小屋から食べ物を取って来たんだ」と浩さんが言う。

「あんた、家に帰ってしこたまお金持って来た？」と美紀が訊く。

お金という言葉に真木の脳が反応した。

—そうだ、僕は今何も持っていない。家がなくなった上に、お金

も持っていない。

「ああ、皆さん、僕は何も持っていないホームレスになってしまいました。お金も何もありません」と小さな声で言った。

「あんたは、公園の西側の高層マンションの住人だって言っていただろ、家がなくなったとはどういうことだ？」

山さんが真木の顔を覗き込むようにして言った。こう言われて、マンションの家の中を思い浮かべた。そしてリビングのソファに座って微笑んでいる涼子の優しい笑顔が思い出された。その途端、真木の目から涙が溢れ出て来た。もはや涙を止めようとも思わない。

「おお、やくざも恐れない男がどうした？ ゆっくり話してみな」と浩さんが言う。そう言われると、よけいに涼子との充実した生活が思い出され、さらに涙があふれて来て、どう話したらいい

いかも分からない。しばらく涙にくれていたが、徐々に冷静さがよみがえってきた。

—涼子が自分に黙って、急に引越しをするはずがない。それもフロントの女性の話では、三、四人の男たちと一緒に出て行ったと言った。

—これは、なんらかの事件だろう。

—しかし、今のところ拉致されたという証拠はない。しかも、僕は自分が眞木健二であるということを証明できるものさえ持っていない。警察に行っても、この突拍子もない話をまともに聴いてくれるとは思えない。

—そこまで考えて、今日マンションに行ってからのこと話を話した。そして、これは何らかの事件に巻き込まれたのだと思うと言った。そして、

「僕も完全にホームレスになってしまいました。皆さんのお仲間に入れていただくしかなくなりました」と浩さんと山さんに向かって言った。

「何がどうなったか分からんが、人間生きていたらいいこともあるんじゃないかい。しかし、そうだとすると奥さんのことは心配だな。今まで、一緒に生活していて、もめ事とかなかったのか？」と浩さんが言う。

「ないですよ！ 家内が黙って家を出て行くというようなことは、考えられない。仕事にしても、コンピューターのシステムを作る仕事で、人から恨みを買うようなことはありません。一体全体、どうなってしまったのか、」と言って再び涙が浮かぶ。

「あんたも、たいへんなことにあっただのは分かるけど、私たちは、あんたがどうにかしてくれると思って待っていたんだよ。今

の話じゃ、ここに居てもどうしようもなく日干しになってしまふということ？ 私は、ルンペンになる気はないわよ。どうする、亮太」

涙を浮かべている眞木を無視して、美紀は亮太を見た。

「そうだな、こいつらを当てにしてもどうしようもないようだな。しかし、今歌舞伎町に戻ったら奴らに見つかってしまう。誰か匿ってくれる奴を探してみるか」と言っ、携帯電話を取り出した。

「そうね、私も誰かを探してみるわ」と言っ、同じように携帯電話をかけ始めた。すると、山さんが、

「そんなにいるいろな人に喋ったら、ここの情報が広まって逆に俺たちが探し出されてしまふじゃないか」と言っ。

しかし、それを無視して、ふたりは携帯電話をかけ続けている。

そして、

「だめだな、俺の達にはすでに手が回っているようだ。ほかの知り合いで誰かいい奴がいないかな」

亮太が携帯電話を見つめながら考え込んだ。

「私の方も、いいと言ってくれる友達がいらないわ。ママが先回りして聞いたみたいだわ」と言っただけでため息をつく。

「お前ら、もともと東京の人間ではないだろう。地元に戻ったらどうだ？」と山さんが言った。

「帰るにしても、金はないし携帯の電源もなくなってきている。どうすりゃいいんだよ」

亮太が山さんに食って掛かる。

「仕方ないな、お前らもここでホームレスになるしかなさそうだな」

「くっそう！　なんてことだ」と言いながら、また電話しようとする。

「私も、虫けらのような生活は嫌よ。なんとかならないの！」
美紀は泣きそうな顔をする。

「あんたら、ホームレスになるのがよほど嫌なようだが、俺たちは、それほど虫けらのような生活をしている訳でもないぜ。街には何でも落ちてている。それが分かれば都会でもゼロ円生活ができるわけで、けっこう気楽なもんだ。みんなホームレスになるかならないかは紙一重みたいなもんだ。好きでやっている奴はいないが、考え方次第で人生を捨てる必要はない」と浩さんが言った。

「何を気取った話をしているんだ。ルンペンのくせに！」
亮太が怒って浩さんを睨み付ける。

「ルンペンというのは、ボロ服という意味だが、へボロは着ても心は錦」という歌があるじゃないか。心豊かになれるかどうかはボロを着ているかどうかじゃない。お前の気持ちの問題だ」

「お前、何か小理屈を並べているんじゃないやねえよ！」と言って浩さんに詰め寄った。

「まあ、とにかく寝るところと食い物が無いわけだろ。どうしたらいいか教えてやるから、そんなにカツカするな！」

浩さんが逆に亮太を睨め付けた。亮太は、その迫力に押されてうなだれるしかなかった。それを見ていた美紀も諦め顔でうなだれた。

事情は違うが眞木と亮太・美紀のカップルも本当のホームレスになってしまった。浩さんの案内で渋谷の駅に出かけた。まず

は小屋を作る材料を調達するためである。新宿に比べてやくざの島の違う渋谷の方は安全だろうと勝手に見込みを付けて渋谷に出かけたのである。渋谷駅の周辺は都市再開発計画に沿って様々な工事が行われている。工事現場では、コンクリートが固まるまでコンクリートを覆う養生シート、建設中のビルの上方から落ちてくる落下物から歩行者を保護するための安全ネット、足場のパイプ・足場板などホームレスの小屋を作るための材料が満ち溢れている。四人はじっくりとそれぞれの現場を見てまわる。そして、その中のひとつの現場に浩さんが入って行った。ヘルメットを付けた現場の人と何かをしゃべっている。しゃべりながら、何かを指している。残された三人は、現場の外でじっと見つめている。

しばらくして、浩さんが三人に手で合図をした。三人とも中に

入って行く。

「あそこにあるブルーシートと向こうに積んであるパイプをく
れるそうだ」と指さしながら言った。四人は、ヘルメットを付け
た現場監督に礼を言っ、浩さんが指さした方に向かった。そこ
には、すすけたブルーシートやくすんだ緑色のプラスチック
シートが積み上げられていた。

「見たとおりこのシートは現場では使い物にならない。でも俺
たちの小屋を作るにはうまく使えば十分だ。現場の人たちはこ
んな大型のゴミは処分にも困っている。持ちつ持たれつとい
うわけだ」と浩さんが説明してくれる

持って行っていいと言われたブルーシートやパイプの中から、
なるべく使えそうなものを選んで担ぎ出した。たいへんな量で
一度にはもって帰れそうにない。美紀と亮太もブツブツ言いな

がら持てるだけのものを持って帰ることにした。一度手で持って帰った後、浩さんの知り合いにリアカーを借りることにした。こうして、夕方までに小屋の材料を代々木公園に運び込んだ。小屋を作るのは明日にして、もう一晚浩さんの小屋に泊めてもらうことにした。山さんは、代々木公園に“引っ越して”来る気はなく、明日にでも新宿中央公園に戻るつもりでいる。

浩さんが調達してきた食材を使って分担して料理を作る。これから毎日、こんな生活をおくるのかと思っても、眞木にはまだ現実感がない。つい三日前までは高層マンションに住んで、経営コンサルタントをしていた。そして最愛の涼子と東京の夜景を見ながら夕食をしていた。それがどうして今、代々木公園でホームレスをしているのか、そのあまりの変化が現実とは思えないのである。暗くなった公園で、近くの街灯のわずかばかりの光の

中で、食事をしているとあまりに悲しく涙があふれてきた。美紀と亮太も同じ境遇なのだが、彼らはひとりではなく、この現実を分かち合える人がいるだけで大きく違うなと眞木は思った。食事を終えて蒲鉾小屋の中でダンボールを敷き詰めた床の上に敷いた布切れの上に横になったがなかなか寝付けない。暗い小屋の中で、再度今日のことを思い直してみた。

―なぜ急に涼子がいなくなったのか。フロントの女性は、三、四人の男たちと一緒に話をしながら出て行ったと言った。自分が関わったやくざであろうか。いや、そんなはずはない。金曜日に家を出てから、今日帰るまで、連中は僕があこのマンションに住んでいることは知らないはずだ。

―では、涼子に何か事情があって出て行ったということになる。僕の知らないところで、大きな取引などに失敗して、家を売る羽

目になったのか。しかし、それにしてもそんなそぶりは一度も見
ていない。仕事の関係とは思えないが、涼子が勤めているCCT
ソリューションズに連絡してみるか、何かわかるかもしれない。
—先週、公園で山さんと話をしたときは、自由に生きているホー
ムレスなどと思い、その真似事をしてみようと思ったが、実際に
本当のホームレスになったら何とかして元に戻ろうとしている
自分がある。ずっとシャカリキになってひとり仕事をしてき
たので自分には、本当に心を打ち明けられる友達がない。仕事
の関係者に連絡したら、なんか道が開けるだろうか。いや、この
突拍子もない顛末を信じて手を差し伸べてくれる人がいるとは
思えない。しかし、今やっているSNシステムズには、とにかく
連絡を入れておく必要があるな。

ここまで考えて、心が少し落ち着いてきたように感じた。浩さ

んが言うように、生きていれば到る所に青山ありかもしれないなど思ったら眠気が一度に押し寄せて来た。

木立の中で眠りに落ちようとしたそのときである。急に外が明るくなり、蒲鉾屋根が白く輝いたと思った瞬間、「ガガッ！」と音がして屋根がめくれ飛んだ。木立の間に夜空が見えたと思う間もなく、幾つもの強い照明が寝ている六人を照らした。

「うわっ、なんだ！」

全員がびっくりして起き上がるが、何が起こったのか分からない。照明の向こう側から、

「動くな！」と大きな声が飛んできた。照らされた照明の中で、照明の向こう側を探ろうとするが、眩しくて判然としない。照明の向こう側で話声がする。

「こいつらか？」

「そうです。こいつが空手の使い手です」

そして、照明が近づいて来たかと思つた瞬間、眞木の顎にパンチが飛んできた。照明で目が眩んでよけきれず、パンチをくらつて仰向けに倒れる。素早く起き上がり、腕で影をつくりながらかまえる。

「動くなと言つただろ！」

そう言いながら筋肉質とわかる男が照明の中から現れた。手には拳銃が握られている。周りには五、六人の男が取り囲んでいるようである。美紀は足がすくんで声も出ない。

「この女がブツを取つた奴で、このチンピラが女のひもです」別の声が拳銃の男に言った。とその瞬間、「バシーン、」という音がして美紀が倒れる。男に平手で殴られたのだ。

「何をしやがる！」

亮太が美紀をかばおうとする。次の瞬間、亮太の鳩尾に男の蹴りが入り、前のめりに倒れる。

「ここで殺るのは人目がある。顔をかしてもらうぜ」と言って拳銃をかまえながら歩けと合図をした。

尾沢組

ここは、『クラブ恵』の裏にあるビルの地下室である。市役所通りから離れており、飲食店もなく人通りはまばらである。地下室は倉庫のようになっており、小さな蛍光灯だけの薄暗い空間の中に多くの木箱が積まれている。ビルには『新宿金融』と看板が出ていたが、尾沢組の本拠だろうと眞木は思った。

「まずは盗ったものを返してもらおう」

ゆっくりとした口調で組長の尾沢錬次が言った。壁際に、眞木、美紀、亮太と山さんがかたまるように立っており、それを先ほどの六人の男たちと組長の尾沢錬次が取り囲んでいる。インターネットカフェの前で会った男たちが山さんのことも覚えていて、一緒に連れて来られたのだった。六人の男たちは、拳銃と鉄パイプやナイフを持って威嚇している。男たちの後ろから、女の声が出た。

「美紀！ よくも私を裏切ってくれたわね。盗ったものをさっさとお出し！」

『クラブ恵』のママの鈴木恵である。美紀は亮太の後ろに隠れるようにして震えている。拳銃を持った男が美紀に近づく。

「さっさと出せと言っているだろう！」

そう言って美紀のハンドバックを強引に引きちぎるようにして

取った。別の男がハンドバックを開けてひっくり返す。中身が床に飛び散った。財布、携帯電話、化粧品などが散らばり、その中に透明のケースの入った小さな茶封筒もあった。拳銃の男が封筒を拾って尾沢に手渡す。と同時に鈴木恵が男たちに割って入って、美紀の横顔を「パーン」と張った。

「あれだけ可愛がってやったのになんてことをするんだい」

「ママ、ごめんなさい。ほんとうにごめんなさい」

美紀は涙を流しながら謝る。

「謝って済む問題じゃないんだよ！」と言って、今度は髪の毛をつかんで顔を殴った。美紀はそのまま床に倒れ込む。泣いている美紀のわき腹を目がけてハイヒールの先が食い込む。「あああ、あ」と悲鳴を上げて転げまわる。

「まあ、ブツが戻って来たんだ。後はどう落とし前を付けてもら

うかだな」

尾沢が眞木らを見まわしながらほほ笑んだ。

「まずお前だ、よくうちの若い衆を可愛がってくれたな。借りは返してもらおうぜ」

眞木の顔をなめるように見ながら言った。

「半殺しにしてしまえ！」と言ったと同時に、鉄パイプが横から頭を目がけて振り下ろされた。咄嗟に身をそらしてかわし、空手のかまえをとる。

「おっと、動くんじゃねえ、動いたら弾を脳天にお見舞いするぜ」

拳銃を持った男が拳銃をかまえる。同時に、後ろからわき腹に蹴りが入る。また別の男がパンチを繰り出し顎にヒットした。たまらず仰向けに倒れる。倒れたところを別の男が頭を目がけて蹴

りを出す。転げまわるようにしてかわす。そして血の出た顎を押さえながら起き上がり、次の攻撃が来る前に、

「ちよつと待て！」と言って中腰のまま指を差し出し、

「お前ら、そのCDが本物かどうかどうして分かるんだ？ た
とえ本物だとしても、ひよつとして僕たちが中のファイルを消
してしまったかもしれない。」と眞木が尾沢を見ながら言った。

「なにっ、お前らこの中を細工したのか」

「調べてみな。どうせお前らが見たところで分からないと思う
がね」

尾沢が男たちを見回す。誰もコンピューターなどいじったこと
がない連中である。俺がやってみようという者がいるはずもな
い。

「くそっ、明日調べて、もし何か細工でも分かったら、絶対にお

「前らの命はない！」と言ったが、尾沢としても、もし客にこのC Dを持って行って、違うと言われたら大恥をかくことになる。その前にチェックできる方法はないかと考え込んだ。そのとき、

「それを持って行って、たとえ中身を開けてみたところで、どのみち最後までたどり着ける奴はいない。それは特殊な暗号だ」と後ろから山さんがかすれた声で言った。

「そんなことは俺たちの知ったことじゃない。渡してしまえば、後は客の問題だ」

「しかし、元々その中に入っていたものと違うかどうかどうかを客も判断できなかったら、お前らが疑われる」となおも山さんが言う。

「何を訳の分からんことを言っているんだ。とにかく明日になれば、お前らの命はないということだ。グダグダぬかすな！」と

言った後、拳銃を持った男に、

「辰、こいつらをふん縛っておけ。絶対に逃がすんじゃないやねえぞ！」
と言って、ママの恵を連れて出て行った。

尾沢が出て行ったと同時に、拳銃の男がゆっくりと眞木に近づいてきた。

「お前、何か言って生き延びようと思ってても無駄だぜ。やくざに逆らって生きて出られるわけがないだろ」と言ったと同時に蹴りが飛んできた。不意を突かれて、蹴りが下腹にめり込む。前に倒れこもうとしたところに顎に膝蹴りが入る。たまらずそのまま、仰向けに倒れる。倒れた眞木を他の男たちが幾重にもパンチと蹴りを繰り返す。痛さを感じながらも、眞木の意識が遠のいていった。

「ううっ、」と眞木がうめき声をあげたのは、それから二、三時間経った後だった。口元が腫れあがり、言葉も出そうにない。右目も半開きにしか開けられないし、身体中が痛む。床に転がされ、後ろ手に縛られ、足首にも縄がかけられていて身動きもできない。

「おい、気が付いたか？ 死んだかと思ったぜ。あんなに殴られてよく生きていたな」と山さんが声を掛けてきた。

「ああ、生きているようだ。山さんは大丈夫かい？」

「あいつら、お前をやりすぎて死んだかもしれないと思ったのか、俺たちはお前ほどやられずに済んだ」

「ああ、それはよかった」

「それにしても腹が減ったな」

「それだけ言えば大丈夫だ」

地下室の蒸し暑くよんだ空気とコンクリートの床のざらざらした硬さが殴られた傷をさらに痛めつける。このままでは殺されてしまうなと思うと、恐怖が全身を覆う。しかし、今のところ逃れるすべがない。

次の日の午後、ここは品川駅の東側に立ち並ぶオフィスビルの中の一室である。尾沢組長が三人の手下を自分の後に控えさせて、恰幅のいい男と広い応接間のテーブルをはさんで向かい合っている。男は、大柄の身体を黒のスーツで包んでいる。年は、尾沢と同じ五十代前半であろうか。

「社長、この前はとんだ恥をかかせてしまった。面目ない。やっつと、例のものを取り戻したぜ」と言って、美紀から取り戻したCDの入った封筒をポケットから取り出して、テーブルの上に

置いた。

「それはよかった。あの時すぐに盗まれたと分かって助かった。尾沢さん、あんたとは今後もいいビジネスパートナーでありたいと思っけていますよ。だいぶ手間取ったようですな」と言いながら、封筒からCDの入ったケースを取り出した。

「ああ、盗んだ奴はすぐに分かったんだが、とんだ邪魔が入って遅くなってしまった。面目ない」

「何度も謝らなくて結構ですよ。ただ、これが本物かどうかチェックさせていただきませよ」と言われ、尾沢は、ぎくっとしたが、「もちろん、どうぞ調べてください」と平静を装って言った。

社長と言われた男は、電話をとって、

「宮下君、例のCDが手に入った。パソコンを持って儂のところに来てくれんか？」と言った。

しばらくして、背の高い二十代後半か三十代前半と思われる若者がノートパソコンを持って部屋に入って来た。

「これが例のCDのようだ。中身をチェックしてくれ」と言われ、若者は、パソコンを起動させ、CDをCDドライブに入れ込んだ後、素早い動きで、キーボードを叩いていく。そして、

「これは、おそらく間違いないと思います。フォルダーに『B2030』と名前が付けられています。ただし、中のファイルはパスワードが必要で今すぐには開けられません」

「どのくらいで開けられるかね？」

「そうですね、一、二時間いただければ、何とかなるかと思いません」

「尾沢さん、悪いが一、二時間待ってもらえませんかね」と尾沢に訊いてきた。尾沢は、ブツを渡してすぐに金をもらって帰った

いところであつたが、負い目があるため、

「仕方ないですね。では少し待ちますが、金はきっちり用意できているのでしょうか？」と言った。

「あんた、儂が一度でもごまかしたことがあるかね」
そう言って、机の上に置いてある鞆を指さした。

じりじりしながら一時間ほどが経ち、宮下がパソコンを持って入って来た。

「社長、ファイルは開けることができましたが、中身は膨大な数字の羅列が並んでいるだけです。これが何を意味しているのかは分かりません。」

「なんだと！　どんなものか見せて見ろ」

宮下が、パソコンを開いて、フォルダーの中のひとつのファイルをクリックした。一〇桁に区切られた数字が横に五〇個ほど並

び、それが下の方に延々と羅列されている。

「なんだ、これは！ 『Bシステム』の起動プログラムではないな。尾沢さん、あんた間違いない、お願いしたものを取り戻したのかね。何か適当なものを持って来たんじゃないのかね。これはどう見ても目当てのプログラムじゃあない。」と言って、訝しげに尾沢の方を見た。

「俺たちは、盗んだ奴を捕まえて、そいつが持っていたCDを取り戻した。中身のことなど分かるはずがないだろう」

「盗んだ奴が、何かの目的をもって盗んだとしたら、中身を入れ替えたかもしれないだろう。そんなことも確かめないで持って来たのかね」

そう言われて、尾沢は昨夜、眞木が言った言葉を思い出していた。そして仲間の男が、「中身は、誰にも分からない暗号だ。」と

言ったことを思い出した。

「盗んだ奴の仲間が、それは誰にも解けない暗号だと言っていた。あんたらが分からただけで、中身は本物だ。とにかく金は払ってもらおう」

尾沢が社長を睨み付けると同時に、二人の手下もぐつと身を乗り出して威嚇する。

「なに！　これは暗号だと言ったのか、それはどんな奴だ？」

「とにかく、金を払うのか、払わないのかどっちだ？」

「分かった。ただしその男に会わせてくれ。そうしたら本物かどうかわかるかもしれない。本物だったらそのとき金を払う」

その後、尾沢は仕方なく、品川の男らを連れて歌舞伎町に戻った。すでに夕方近くであるが、尾沢組のビルの地下は、外の蒸し

暑い空気が流れ込んだように涼しさを感じさせない。クーラーの効いたそれぞれの車内から降りた六人は、たちまち汗でシャツが濡れて行くのを感じる。手下のひとりがカギを回して、地下倉庫のドアを開ける。「キイイツ」と頭に響くような音がしてドアが開いた。中は薄暗く、外から来た者はすぐには目が慣れない。荷物が積まれた倉庫の奥に四人の男女が後ろ手に縛られて壁にもたれかかって座っているのが暗闇の中に微かに見える。四人は何人もものが入って来たのに気づき、一斉に顔を上げた。「お前ら、まだ生きているようだな。まだ死んでもらうには早いようだからよかったぜ」

尾沢を先頭にして何人ももの男が近づいて来る。

四人は、たくさんのやくざが入ってきたのを見て、またひどい暴行を受けるのかと恐怖に怯える。

「社長、こいつが妙なことを言った奴です」と言っつて、大柄のスイツの男を手招きした。こいつと言われたのは、山さんである。大柄の男が山さんに近づいてきた。そして、腰を折るようにして、ゆっくりと山さんの顔を覗き込んだ。

眞木は少し顔を上げて、斜め下から男の顔を見た。どこかで見ることがあると直感で思った。そして、次の瞬間、「あつ、」と声を上げそうになったが、その声を咄嗟に飲み込んだ。と同時に顔を男からそむけて下を向いた。

この大柄の男は、SNシステムズの林源太郎だと思った。林源太郎はSNシステムズのオーナー社長である。今依頼を受けている仕事で初めて大崎の会社に行ったときに、一言挨拶を交わしただけであるが、大柄な色黒の男の顔は鮮明に覚えている。オフイスで見る柔和そうな雰囲気とは違い、ここにいる男はほかの

やくざと同じようにならず者の目をしているが間違いはないと思った。しかし、「これはどういついことだ。どうして普通のIT企業のオーナー社長とやくざが繋がっているのだ。頭の中が混乱して思考能力が付いて行かない。」

「あんた、どこかで見たことがあるような気がするが、どこで見たかな？」と林社長が山さんに言った。山さんは、下を向いて俯いたままである。

「盗んだCDの中身が、何かの暗号だと言ったそうだな。なぜ中身が暗号だと分かるのだ。教えてもらえんかね」
山さんは俯いたままである。

「おい、黙っていちや困るんだよ。なんとか言え！」
尾沢が、山さんの胸元を掴んで言った。

「わ、分かった、話してやるから、手を放してくれ。それにこの

縄をほどいてくれ。痛くてかなわん」

「てめえ、どういふ状況か分かっていないようだな」と言って尾沢が山さんを殴ろうとする。

「まあ、まあ、年寄りをそんなにいじめてはいかん。縄をほどいてやれ」と言ってお林社長が止める。そう言われて仕方なく山さんから手を放して、手下に縄をほどかせる。縄をほどかれて、山さんはゆらゆらと壁にもたれながら立ち上がった。

「ああ、ひどい目にあつた。あんたはただのやくざじゃなさそうだな。なぜ暗号だと分かつたかつて、それは儂がその暗号を解いたからだ。お前らがいくらやっても、解けないがな」

「なに！ あの膨大な数字の羅列が暗号で、その暗号をお前が解いたというのか」

「そうだ、暗号アルゴリズムをかじったことのあるものなら、あ

れが暗号であることはすぐに分かる。ただし、現代の暗号は難解なアルゴリズムを使っており、作ったもの以外に暗号を解くのはほとんど不可能だ」

「お前は、一体何者だ？　公園に住みついているホームレスだと聞いたが、とてもホームレスの話するような話ではない」

「ああ、そうだ。僕は、街でエサをあさっているホームレスだ。

以前、少しだけコンピューターに関わったことがあるだけだ」

「あれは、コンピュータープログラムのはずだ。お前が解いたというのなら、膨大な数字の中から、何かのプログラムが現れたというのか？」

「ああ、そうだ。あれは何か大きなシステムを動かすための起動プログラムではないかと思ったな」

「なに！　それでは、本当に何かのプログラムが隠されていた

のか！」

「そうだと言っているだろう。教えてやるから、わしらを逃がしてくれ。儂はあんなものに興味はない」

「分かった。組長、このホームレスを二階の事務所に連れて行ってくれ。そこでCDの中身を解析させよう」

「教えてやるから、こいつらも逃がしてくれ」

「ああ、CDの中身がきちんと分かっただらな、」

そう言ってほかの三人を一瞥したが、林社長は出て行くまで真木の上に気が付かなかった。というより殴られて顔がひどく腫れている真木に注意を払はなかったのであった。

やくざと林社長の一団が山さんを連れて出て行き、再び静寂の中に取り残された。地下倉庫には、カギがかけられ、再び真木

と美紀・亮太のカップルは閉じ込められた。眞木は、林社長と山さんの話を聞きながら、一体全体どういふことなのか考えた。

―SNシステムズは、一般企業を相手にビジネスをしている普通のIT企業である。やくざと繋がるようなビジネスをしていとは考えてもみなかった。今まさに自分が仕事を請け負っている会社の社長である。旧知の原田専務も吉田部長も紳士的に対応してくれていた。

―しかし、ありえないことが現実にも目の前で進行しているのである。今までの経緯を振り返ってみると、どうやらSNシステムズか、あるいは林社長個人が何か大きなシステムに関わっており、それに関する情報をこの尾沢組を使って盗んだか、あるいは強奪してきた。つまり、あのCDには、やくざを使ってまで手に入れたかった情報が入っていたことになる。

—山さんがもう一度あのCDの暗号を解けば、林社長は欲しかった情報を手に入れることができるはずである。そうすれば、我々には用がない。素直に開放してくれるであろうか？

—いや、情報を手に入れたとしても、やくざを使って、おそらく非合法で手に入れたはずであり、解放すればそのことが発覚する可能性がある。またCDを盗んだ美紀と亮太と追手を邪魔した眞木を、尾沢組がこのまま何もしないまま開放するとは考えづらい。

二時間ほどして地下倉庫のドアが開き、辰と呼ばれていたやくざともうひとりの男が山さんを連れて入って来た。辰は再び拳銃を持っている。

「教えてやったら逃がしてやると言ったじゃないか！ お前ら、

約束と違うぞ」と山さんが悔しそうに辰に言う。言う間もなく、辰に腰を蹴られて壁際まで転がってきた。腰に手を当てて起き上がるうとする山さんに、

「お前、やくざが約束を守ると思うのがバカだろう。今夜、お前は東京湾のゴミの中に埋められてこの世とおさらばだ。ホームレスとチンピラがいなくなっても誰も探す奴はいねえ。こういうのを自業自得と言うんじゃないかねえのか？ 俺たちは、『だな様』からしこたま金が入り、お前たちは地獄にまっしぐらだ。この世はついている奴とついていない奴のどちらかだな」

笑いながら、もうひとりの男に山さんを縄で縛らせた。

山さんが縛られると、二人のやくざがドアにカギをかけて出て行き、地下倉庫はまた静寂に包まれた。美紀のすすり泣く声が重い空気をより重く感じさせる。

「このままじゃ、私たち殺されてしまうわ。ねえ、どうにかして逃げる方法はないの？」

美紀が亮太と眞木を涙にくれながら見る。

「くそっ、．．．．．」と言った後、それ以上に亮太も返す言葉を思いつかない。眞木も言葉を発する力が失せていく感覚の中にあり、絶望が四人を覆っていった。

その日の深夜、眞木と山さん、美紀と亮太と二人ずつに分かれて車のトランクに入れられた。狭いトランクの中で身動きもできず、どこに向かっているのかも分からない。

二台の車には、それぞれ三人の男が乗り込んでおり、組長の尾沢と拳銃の辰が分かれて後部座席に座っている。車は、新宿ジャンクションから首都高速に入り、東京湾方面に向かう。

「レインボーブリッジを渡って、お台場で降りるぜ」

尾沢が運転している手下に言う。

「分かりました。お台場から海底トンネルを通ってゴミの処分場に行くんですね」

「そうだ、高速を降りたらサツには気を付けろ」

「分かりました。任せてください」

四人をまとめて葬り去ると聞かされ、手下のやくざらにも緊張が走っている。

二台の車は、お台場を通り過ぎ、第二航路トンネルを抜け、ゴミ処理施設のある島に入った。ここはその昔、「夢の島」と呼ばれた埋め立て地である。

「この道を真っすぐ行け。橋を渡ると新しい埋め立て地がある」

「その埋め立て地で連中を処分するんですね」

「よけいなことを言うな。最近サツの警戒があるらしい。気を付けて行け」

「へい、分かりました」

車はさらに進んで、埋め立て地の先端へと入って行く。対岸の千葉にある袖ヶ浦工業地帯の光が幾重にも輝いているのが見える。毎日一、五〇〇トンものゴミが埋められていく広大な場所である。埋め立ては、ゴミを埋めた後に土で覆い、その上にまたゴミを埋め立てさらに土で覆うというように、ゴミと土を交互に積み重ねていく方法で行われる。そのために埋め立て地には、パワーショベル、ブドーザーなどの重機が何台も置かれている。

尾沢組のやくざは、埋め立て地の先端に着いた後、置かれていたパワーショベルを動かして穴を掘る。遠くの工業地帯の光と近くの街灯を頼りに作業が進む。暗闇の中ではあるが、巨大なパ

ワーシヨベルであり、すぐに大きな穴が出現した。

「よし、連中を出して、穴に放り込め」と尾沢が手下に言った。トランクを開けると、それぞれ二人ずつが、身動きが取れずぐったりと重なるように横たわっている。四人とも恐怖で言葉も出ない。やくざが二人一組になって、真木らを一人ずつトランクからずり出して穴に投げ込んだ。穴は二メートル以上あり、縄で縛られているため投げ込まれたら這い出すことはできない。抵抗する間もなく、あっという間に四人とも暗闇の穴底に横たわっていた。少しの間を置いて、ワーシヨベルの機械音がしたかと思つと、巨大な量のゴミが降ってきた。

しばらくして、ワーシヨベルの機械音が止み、埋め立て地は、少し前のような静けさを取り戻した。そして、二台の車がテールランプの赤色の光をきらめかせながら遠ざかって行ったが、そ

れに注意を払ったものはいなかった。埋め立て地に寄せる波の音だけがむなしくそれを見送っているようであった。

変調

数日後、皇居の横の首都高速を新宿方面に向かって黒塗りの乗用車が疾走していた。夕方の時間で車の数が増えているが、渋滞になることなくスムーズに流れており、その車が赤坂見附のカーブに差し掛かった。後部座席では、小柄な老人が斜め前方を見つめながら何かの思いにふけている。そのとき、老人の携帯電話が鳴った。背広の内ポケットから取り出して電話に出る。

「もしもし、」と老人が小さな声で電話に話かけた途端、自動車に急ブレーキがかかり老人は前のめりになって前の座席に頭を

ぶつけ、携帯電話は前方に飛んでいった。運転手は必死に車の態勢を立て直そうとするが、カーブに入っていたため制動が効かず、車は横倒しになり、そのまま何回も回転しながら高速道路の側壁に激突した。衝突した衝撃であっという間に、車は真っ赤な炎に包まれてしまった。

各テレビ局が、夕方のニュースでこの事故を報道した。その報道によれば亡くなったのは、後藤甚太郎衆議院員、七十三才であった。後藤議員は、与党内ではタカ派の大物で元防衛大臣であった。日本の安全保障に独特の見解を持っていた人物である。事故現場には、急ブレーキの跡が残っており、長年後藤議員の運転手を務めてきたベテラン運転手が、高速道路のカーブでなぜ危険な急ブレーキをかけたのかという話が繰り返されていた。

次の日の正午過ぎ、東京メトロの運転手・南田信二は、南北線の四谷駅を永田町に向けて出発させた。正午過ぎということでは、車内は空席が目立つほどである。東京メトロでは、自動運転システムが使われており、ＡＴＯ出発ボタンを押せば列車は自動的に加速し、永田町までの距離に合わせて減速し停止するのである。この自動運転システムは地上の管制室でモニターされており、異常が生じたときには地上からも制御が可能である。

永田町までは二分足らずで到着するため、加速したらすぐに一定速度に切り替わるはずである。ところがＡＴＯボタンを押した後三十秒を過ぎ、一分を過ぎても加速を続けている。南田は咄嗟に手動運転に切り替える。ところがＡＴＯのランプがついたまま手動に切り替わらない。何度も切り替えボタンを押すがＡＴＯランプは消えず、列車はますます速度を上げる。すでに暗

闇の向こうに永田町の駅の光が微かに見える。通常の数度である六十キロをはるかに超えている。危険速度になれば自動列車停止装置（ATS）が作動して緊急停車するはずである。しかし、南田の期待を裏切って、列車は一〇〇キロを超す猛スピードで永田町駅を通過した。このとき、管制室でも異常に気付き、管制室側からもATSの作動を促すが、無情にも、このオペレーションに反応がなく、列車は猛スピードのまま溜池山王駅に向かって疾走している。抵抗むなしく益々スピードを上げる列車に恐怖に覆われ、南田の脳裏にはもはや逃げ出すことしか浮かばない。尋常でないスピードと永田町を通過してしまったことで、後方の乗客もその異常なスピードの列車に乗っていることに恐怖に襲われている。恐怖におののいている間に、暗闇のトンネルの向こうに赤い光が見えた。それは溜池山王駅に停車中の先発列

車である。あつと言う間に、前方の列車のテールランプが近づいてくる。南田は地下鉄の運転業務を放棄して、運転席から後方の車両内に飛び出し、

「ぶつかるぞ！ 伏せろ！」と大声で叫んだ。

とそのとき列車に急ブレーキがかかり、車両に乗っていた人々が前方にはじかれたように倒れた。しかし、列車が止まることはなく、次の瞬間、列車は、「ガシャーン！」という大音声とともに停車中の車両に衝突した。

夕方のテレビでは、各局がすべての番組を取りやめて、この地下鉄事故の報道を流している。事故の詳細は不明としながらも、死者は一人、重軽症者多数とテロップが流れている。現場近くでレポートしているアナウンサーが、テレビカメラに向かって語りかけている。

「大変な事故に巻き込まれ、ご覧のように多くの方が担架に乗せられて運ばれています。多くの重軽傷者が出たようですが、今のところ死者は一人という情報が入っています。列車は四谷駅を出た後スピードを落とすことなく、永田町駅を通過して溜池山王駅に停車中の先行列車に衝突した模様です。また乗っていた人によりますと、衝突の直前に急ブレーキがかかり、衝突の衝撃が和らげられたという情報もあります」

さらに、画面には、溜池山王駅の外から現場の様子を映している映像が流されている。溜池山王駅は赤坂にあり、首相官邸とNTT本社の間にある。数え切れないほどの消防車、救急車、警察車両が外堀通りを埋めるように停まり、無数の赤いランプが点滅している。地下鉄の出口では消防士が入れ替わり立ち代わり出入りしている。

夜七時になり、画面が首相官邸に変わり、廣田首相の声明が流された。

「本日、正午過ぎに首相官邸の隣にある溜池山王駅で列車の衝突事故が起きました。すでに報道されている通り、一人の犠牲者と多くの重軽症者を出すたいへん痛ましい事故です。政府といたしまして、行方不明者の捜索と事故処理に全力で当たっているとところでございます。また、早期の復旧を目指すよう東京メトロに指示を出したところでございます。……」

廣田首相の話が続いており、多くの視聴者が注視していたそのとき、突然、画面が消えて真っ黒になった。しばらくして真っ黒の画面に白色のテロップが流れた。

「日本のコンピューターシステムは、我々の手の中にある。我々はどのコンピューターシステムにも侵入して今回のような

事故を起こすことができる。つまり、日本国は我々の支配下にある。『太陽の国革命』」

この犯行声明を受けて、直ちに首相官邸で国家安全保障会議が招集された。メンバーは、廣田首相以下、麻川副総理、野島総務大臣、河島外務大臣、小寺防衛大臣、世戸経済産業大臣、石野国土交通大臣、菅岡官房長官、小此田国家公安委員長である。廣田首相は、自分の話の途中で画面が消えてしまった上に、テロの犯行声明が被って流されたことで、面目がつぶされて怒り心頭である。

「よりによって官邸の隣でテロが起きた上に、儂の話を遮って犯行声明を流しおった。小此田委員長、いったいどこの連中がこんなことをしたのだ。見当はついているのだろうか」

「さっそく犯人の洗い出しにかかっています。犯行声明で『コンピューターを乗っ取った』と言っていますので、コンピューター犯罪の専門チームが主体になって捜索に当たっています」

「実際問題、地下鉄のコンピューターに侵入してテロを起こすなどできるのか？ 石野大臣」

「東京メトロの話では、列車運行管理システムは、運転指令所と駅や車両基地をオンラインで結んでいる。しかし、このコンピューターシステムに外部から侵入するのは不可能だと言っています」

「ネットワークでつながっているのじゃ簡単に侵入されてもおかしくないじゃないかね。本当に連中が言った通りだったらどうするのだ？」

「もう一度確認します」

「しつかりやってくれ。また起こったらどうするのだ？」

「総理、犯人の声明はあったが、まだ何かの要求があったわけではない。少し冷静になって対応した方がいいのではないかな」と麻川副総理が言った。

「あんた、そんなのんびりしたこと言っていて、また起こったらどうするんだと言っているんだ。もたもたしているとさらに支持率が下がってしまうぞ」

「あなた、今支持率のことを心配してどうするのよ。まったくどんな認識なのか分からないわね」と野島大臣がかみつく。

結論が容易に出る問題ではなく、議論は深夜まで続いた。

次の日の朝刊には、『東京で地下鉄テロ』の見出しが大きく踊り、テレビでもすべての局が、東京でテロが起き、多数の死傷者

が出たことへの驚愕について報じていた。そして、一昨日起きた後藤衆議院議員の事故も現場がまさに首相官邸の近くであったことから、テロとの関連性について書いている新聞もあった。

搜索

「昨日、赤坂で地下鉄が衝突して一人が亡くなり大勢の人が傷ついた、それがテロだったと書いていますね。東京でテロが起きるとは日本もどうなってしまうんでしょうね」

「儂らは、地下鉄に乗らないからそんな目に会わない」

「犯行声明では、日本のコンピューターシステムを乗っ取ったと言っているとあります。本当にそんなことができるのですかね」

「できるかどうか知らんが、儂らホームレスには関係ないだろう」

「近くでたくさんの方が亡くなったのにまるで人ごとだわね」と美紀が言った。

そうである。ここは新宿中央公園にあるいくつかのブルーシートの小屋の中であり、話をしているのは、眞木、山さん、美紀、亮太の四人である。

「ホームレスがいちいち他人のことを気にしていたら生きていけない。運悪く野たれ死ぬ奴が周りにいっぱいだ」

「あら、でも私たちは運よく生き埋めから助かったわ」

しかし、ホームレスには関係ないと言った山さんの表情はうつろで、逆にうろたえているようにさえ見えた。

「山さん、あなたはコンピューターの専門家だ。何か意見がある

んじゃないですか？」と真木が言って、山さんを見た。

「僕は、コンピュータの専門家でも何でも無い。ただのホームレスだ」と怒ったように言って取り付く島もない。

四人は、東京湾のゴミの埋め立て地に生き埋めにされたのであるが、何とか這い出すことができたのであった。尾沢組の地下室でやくざが、ゴミの中に生き埋めにすると言ったのを聞いて、真木はどうしたら助かるかを考え他の三人と相談し合った。縛られたまま埋められたら身動きができず、すぐに窒息してしまう。車のトランクに入れられて運ばれている途中で、お互いの手を使って、縄からすぐに抜けられるほどに縛っている縄を緩めた。そこで穴に投げ込まれた時点で四人ともすぐに縄をほどくことができたのであった。穴の中は真っ暗で地上の連中には四

人の様子が見えなかった。そして、パワーショベルでゴミが投下される前に、四人で丸く肩を組んで円陣を作った。全員の頭をくつつけ合い、その上に着ていたシャツを脱いで覆って、ドーム型の円陣の中になるべくゴミが入らないようにした。こうしてゴミが埋め戻された後も、円陣の中にわずかの空間を確保できた。この空間を維持しながら上に向かって手で掘り返して這い出すことができたのである。

尾沢組の連中は、四人が死んだものと思っているに違いなく、この際もとの罫である新宿中央公園に戻っても簡単には見つからないだろうと考えた。山さんが、ブルーシートと鉄パイプを拾ってきて、もう一つ小屋を建て美紀と亮太が住んでいる。二人とも、ほとぼりが冷めるまでアパートに帰るのは危ないと考えてしばらくここに住むことにしたのである。それに四人で協力し

て生き埋めから助かったことで妙な連帯感が生まれていた。

高層マンションに戻ることもできず、眞木もしばらくここでホームレス生活をしながら今後のことを考えることにした。四人で朝飯を食べた後、眞木は小屋を出た。眞木にとって一番の問題は、涼子を探すことである。マンションの受付に「引越します」と言って何人かの男たちと出て行ったと受付の女性は言ったが、眞木は拉致されたのではないかと思っている。とすれば涼子の命が危ない。早く助け出さなければならぬ。しかし、拉致されるような理由が思い当たらない。

とりあえず、涼子が仕事をしていたCCTソリューションズに聞いてみるかと考えた。CCTソリューションズは、赤坂見附の交差点の近くにある。眞木は歩いて赤坂に向かった。出る前に

公園の噴水で水浴びをして、身体をきれいにしたつもりであるが、夏の太陽に照らされて瞬く間に汗が噴き出してくる。

CCTソリューションズは、赤坂見附の交差点を迎賓館方面に向かって坂を登った左側のビルにある。CCTソリューションズは、大手のIT企業である。SIビジネスからインターネット関連ビジネスまで幅広く展開している。最近は大手の会社でも受付嬢はおらず、受付に電話が置いてあり、訪ねて行った相手の内線番号をダイヤルするようになっていた。しかし、眞木は涼子がこの会社でどんな仕事を、誰としていたのかも知らない。そこで総務の内線にダイヤルして、

「もしもし、眞木健二と言います。ここで働いている眞木涼子の夫なのですが、家内と一緒に働いている方がおられたらお会いしたいのですが、お願いできないでしょうか」と言った。総務の

女性は、困惑気味であったが、それでも、

「当たってみますので、しばらくその場でお待ちください」と言ってくれた。ホールには、四卓のテーブルが置かれていた。突然のことで難しいかもしれないなと思いつながら椅子に掛けて十分ほど待っていると、眞木と同年代と思われる白のワイヤツを着た体格のいい男が真っすぐ眞木に向かって歩いてきた。眞木が頭を下げると、先方も頭を下げながら、

「眞木さんでいらっしゃいますか？」と訊いてきた。そして、

「こちらにどうぞ」と言いつつ、いくつかの会議室が並ぶスペースに案内された。八畳ほどの小さい応接間に向かい合って座った。男がまず名刺を差し出した。「田島二郎、チームリーダー」とあった。

「恐れ入ります。私は、経営コンサルタントをしている眞木健二

と申します。今日は、仕事の話ではなく、家内の眞木涼子のこと
できました」と眞木が挨拶した。

「訪ねてきていただき、ありがとうございます。我々も涼子さん
とこの一週間ほど連絡が取れなくて困っていたのです。涼子さ
んはどうされたのでしょうか？」と訊いてきたのだ。

「それが、ちょうど一週間前に家からいなくなってしまい、僕も
連絡が取れなくて困っているのです。そこで、こちらに来れば何
か分かるのではないかと思っただけです。何か心当たりはないで
しょうか？」

田島は、少し上を見て考えた後、

「それで出て行かれた時はどんな様子でした？ 何か急いでい
るとか、どなたかと打ち合わせされていたとか、」

「それが、僕は家内がいなくなる数日前から家を留守にしてい

たので詳しくは分からないのです。ただ、マンションの受付の話では、何人かの男と一緒に出て行ったと言っているのです。そこで警察に言っても信用してもらえないかもしれないかもしれませんが、涼子は何かの事件に巻き込まれて、拉致されたのではないかと心配しています」

現在自分がホームレスになったことは伏せておいて、素直な気持ち話を話した。それを聞いた田島は、また少し上を見ながら考え込んだ。しばらくじっと考えた末に、

「眞木さん、これは非常に重要な話です。くれぐれも内密にしてください」と眞木の目を見つめながら言った。そして、

「我々は、政府筋から頼まれてある重要なシステムの構築を進めています。ところが一週間前に完成間際にあるこのシステムが何者かに盗まれてしまったのです。このプロジェクトに涼子

さんも深くかかわっていました。というより、主要部分の構築をお願いしていた主要メンバーでした。もちろんシステムのパックアップはとってありますので、当方における直接の被害はありません。問題は盗まれた直後に涼子さんもいなくなってしまうということです。つまり、このシステムを盗んだ連中と涼子さんが何らかのつながりがあるのではないかと考えられるわけです」と言ったのだ。

「ええっ、では涼子はそのシステムを盗んだ一味だというのですか？ そんなことがあるはずがありません。涼子は、単なるプログラマーですよ。そんなことをするはずがあるわけがないじゃないですか」

「いえ、そう断定しているわけではありません。ひとつの可能性の話です。涼子さんは天才的な優秀なプログラマーです。他の会

社から誘われることがあっても不思議ではありません」

「ちよつと待ってください。それでは、その重要なシステムを涼子が盗んで、他の会社に売ったというのですか。いい加減なことを言わないでください。涼子はそんな人間ではありません！」

眞木は、興奮して大声を出した。

「落ち着いてください。盗まれた経緯をお話ししますので聞いてください。システムを盗むと言っても、物を盗むのとはわけが違います。我々の開発中のプログラムは膨大なものですが、社内のデータベースに保存され、プロジェクトのメンバーしかアクセスできません。ところが一週間前に何者かが外部から侵入してこのデータベースのプログラムをコピーしたうえ破壊したのです。そしてその侵入経路は、涼子さんのコンピューターのサーバーを経由していたことが分かっているのです。我々も涼子さ

ん自身がアクセスしたのではないことは分かっています。しかし、この経緯を考えると涼子さんが何かに関与したのではないかと考えざるを得ないのです。そこで質問ですが、涼子さんがいなくなる前に、何か気になる話などされていませんか？ よく思い出していただけませんか。これは極秘プロジェクトなので警察に届けるようなことはしたくないのです」

ここまで言われて、眞木はホームレスの真似事をするために自分が家を出る前の涼子の様子について思い出そうとしていた。そういえば、眞木がSNSシステムズとの打ち合わせから家に帰った時、えらく熱心に電話で話をしていた。そして、眞木が声を掛けると何事もなかったように電話を切ったことがあった。しかし、それがどこかの悪い仲間と密談していたということにはならない。そうだ、コンピューターと言えば、ちようど眞木が家

を出るときに、「あなたのパソコン、調子悪くない？」と聞かれたような気がした。あの時は、キャンプのことで頭がいっぱいで、パソコンのことは眼中になかった。もっとよく話を聞いていればよかったと思ったが、今更遅きに失したにもほどがある。

「涼子と交わした最後の会話の中で、僕のパソコンの調子は悪くないかと聞かれたのです。そして同じサーバーだから、なんとかと言っていました」

田島は、また少し考えてから、

「ということは、涼子さんはあなたのパソコンから何かが入って来たかもしれないと思ったのかもしれないですね。あなたは、どういう関係のコンサルタントをしているのですか？」と言った。

「僕は、IT関係の人とは仕事をしていますが、専門的なことは何も分かりません。……」と言った後、SNシステムズの

林社長のことを思い出した。善良なIT会社と思っていたSNSシステムズの社長が暴力団と組んで仕事をしていた。そして、それに関連して危うく命を落とすようになったのである。頭の中がおかしくなりそうである。

「何か思い当たることがあるのですか？」

「すこし、頭の中を整理させてください。この一週間にいろいろなことがあり、頭の中が混乱しています。整理ができたらもう一度来ますので少し、待ってもらえますか」と言って、不審そうにしている田島に短く礼を言っておフィスから出てきた。

オフィスを出た後、赤坂御苑の横の青山通りを渋谷方面に向かって夢遊病者のように歩いていた。

—なんと、今の話では涼子の失踪に自分が関与していたかもし

れないということであった。自分のパソコンが原因だとしたら
どうということが考えられるだろうか。パソコンは仕事にしか使
っておらず、ネットに繋ぐにしても仕事関係である。このところ
は、SNシステムズから仕事をもらって主にそのレポートを作
っていた。

しかし、そのSNシステムズの社長の林源太郎は暴力団の尾
沢組と組んで何かのプログラムを盗んできた。その盗んだもの
と涼子たちが開発していたものとは違うだろうが、林社長は思
ってもみなかった悪党であった。

―待てよ、SNシステムズとパソコンをつなぐものとするれば、彼
らからもらったUSBがあった。眞木が欲しいと言った資料を、
吉田管理部長が入れてくれたものであった。しかし、ざっと見た
所ではたいして役に立ちそうな資料ではなかった。あのUSB

に何か仕込まれていた可能性はある。だが、涼子もろとも家がなくなってしまう、今となって証拠はない。

そこまで考えて、眞木はSNシステムズを探ってみようと思った。思いたくはないが、原田専務も吉田部長も何か裏があるように思えてくる。

すでに昼を過ぎ、太陽は容赦なく地上を照らしている。眞木は青山一丁目から神宮外苑に入り、木々の木陰をたどりながら新宿に向かって歩いた。

一時間ほど歩いて、新宿中央公園に戻ってきた。暑い盛りで公園も人影はまばらである。自分のテントに戻って、昨夜貰ってきた賞味期限切れのおにぎりを食べた。ホームレスになってから、他のホームレスと同じように深夜の街を徘徊してエサを漁る

日々である。しかし、こうしてみると新宿の街だけでもいかにたくさんの食べ物が毎日捨てられているかが分かる。少し賞味期限が過ぎただけでもすべてが残飯として処理される。この大量の残飯のおかげで眞木たちホームレスは生きていけるのであるが、一生懸命に作物を作ったり、取ったりしている人たちの裏でいわゆる食料のロスが大量に出ているのには何となく違和感が残ると思ったが、これはホームレスの感想としてはおかしいとも思った。

おにぎりを食べた後、隣の美紀と亮太の小屋を覗いてみた。ふたりとも、小屋の中で昼寝の最中である。アパートを出るときに美紀の部屋からいろいろな物を持って来たので、小屋の中は、生活道具で埋まっている。

「美紀さん、お昼寝中悪いね」と声を掛けるが反応がない。さら

に何回か声を掛けると、ゆっくりと目を開けた。

「何よ、ああ、眞木さん。どうでした、奥さんは？」

「ああ、いろいろな情報をもらったのだが、涼子の失踪に僕が関与していたかもしれないのだよ」

「ええっ、ということはあるあなたが浮気していたことが分かって、奥さんが出て行ったとか、」と言って笑った。

「あなた、冗談で言っていますか？　そういうことではないんだ。僕の方の仕事関係で涼子が事件に巻き込まれたかもしれないのだよ」とややむきになって言った。

「ああ、そうなんですか。それは深刻ですね」と言ったわりには、あまり深刻そうには受け取っていない様子である。

「そこでお願いがあるのですが、携帯を貸してもらえないですか？　仕事関係の人に電話したいのです。なんとか手がかりを

つかもうと思っっているんだが」

眞木は、家を出るときに携帯電話もお金もクレジットカードもすべて家に置いてきたので、何も連絡手段がないのである。今や頼りになるのは美紀と亮太であるが、亮太は最初の出会いで眞木にさんざん打ちのめされたため、未だそれを根に持っている節があり頼みづらい。

「そういうことなら、仕方ないわね。」と言って貸してくれた。眞木は、一週間ぶりにSNシステムズの前田専務の携帯に電話を掛けた。眞木は尾沢組の地下室で林社長を認識したが、向こうは眞木を認識していなかったと考え、原田に普段通りに話をしようと思った。しかし、電話から「着信できません」というアナウンスが流れてきた。もう一度、電話を試みる。また同じアナウンスが流れた。どういうことだ、これは着信を拒否している

のか？ 吉田管理部長に電話しようとしたが、電話番号がわからない。そこで、ネットで調べて、会社の代表電話に掛けた。

「経営コンサルタントの眞木健二と言います。原田専務をお願いします」

「どんなご用件でしょうか？」

「現在、専務から仕事を依頼されているのですが、この仕事の件で打ち合わせをお願いしたいと思っていますのです」

「分かりました。少々お待ちください」

しばらく待った後、電話の女性は思わぬことを言った。

「お待たせしました。原田は、今週初めに退職しました。眞木様からご連絡がありましたら、今までのコンサルタント料をお支払いするように言われているようです。どういたしましょうか？」

「ええっ、そんなはずはありません。現に先週も御社で打ち合わせをしたばかりなのですよ。もう一度、担当の方と話してみてください」

「しかし、そう言われましても私としては伺いかねます」と取り付く島もない。

「では、吉田管理部長をお願いします」

「すみません。吉田も原田と同じように今週初めに退職しました。こちらに来ていただけましたら今までのコンサルタント料をお支払いできるようです。いかがなされますか？」

電話を切って、「これはどういうことだ？」と考え込んだ。原田専務が突然会社を辞めたというのが本当なのか？ これはやはり、林社長の事件と関係があるのだろうか？ S N システムズは、会社ぐるみで悪徳ビジネスをしているのだろうか？ いろ

いろいろな疑問が浮かんでくるが、考えても分かるはずもない。なんとか原田に会って問い詰めるしかないのではないかと思っただ。

眞木は嫌がる美紀から電車賃を借りて、大崎のSNシステムズに向かった。大崎駅の東側には高層ビルが並び新たなビジネス街ができています。すでに夕刻に差し掛かっており、多くのビジネスマンが駅からつながる高架橋の上を足早に行き交っている。駅から歩いて数分のところにあるSNシステムズのあるビルの五階に上がり、来社の目的を告げると、案内の女性が出て来て小さい応接室に通された。しばらくして、眞木と同年代かと思われる女性が入って来た。名刺には、「旭 陽子、総務部マネージャ―」と書かれていた。眞木を一目見るなり、旭陽子は、薄汚れた

シャツで鞆も持っていない眞木の様子を不審そうに見たようであつた。

「先ほど、「」ちらに電話しましたら、原田専務と吉田部長が今週初めに退職されたということですが、何かあつたのでしょうか？ 先週打ち合わせをしたときには、そんな話は少しもなかつたのですが、」と切り出した。

「私どものも急なことで驚いています。ただ原田が退職した理由は私的なこととしか聞いていません。吉田についても同じような理由だと聞いています。彼らが辞めてしまつて契約を最後までできずに誠に申し訳ございません。今までのコンサルタン卜料は十分に払わせていただきますのでご了承ください」

「かまいません。ではいくら払っていただけるのでしょうか？」という眞木の話に対して、旭陽子は見積書を一枚差し出した。

「分かりました。結構です。これを現金で払っていただけですか？」

「かまいませんが、何か身分証明書をお持ちでしょうか？ 申し訳ありませんが念のためです」

「困りました。今それらしきものを持っていません」

「そうですか、申し訳ありません。では明日にでも何か身分証を持ってきていただくか、あるいは指定の口座に振り込ませていただきますがどういたしましょうか？」

「そちらの都合で契約を途中で終了しておいて、すぐにお金を払わないとはおかしいでしょう」

自分でも理屈に合わないと思いながら言った。

「お金はすぐにお支払いします。ただ念のために身分証の提示をお願いしているだけでございます」

これは、相手方に理屈があるなと思い、

「では明日にでも身分証を持ってきますので支払いをお願いします」と言って引き下がるしかなかった。

原田と吉田のことを詳しく聞く前に、総務のおそらくは渉外担当であろう女性に、いいようにあしらわれて外に出てきてしまった。電車賃を借りて大崎まで来たのに何の収穫も得られないのでは、搜索は行き止まりになってしまう。時間は夕刻に近づいており、ひよっとして彼らがオフィスから出てくるかもしれない。眞木はビルの出入り口が見渡せる場所を探した。ちょうど駅に向かう通路に並木が続いて植えられてり、木陰から入口が見渡せる。人の通行が増えてきていたが、じっと睨み付けるようにしてビルの入口を監視した。

三十分ほどして、やはり無駄だったかなとあきらめかけたそ

のとき、明らかに見覚えのある男が出て来た。吉田である。こちらに近づいてくる。咄嗟に木陰に隠れてやり過ごす。吉田は、JRの改札に入って行く。眞木もとりあえず、一番安い値段の切符を買って改札を通った。吉田は東京方面の山手線のホームへ階段を降りて行く途中である。多くの乗客が同じようにホームで電車を待っている。すぐに電車が入ってくる。眞木は吉田に見られないようにして隣のドアから入った。美紀から往復の電車賃くらいしかもらっていないので、遠くまで行ったら尾行をあきらめるしかないかと思っていると、意に反して吉田は次の品川で降りた。人ごみに紛れて吉田の後を追う。品川駅の東側は大規模再開発のおかげで今や東京のビジネス拠点としていくつもの高層ビルが立ち並んでいる。帰宅に着くサラリーマンが多い中、吉田はそれらの人々とは逆方向に歩き、品川ガーデンビルとい

う高層ビルのひとつに入って行った。吉田の後を追ってビルに入る。中には六台のセキュリティのゲートがあり、通行証がないとそれ以上は入れない。最近の高層ビルには、駅の自動改札のようなゲートがあり、通行証をかざすと扉が開くようになっている。通行証のない眞木は、ゲートの外側から吉田がエレベーターに乗り込むのを確認する。何階で停まるかを見届けようとするが、斜め後方からではつきりと見えない。じっと目を凝らして変わっていく階数表示を睨み付けたが、結局確認できなかつた。中に入ることができず、ビルの玄関前で、再び吉田が現れるのを待った。しかし、一時間、さらにまた一時間と時間が過ぎ、外は完全に夜になったが吉田は出てこない。

テロ予告

同じ日の夜、暑い一日が終わり神宮外苑の中にある神宮球場では、ヤクルト対巨人の試合が行われており、客席はほぼ満員である。夏の間には、五回終了後の七時半頃に花火が打ち上げられる。この花火の様子は、正面の電工掲示板にも大きく映し出される。観客はひと時の夜空のショーに声を上げながら酔いしれた。十分あまりで、三百発の花火が終わり、六回の巨人の攻撃が始まろうとしていた。とそのとき、スコアを映し出していた正面の電工掲示板が突然消え、真っ黒になった。次の瞬間、観客のざわめきが「ああっ、」という驚愕の声に変わった。電工掲示板に、白い文字が浮かび上がった。

「『太陽の国革命』である。権力闘争に明け暮れている日本の議会制民主主義は終わり、日本政府は我々革命軍による被支配政権に移行することを宣言する。現政府は、我々の指示に従って行政を遂行しなければならぬ。太陽の国革命は、マネーに支配されている今の資本主義社会をリセットし、平等な富の分配がなされる社会に変革することである。廣田首相は、明日朝八時までに我々に行政権力を一任する声明を出せ。もし声明が出ない場合、今度は死者が大勢でるかもしれない」

この声明は、各テレビでも流され、すべての人々が知るところとなった。地下鉄テロが起きたばかりであり、テレビ各局は特別番組を組み、様々な視点からテロ犯の犯人像などを推測したり、次のテロにどう対処したらいいかの解説者のコメントを流した。

テロ予告を受けて、再び国家安全保障会議が開かれた。

「我々がテロに屈するなどということがあるわけがない。昨日の事故からもう丸一日経った。小此田委員長、どんな奴らかまだわからんのかね？」と廣田首相が公安委員長を睨むようにして聞いた。

「全職員が一体となって調べているのですが、未だ消息がつかめておりません。申し訳ありません。『太陽の国革命』と名乗っていることから、極左勢力である可能性が高く、そこを中心に搜索しております」

「それでは今までの常識の範囲の搜索のように聞こえる。中東の『イスラム国』が我が国にも潜入したとは考えないのかね」

「我々の情報では、『イスラム国』が起こしたテロとは考えづら
いと考えています。彼らのテロは、ジハードの名のもとに爆弾を

自分で起爆させて自爆する方法が主体ですが、今回のテロは高度なコンピュータ技術を駆使した犯罪です。こうした犯罪は、高度な教育を受けたものの仕業である可能性が高いと思われる「す」

ここで、後ろに控えていた内閣府の安全保障局（NSS）の宮田正太郎局長が手を挙げて立ち上がった。そして、

「ひとつ皆様にご報告があります。実はNSSで進めていた『プロジェクト』というのがあります。これは元防衛大臣で昨日亡くなられた後藤先生の肝いりのプロジェクトで数年前から取り組んできました。このプロジェクトは、アメリカのNSAとCIAの情報監視システムやロシアのFSBに対抗して我が国でも同様なシステムを構築すべきであるという後藤先生の発案で研究をしてきました。もちろんシステムの見通しがたったら本会

議でご報告するつもりでいました。ところが本システムが完成
間際に何者かによって盗まれたとの報告がありました」と言っ
たのだ。

会議の参加者から大きなざわめきが起こり、

「なんだそれは、そんなことを儂は何ひとつ聞いておらんぞ。大
体、なぜ公安を差し置いて内閣府がそんなことをしたのだ。きち
んと説明してもらおう」

小此田公安委員長が宮田局長を振り返って睨んだ。

「ご存知のように、元NSAのエドワード・スノーデンが暴露し
たように、アメリカのNSAとCIAは世界中の国や国民をタ
ーゲットにして無差別に情報監視や情報操作を行っていること
があからさまになりました。同じように中国、ロシアだけでなく
他の先進国でも似たような情報戦を行っているのはあきらから

す。つまり、情報監視、平たく言えばスパイ活動を先進国並みにやらなければ世界の情報戦についていけない状況になっていきます」

「そんなことは分かっている。我が国の公安の能力は他国と比較しても遜色ない。長年にわたって、スパイ・偵察活動をしてきて数々の過激派の事件などを未然に防いできたのだ。なぜ今更、なんの権限もない内閣府がそんな大それたことをしでかしたのだ」

「公安はあくまでも国内の諜報活動が主体ですが、それだけでは不十分なのが現状です。積極的に他国に対する諜報活動もすべきだというのが後藤先生の信念でございました」

「そんなことが他国に露見したらどうするつもりだったのだ。まったく、独断専行にもほどがある」

小此田が間接的に廣田首相を非難した。宮田局長は、廣田首相をチラッと見た後、質問に答えるように言った。

「そもそもこの日本版NSC設立の目的は、アメリカの情報機関と情報を共有することもひとつの目的でした。しかし、アメリカとしては情報を日本に与えるだけでは利害の共有とは言えません。アメリカからの要求に応えるためには対外諜報活動が必要なのです」

「そもそも論はあるが、今は緊急事態だ。盗まれたと言ったが、それはどんなシステムなのだ？」

廣田首相が間に割って入った。

「このシステムは、インターネットを使って、あらゆるコンピューターに侵入して情報を取得しようというものです。つまり、インターネットに繋がっているものであれば、メール、SNSはも

とよりインターネット家電からでも会社のデータベースなどすべてに侵入できます。ここまでは、一般的なスパイウェアですが、このシステムは、ハードウェア実行システム、例えば今回のような列車運行管理システムなども目標にできます。現在、世の中はたいへんな変革の時代であり、ほとんどの機械、物がインターネットを使って遠隔管理・操作ができるようになっていきます。これをIOT (Internet of Things) と言いますがこれを利用して侵入するわけです。これを使えば、他国の軍事システムの内容を知ることにも可能なわけです」

「つまり、そのシステムを使えば、今回のように地下鉄を乗っ取って事故を起こすことも可能だということか？」

「可能です。ただし、今回のような列車運行管理システムは膨大なソフトウェアで構成されているので、侵入したからと言って

簡単に乗っ取ることはできません。そこで、今回のシステムでは、AI（人工知能）を使って瞬時にシステムの中身を理解できるようにしているのです。これは他のスパイウェアと違って画期的なシステムと言えます」

「画期的システムと言って自慢している場合ではないだろう。何でそんなことをする必要があるんだ。本来の諜報活動の域を超えているだろう。そんなシステムのために今回のような事故が起こったかもしれないのだぞ」

石野国土交通大臣は「いらんことをしよって、」と言わんばかりである。

ここで、菅岡官房長官が釘をさすように全員を見渡しながら言った。

「宮田局長が言ったように、これはあくまでも研究中のものだ

ったのです。核を持たない我が国の防衛システムのひとつになるのではないかという提案があり、その研究をしていたのであってすぐさま実用化しようということではありません。しかし、図らずもその研究が盗まれてしまったということについては、たいへん遺憾に思っています。このプロジェクトは、こういうことがないように極秘に進められてきたはずだ。そうだろう、宮田局長」

「そうです。このプロジェクトは、内閣府の我々と実際にシステムの構築を行ったCCTソリューションズの限られたメンバーだけで進めてきました。CCTソリューションズは、以前に防衛省でも使用したことのある信頼に足るIT企業です。ただ、ひとつ問題があり、CCTソリューションズだけでは技術的に対応できず、システムの中核部分のAIの開発を早稲田大学の山下

教授に依頼したのですが、半年前から行方不明なのです。」

「何！ ではその教授が今回のシステムの盗難に関係しているということか？ どうしてその教授は行方不明になったのだ？ バカ者！ そんな重要なことをなぜ僕に報告しなかったのだ」菅岡官房長官は、どうも内閣府に失態があるようだと感じ、部下を厳しく問い詰める。

「申し訳ありません。山下教授には、中枢のAIを開発していただき、引き続き、本来のシステムの構築までお願いしていたのですが、AIの開発が終わった時に突然、大学から姿を消し、そのまま自宅にも帰っていないのです。理由はわかりません」

「宮田局長、ではまずその山下教授を探し出せ。ただし、他の可能性も否定できないわけであるから、公安委員長、引き続きそちらの捜査も全力でお願いします。」

「諸君、とにかく、早くテロの犯人を捕まえないと、内閣支持率がさらに急落する。それは当内閣の致命傷である。犯人確保に全力であたっていただきたい。」

廣田首相が再度、念を押した。

次の日の朝八時、廣田首相の声明が発表になり、テレビ各局が放映した。

「昨夜、『太陽の国革命』というテロ集団と思しき連中から、テロ予告があり、わが国の行政権をテロ集団に一任させろという脅迫文がテレビで流されました。私は、ここにはつきりと宣言します。我が国はテロに屈服することはありません。現在、公安警察が全力で捜査に当り、犯人の行方を追っています。間もなく逮捕できるものと確信しています。国民の皆さん、どうぞ安心して

通常の生活をおくってください」

搜索二日目

結局、眞木は駅の横にあったコンビニから残飯として出た弁当を食べて、朝まで品川ガーデンビルの玄関前の広場にいた。しかし、吉田は出てくることはなく、朝の通勤で人々が次々とビルの中に入って行く。このまま帰っても次の搜索にかかるための目当てもないので、さらに玄関を見張れるところに移動し、目立たぬように立っていた。とそのとき、ビルに入って行く人々の中に見覚えのある大柄の男の姿が目に見えびんできた。「林源太郎社長」である。林は、明らかに西欧系の外国人とわかる男と話をしながら、ビルに入って行くこうとしている。眞木は咄嗟に走り出

していた。玄関に走り込んだ時、林と外国人はすでにセキュリティゲートを通過していた。ゲートの中のエレベーターホールは、エレベーターを待つ人で混雑しており、林の姿をゲートの外から目で追うのも困難である。結局、林は人ごみに紛れてどれかのエレベーターに乗り込んでしまい、眞木は姿を見失ってしまった。

しかし、収穫はあったと思った。

SNシステムズかあるいは林は、このビルにも事務所を持っているのだ。だから、吉田が昨夜入ったまま出て来ず、林も今このビルに入って行ったのだ。

眞木は、セキュリティゲートから離れ、ビルの玄関ホールの壁に掲げられているこのビルに入っている会社の案内板を見た。階数ごとにたくさんの方の名前が並んでいる。地下三階から一

一つ一つ確かめながら、最上階まで目で追ったが、SNシステムズの名前はない。予想通り表立って看板を出してやっているビジネスではないはずで、どこかの一室を借りているのかもしれない。しかし、これらの名前の中から林と関連のある会社のようないものは思いつかない。とにかく中に入らないと具体的な手がかりは掴めないと思った。

眞木は考えた挙句、玄関ホールにあるビルの受付に行つて電話を借りた。受付嬢に、このホールで待ち合わせをしているが、相手が来ないので電話を借りられないかと言つた。彼女は、携帯電話も持たず、薄汚れたみなりの男を不審そうに見たが、結局受付カウンターの上の電話を使つてもいいと言つてくれた。

「もしもし、美紀さん、頼みがあつて電話したんだが、今は公園の小屋にいるのかね？」

「ああ、眞木さん、私たちは今、小屋で食事中よ。昨日は帰ってこなかったけど、奥さんは見つかったの？」

「いや、まだだ。美紀さんをお願いがあるのだが、品川駅まで来てもらえないかね？」

「何よ、眞木さんが私にお願いとは、なんだか気持ち悪いね。いわよ、どうせ何もしていないから品川まで遊びに行くわ。どこで待ち合わせるの？」

美紀とは、ビルの玄関ホールで待ち合わせることにして、ホールの窓際に並んでいる椅子に掛けて待つことにした。その間も吉田や林が出てくるのではないかとセキュリティゲートを監視した。そして再び会社の案内板に目をやった。このうちの何処かに林や吉田がいるはずである。何回も下から上、上から下と見続

けた。このビルには会社だけでなく、様々なレストランも入っているのだなと思った。それはそうである。四十二階の高層ビルであるから、この大きな空間の中で数千人の人が働いており、ビルの中で食事もするだろうし、宴席でビジネスの話をすることもあるだろう。ということとは、レストラン街のある四十二階に行くには専用のエレベーターがあり、一般の人間も立ち入ることができる。つまり、ゲートを通過してエレベーターに乗ったのは、二階から四十一階のどこかに行ったということだと思った。

二時間ほどして、美紀が玄関に現れた。亮太も一緒である。すでに昼近くになり、ホールの中も朝の混雑のようなことはない。眞木が手を上げると、すぐに気が付いてゆっくりとホール内を見回しながら近づいてきた。

「私らのように歌舞伎町をうろうろしている人間にとって何か

怖い感じね」とまだ辺りを警戒している。亮太にしても場違い感
は相当なもので早く出たがっている様子である。

「そう警戒するな。何も悪いことしなければ大丈夫だ」

「で、頼み事って何よ？ こんなところで私らが頼まれるような
ことってないんじゃない」

眞木は隅の方の椅子へ二人を誘って、昨日からの話をした。四
人がひどい目に会った原因と思われる林社長とその関係者がこ
のビルの何処かに居て出てこない。中に入って搜索しようと思
っているが、このビルにはセキュリティゲートがあり、通行証が
ないと中に入れない。

「そこで、美紀さん、頼みがある。あんたはスリの天才だと亮太
が言っていた。ゲートから出て来た人から通行証をスリ取って
もらえないかね？」

「ええっ！」

「大きな声を出さないで、人に聞かれたらまずい」と眞木がたしなめる。

「あんた、今、何も悪いことしなければ、と言ったばかりじゃないのよ」

「いや、使った後にビル内のどこかに落としておけば、自分で落としたと思うはずだ。少しの間、借りたと思えばいいのだよ」

「あんたも相当頭がおかしくなっているわよ」

「そうだ、お前どうかしているぜ。ビルの中に入るために、わざわざ俺たちを品川まで呼んだんかよ」

亮太も憚然として言う。

「ああ、僕はどうかしている。まともとは思えない。しかし、涼子の手がかりはこのビルにしかない。まともなお願いではない

のは分かっているが聞いてもらえないかね」

「美紀、こんなバカな話に乗ることはない。もう帰ろうぜ」
亮太はすぐにも出て行きそうである。

「ちよっと待って、私たちをあんな目に会わせた奴がいるんなら何か仕返ししたいわね。通行証を盗るくらい簡単だからやってみるわ」

「やめとけ！ 帰るぞ」

「大きな声を出さないで。ちよっとここで待っていて。すぐに済むから」

美紀はふたりを残して椅子から立ち上がった。真っすぐにセキユリテイゲートに向かったかと思うと、何食わぬ顔でゲートから出て来た人たちと一緒に玄関を出て行った。

五分もしないで、すました顔で美紀は帰ってきた。懽然として

座っている亮太の隣に腰を下ろした後、ハンドバックから三つの通行証を出した。

「なんだ、お前三つも盗ってきたのかよ。ということは、俺たちもこいつと一緒に中に入って、あの親玉を探そうってことか？俺は嫌だぜ、あんな奴らに関わったばかりに、殺されるところだった」

「そんなこと言うけど、最初にあれをやれって言ったのはあんなたでしょ。少しくらい責任を感じてよ。とにかく、一度パンチでもお見舞いしてやりたいわよ」

結局、ガードマンに怪しまれることなく、美紀が盗ってきた通行証を使って三人ともゲートを通ることができた。エレベーターホールに来たところで、

「で、その親玉はどこにいるのよ」

美紀がやる気満々の様子で聞く。

「いや、この中にいるのは確かだが、どこにいるか分からない。

二階から全部しらみつぶしに探すしかない。林の会社はS N システムズと言うのだが、その名前は使っていないようだ」

「ちよつと待って、しらみつぶしって言ったって、こんな大きなビルを隅から隅まで探すのは不可能よ」

「そうだ、やはりお前、どうかしているぜ。美紀、やっぱり帰ろうぜ」

亮太も呆れて引き返そうとする。

「いや、よく見てくれ、このビルにはいくつもの大手の企業が入っている。それらの大手会社が林のビジネスに関わっていると
は思えない。とするとそんなにたくさん歩き回ることはない」と

エレベーターホールの会社案内を指さしながら言った。さらに、「おそらく、堂々と大きな看板を出してビジネスをしているようなオフィスではないはずだから、そうしたことを目安に探そう」と付け加えた。

先ほど確かめたように、一階にオフィスはないので、まず二階から探っていくことにした。二階には、三つの企業の名前がエレベーター前の案内に出ている。三人は、案内に書かれてある会社以外のオフィスがあるかどうかを歩いて調べた。二階のフロアはエレベーターホールを中心に四角形に廊下が配置されており、歩いて回るのは難しいことではなかった。結局、二階には案内に書かれていた会社以外のオフィスはなかった。続いて三階から六階までは有名な造船会社が占めており、これは捜査の対象ではないと判断してその上の階に上がる。七階は、ここも知られた

不動産会社が占めており、エレベーターホールの横に受付があり、そこから先には進めないようになっていいる。これでは他の会社がオフィスを作ることにはできない。その上の階も大手企業が数階ずつを占有していたりして、容易にそれらしいオフィスを発見できない。こうして瞬く間に四十一階に来てしまった。四十二階はレストラン街になっており、オフィス用エレベーターはこの階までである。

「こんなに大きなビルなのに、あまりたくさんの会社は入っていないのね。本当にこのビルで間違いないのかしら」と美紀が疲れた表情で言う。

「確かに、連中はどこに行ったんだらう。確かにこのエレベーターを使って上がって行ったと思ったのだがな。何かを見落としかな」

眞木も実際問題、心配になってきた。

「おい、確かに、じゃねえよ。お前、頭おかしくなってる勘違いしたんだろう」

亮太が突っかかってくる。

「すまない。とにかくこの階を調べよう。この階にはいくつかの会社が入っているようだ」と言ってみて眞木が廊下を進んで行く。仕方なく他の二人も後を追うように歩き出した。

四角形に配置された廊下を回るのは十分とわからない。一周して元のエレベーターホールに戻ってきた。

「やはり、この階も何も怪しいオフィスはなかった。これはどういうことだ？」

亮太が眞木を睨んでいる。

眞木は、斜め上方に顔を上げて少し考えた後、

「ちょっと待ってくれ。さっき角のところに「DANA研究所」というのがあった。一見、研究所と書いてあったら怪しいと思う人はいない。しかし、普通は何の研究をしているのか分かるようにするのはないか」と言った。そして、さらに考え込んだ。

「最近どこかでその名前を聞いたような気がする。この一週間ほどの間にあまりにもいろいろなことがあった。涼子がいなくなり、家までなくしてしまった。さらにやくざに追いかけられてひどく殴られ、拳銃の果てに殺されそうになった。そして、

「そうだ、DANAというのは、SNシステムズが取引をしている中東の会社ではなかったか。それにしても、その中東の会社が品川に事務所を持っているというものは、少し突拍子もない気がする。しかし、林らがこのビルに出入りしているということは関係がある可能性がある。そこまで考えて、もうひとつ他のことを

思い出した。

―「そうだ!」と思った。生き埋めになる前に、尾沢組の地下室で、辰とかいうやくざが、『だんな様』からしこたまお金が入る。．．．．」というようなことを言ったのだ。何か奇妙なことを言うなと思い、覚えていたのだ。「だんな様」と言わずに「だんな様」と言ったのだ。

「よし、さっきの「DNA研究所」というのを当たってみよう」と言っつて、廊下を先ほどとは逆の方向から歩き出した。他の二人も慌てて後を追う。四角形の廊下の角部にあたる辺りに他のオフィスより頑丈そうなドアがあり、その横の壁に小さく「DNA研究所」と書かれた表札が貼られている。ドアの上に監視カメラがある。

インターホーンの呼び鈴を鳴らす。が、返事がない。

「こんにちは、」と言ってドアをノックするが、しばらく待っても何も返事がない。ドアノブを回してみるがカギがかけられている。中に林らがいるのであれば、ドアの外で騒がれるのは得策ではないはずである。

そこで再び大きな声で、

「こんにちは！」と言ってドアを大きくノックした。しばらく待っても応答がない。さらに、大きく何度かノックした。

すると、「カチャツ、」と音がして、ドアが開いた。

開いたドアのすき間から男が顔を出した。どんな用かと聞く前に、

「あつ、」と男が声を上げた。

「ああつ、」と思わず眞木も声を出した。

顔を出したのは、吉田であった。

変調第二曲

同じ日の昼前、JAL308便は福岡空港を定刻の10:00に飛び立ち、羽田空港に向かって順調に飛行していた。機体はボーイング777で、乗客と乗員合わせて約335人が乗っている。到着予定時刻は、11:35である。機体はすでに羽田空港の管制空域に差し掛かっていた。機長の大浜卓朗は、羽田空港の管制に連絡する。

「Tokyo Approach, Japan Air 308 (東京アプローチ、こちらJAL 308便です)」

「Japan Air 308, Tokyo Approach. Descend and Maintain 4,000 (LAL 308便、こちら入域管制席です。高度4,000フ

イトまで降下してください)」

大浜は、指示に従って、高度を落としていく。高度計は徐々に高度が下がって行くのを表示している。いつものように順調に着陸態勢に入って行くなと思いつながら、緊張が増してくる。

「Reduce Speed to 210 Knots (スピードを210ノットまで落としてください)」

高度を4,000フィートを保ったまま、指示に従ってフラップを下ろして速度を210ノットまで減速する。

「Cleared for ILS Z, Runway 23 Approach (滑走路23へ「ILS Z」方式で侵入することを許可します)」

着陸許可が下りた。滑走路23は、空港の海側に飛び出すように作られた滑走路で通称をD滑走路という。JAL 308便は、D滑走路に向かって北側から進入しようとしていた。

「Contact Tokyo Tower 124.35（周波数124.35で管制塔と交信してください）」

「Tokyo Tower, Japan Air 308, on your frequency（管制席、こちらJAL 308便です。あなたの周波数に合わせました）」

「Runway 23, Continue Approach（滑走路23へ侵入を続けてください）」

フラップを作動させて、高度は徐々に下がって行く。
ギヤ・レバーを引いてランディング・ギヤ（車輪）を出す。

「Reduce Speed to 150 Knots（スピードを150ノットまで落としてください）」

スピードブレーキを引いて、さらに減速操作をする。と、しかし、速度が落ちない。スピードブレーキは、主翼上面にせり出しているスポイラーを使って空気抵抗により減速する装置である。

副操縦士の町田義男が、

「スポイラーが出ていません！」と叫んだ。

「Reduce Speed to 130 Knots (スピードを130ノットまで落としてください)」

大浜は、必死でスピードブレーキを引く。すでに目いっぱい引いている。が、速度は落ちない。高度はさらに下がって行く。すでに滑走路が見え、「PAPI」の表示が見える。「PAPI」の赤が4つ点いている。高度が低すぎることを示しているのだ。すでに300フィートまで下がっている。

「Missed Approach, Climb on HDG 300 to 800FT (侵入は失敗です。高度を300フィートから800フィートまで上昇してください)」

大浜は、操縦桿を引いて上昇しようとする。しかし、上昇しな

い。上昇しないどころかさらに下降していく。

自動音声装置が、

「200、150、・・・」と高度を知らせる。

「機長、上昇してください！ 激突します！」と町田が叫ぶ。

町田がフラップのレバーを目いっぱい引いた。するとフラップが動いて機体が少し持ち上がった。しかし、高度はさらに下がっていく。

「わああっ、」と町田が叫んだとき、車輪が滑走路に衝突する音が聞こえた。

フラップの高揚力装置の力で機体が持ち上がると同時に速度も落ちて、滑走路に激突せずに大きくバウンドして着陸した。着陸と同時に大浜は、速度を一気に落とすために、スラストレバーを引いて逆噴射する。が、しかし、速度が落ちない。

「逆噴射していません！」と町田が叫びながら車輪ブレーキを力まかせに引いた。

機体は、スピードを落とすことなく、車輪から白煙を吐きながら滑走路を疾走する。大浜は、力の限りスラストレバーを引く。

「オーバーランだ！」と町田が叫んだときには、機体はすでに滑走路の終点に差し掛かっていた。

ボーイング777は、「ガガガガッ！」という音を残して滑走路のフェンスを突き破り、海に突っ込んで行った。

NHKの昼のニュースの途中で緊急ニュース速報が流れた。

「JAL 308 便が羽田空港で着陸に失敗。東京湾上に着水」

テレビ各局は、午後の番組をキャンセルしてこの航空機事故

のレポートを流している。テレビカメラは多摩川を挟んで空港の対岸にある浮島町公園から実況を伝えている。カメラの向こうには、海に浮かんだボーイング777の機体が見える。事故機が浮かんでいる場所は、多摩川の河口で水深は浅いようである。機体の周りに海上保安庁と書かれた灰色の巡視船が取り囲み、救命ボートが何隻も出て空港の岸壁との間を忙しく行き来している。機体から脱出シューターが出されて海に浮かんでおり、担架に乗せられた人々がこのシューターを使って運び出されている。

「現在のところ死者は出ていないとの報告が寄せられています。しかし、海上への不時着の衝撃で多数の重軽傷者が出ている模様で、ご覧の通り多くの乗客の方々が担架に乗せられて飛行機から降ろされています。JAL 308便は、ほぼ満席に近く335人

の乗客、乗員が乗っていました。そのうちどれほどの人が負傷したのか未だ不明です。……」

画面がスタジオに切り替わり、事故の概要などを説明する。

「JAL 308 便は、定刻の 10:00 に福岡空港を離陸し、順調に羽田空港に向けて飛行していました。その後予定通り 11:15 ころに、羽田空港の管制に従って着陸態勢に入りました。ところが滑走路に入る直前に急激に高度が落ち、墜落は免れたものの大きくバウンドして着陸し、そのままスピードを落とすことなく、滑走路を突き破って海に突っ込んだのです。」

先ほど入りました情報によりますと、着陸態勢に入った後、操縦コントロールが効かなくなったと機長が話しているとのことです。いずれにしましても、どのような原因でこのような大事故が起きたのか早急な説明が待たれるところであります」

スタジオでは、航空評論家の元機長などが、司会者の求めに応じてコメントを述べている。

「最新鋭のボーイング777には、オートパイロットが付いており羽田空港ではこのオートパイロットが使えます。着陸の際も、水平高度からオートパイロットが自動的に速度を落としていき、機長はオートパイロットの指示に従って、フラップを一段ずつ下げていきます。EISのローカライザーによって機体は滑走路の中心をキープしてくれます。つまり、すべてを手動で操縦する必要はなく、機体に装備された着陸システムに則って着陸するので、操縦コントロールが効かなくなったということとは、このシステムそのものになにがしかの不具合があった可能性がありませんね」

また画面が切り替わり、品川にあるJAL本社前からの中継に

なった。たくさん取材人が詰めかけ、玄関を出入りする社員にレポーターらが次々に質問を投げかけるが、黙って足早に立ち去っていく。

「こちらJAL本社前です。多くの社員の方々が足早に出入りされており、事故の対応に追われているのが分かります。まだ、正式な記者会見は開かれていませんので詳しい事故の状況や事故原因については分かっていません。」

さらに画面がスタジオに切り替わり、司会者が、

「JALでは、詳しい事故原因の解明にはまだ時間がかかると言っているようです。それでは、再び現場の様子を見てみましょう」と言って画面が変わろうとしたとき、突然画面が消え、真っ暗になった。そして、しばらくして、黒い画面上に白い文字が流れた。

「『太陽の国革命』である。この航空機事故は、日本政府が我々の要求に応えなかった報いであり、事故の原因は日本政府にある。再度通告する。日本政府並びに廣田首相は、明日朝八時までに我々に行政権力を一任する声明を出せ。もし声明が出ない場合、今度こそ致命的な事件が起こるだろう。革命に犠牲が必要なことは言うまでもない。我々革命軍の目的は、日本社会の革新であり、誰もが報われる日本の未来を築くことである。」

その日の夕方、再び首相官邸では、国家安全保障会議が招集された。

「今度は、航空機事故がテロだったという犯行声明が出された。もう一刻の猶予もできない。菅岡官房長官、例の教授の行方は分かったのかね」と廣田首相が青ざめた顔で聞いた。

「いえ、行方はまだつかめていないのですが、有力な情報を掴み
ました。宮田局長、ご説明しろ」

「はい、これは警視庁からの情報なのですが、十日ほど前に新宿
の歌舞伎町にあるゴールデン街の中のバーに夜遅く、山下教授
と他に男と若い女の三人連れが現れたというのです。バーのマ
ダムの話では、なにやらヤクザに追われているので匿ってほし
いと言ったそうです。山下教授は馴染み客でもあったので、その
まま朝までそのバーにいて、朝早く三人で出て行ったというこ
とです。ただその後の足取りは知らないと言ったそうです」

「大学の教授がやくざと関係を持っているのか。それはますま
す怪しいのではないか？ もはや容疑者か重要参考人として捜
索させたらどうか」と菅岡官房長官が宮田局長に言った。

「菅岡官房長官、少しお待ちください。官邸が直接警視庁に指図

するのは越権行為です。きちんと我が方を通していただかないと困ります」と小此田国家公安委員長が苦々しそうに菅岡長官に言った。

「あなたのところは、まごまごしているからこちらで動いたのですよ。しっかり捜査してもらわないと困るのは、我々内閣全体なのです。山下教授以外の左翼ゲリラの搜索は進んでいるのですか？」

逆に小此田に質問を投げた。

「いや、まだはつきりした動きがつかめていません」

「今朝、声明を出したように、我が国がテロに屈してテロ集団に乗っ取られるなどということはあり得ないわけでありまして、大至急、犯人を捕まえなければなりません。小此田国家公安委員長、しっかり捜査してください。支持率の急落どころか倒閣運動

につながるかもしれない」

廣田首相がかすれた声で小此田委員長に向かって言った。

品川ガーデンビルでは

時刻を遡り、同じ日の昼過ぎ。

品川ガーデンビルの四十一階にある「DNA研究所」を眞木と美紀、亮太が訪れた。眞木が何回かノックをすると、男が顔を出した。

顔を出したのはSNシステムの吉田管理部長だった。

吉田は、眞木の顔を見て、すぐさまドアを閉めようとするが、眞木がすかさず隙間に靴を挟んだ。吉田は、何とかドアを閉めようとするが、眞木が力いっぱいノブを引くと、小柄な吉田の手が離

れ、ドアは大きく開け放たれた。眞木は、すかさず、部屋の内側に入り込んだ。入ったところに受付カウンターがあり、その後ろの部屋は広い応接間のようになっており、テーブルを囲んでシツクなソファが並べられている。正面は大きなガラス窓になっており、東京の街並みが遠くまで見渡せる。

「眞木さん、突然、なんだ！こんなところへ押しかけて来て」と後ずさりしながら吉田が言う。小柄な吉田は焦って後ろにつまづきそうになり、眼鏡がずれ落ちそうになる。

「吉田さん、あなたに聞きたいことがあって来たのですよ」

「何の用だ？ 一週間以上なんの連絡もしないで、用があるなら事務所に行ってくれ」

「家内がいなくなってしまったのですよ。その失踪とあなたがくれたUSBが関係しているのではないかと思ったのですよ。」

覚えているでしょう、S Nシステムズの事務所で会社の資料をコピーしていただいたUSBですよ」

「そのUSBとあなたの奥さんがいなくなったのと何の関係があると言うんだ？ バカなことを言うな。とっとと帰ってくれ」

「ここは何の研究所なんですか？ 先ほど林社長もここに入っ
て行かれた」

吉田は、一瞬、顔色を変えて、

「そんなことは、あなたとは関係ない。帰ってくれと言っている
だろう」と言いながら眞木を押し出そうとする。

「私ら、あなたとこのころの社長に殺されそうになったんだ。関係な
いとは言わせないよ」と後ろから美紀が言った。

「そうだ、お前たちここで何をしているんだ？ 警察にばれた
ら調子が悪いことをしているんだろう」

もはや脅迫まがいの言い方で亮太が吉田に詰め寄った。と、そのとき、応接間のドアが開き、隣の部屋から大柄の男が入って来た。

林社長である。さらに頑強な体躯をした男ふたりが続いて入って来た。ボディガードであろうか。

「どうしたんだ、吉田、とつとと追い返せと言っただろう。何をぼやぼやしているんだ」と林が吉田を責める。

「あっ、社長、こいつは例のコンサルタントの男です。こいつら、何かを嗅ぎつけて押し入ってきました。このままでは調子が悪いでしょう」

「なにっ、」と言ったと同時に、ボディガードに目配せした。屈強な男ふたりが素早く回り込んで、ドアを塞いだ。

「何をしやがる、お前ら何かしやがったらただじゃすまないぞ」

と亮太がボディガードに言った。と、同時に「ぐあつ、」と言って亮太が腹を押さえて前のめりに倒れた。ボディガードの強烈なボディブローが鳩尾にめり込んだのだ。

「小僧、何もわからないで喚くな。ここはお前などが来る所ろじゃない。それでコンサルタントさん、何を嗅ぎつけて来たんだ？」

林源太郎が眞木を睨んだ。もはやIT企業の社長とは思えない言い方である。

眞木は、美紀と亮太を背中の方に押しやって、ボディガードらに對抗するように空手のかまえをとった。

「林社長、僕は眞木健二と言います。あなたにはすでに二回お会いしています。一回目は、SNシステムズで原田専務と一緒にでした。二回目は、尾沢組の地下室でした。あなたは気づいていない

かもしれませんが、あの時地下室にいた四人のうちの三人が僕たちです」

「なにつ、ということとはあの時のCDを盗んだやつらか！」

「そうですよ、あの時、あんたらは山さんをだましてプログラムを手に入れた。その後僕らは、あのやくざに殺されかけたのです。ただ残念ながら死ななかつたのです」

「それで、その仕返しに来たというのか？ それならお門違いだ。儂らはお前たちに暴力をふるった覚えはない」

「そんなことで来たわけではありません。僕の家内の失踪にあなたたちが関係しているはずで、それを確かめに来たのです」

「お前、何のことを言っているんだ。お前の女房がいなくなったかどうかなど儂らが知っているはずがないだろう」

「CCCTソリューションズから、ある極秘システムが盗まれた。

そして盗んだのはあなた達だと考えています」

核心部分の話をして、林の顔を窺った。林に若干の顔色の変化があったのを見てから、

「その極秘システムを盗むために、CCTソリューションズで働いていた僕の家内を利用しようとした。そのために僕に仕事を与えて、家内の動向を探っていたと思っています。吉田さん、そうでしょう！」と吉田の方を見た。

「お前、何を言っているんだ。なんか証拠でもあるのか」

吉田は、動揺した顔で言った。

「あんた達、いったいここで、どんなビジネスをしているんだ」
真木が隣室の方に歩きかけた。

ボディガードが黙っているはずがない。真木の前に、ボディガードの一人が立ちふさがったかと思った瞬間、真木の顔面を目が

けてパンチが飛んできた。左腕でかわしながら、右拳で相手の顎を狙った。外れた。再びフックパンチが飛んできた。ウェイビングでかわし、前蹴りを放つ。相手の下腹に突き刺さり、ボディガードは前に崩れ落ちる。とそのとき、もう一人が回し蹴りを放ち、真木のわき腹に当たる。真木の身体は横に飛ばされ、ソファに当たって、ソファごとひっくり返った。ボディガードは素早く走り寄り、真木の顔面を目がけて蹴りを飛ばす。横に転がって、一瞬でかわす。と同時に相手の足を払った。倒れた相手の顔面に肘を飛ばす。相手は、「ぐあつ、」と言って気絶した。

「くそっ、役にたたん奴らだ」

林が大柄の身体で真木の前に進もうとしたとき、「かちやつ、」と音がして隣の部屋のドアが開いた。

「あなた！」

眞木は一瞬何が起こったかわからない。

呼んだのは、涼子だった。

「涼子！」

眞木が、目を見開いて涼子に駆け寄る。とそのとき、涼子の後ろから男の低い声が飛んできた。

「待ってくれ、そこまでだ」

大柄な原田専務だった。手にナイフを持って、涼子の首に突き付けている。

「原田さん、何であんたまで」

「これは日本の国のためなのだよ」

原田は、涼子にナイフを突きつけながら後ずさりして、

「こちらに来い」

と、三人とも隣の部屋に来るように指図する。ボディガードが起き上がり、三人を囲むようにして隣の部屋に押し込んだ。その部屋には、大きな会議テーブルが中央に置かれ、壁際に作業テーブルが並び、何台ものコンピュータとモニターが置かれていた。この部屋にも大きなガラス窓があり、同じように東京の街を見下ろすことができる。会議テーブルに二人の若い男と西欧系の外国人が座って話をしていたが、涼子にナイフを突きつけている原田と眞木ら三人が入って行くと、一斉にこちらを見た。

「What on earth happened? What, s these guys? (一体何が起きたんだ?なんだ、こいつらは?)」

外国人が驚いて林の方を見て言った。眞木は、その巻き舌の発音を聞いて、こいつは西欧系ではなくアラブ系の人間だなと思った。この外国人は林と一緒にこのビルに入ってきた外国人に違

いないと直感した。

「Trouble guys came in. But do something, do not worry. (厄介な奴らが入り込んできた。しかし、何とかするから心配するな)」

と林が言ってから、

「「いつらを奥の部屋に押し込めろ」とボディガードに命じた。
「Do not cause violence in the office! (オフィスで暴力沙汰を起こすな!)」と言って外国人は林を睨みつけている。

「I know. Leave it to me (分かっている。任せてくれ)」

原田が涼子にナイフを突きつけており、従うしかない。ボディガードに促されて眞木、美紀、亮太の三人はその大きな会議室を通り越してさらにその奥の部屋に入れられた。続いて原田が涼子にナイフを突きつけながら同じ部屋に入って来た。林の指図で、

ボディガードが三人の手足をナイロン製の結束バンドで固縛する。電線工事で使われる透明の細いバンドである。続いて、ナイフを突きつけられていた涼子も同じナイロン製の結束バンドを付けられた。

「ここは防音壁で仕切られている。いくら叫んでも無駄だぜ。夜になったら、お前らを始末する。それまでゆっくり休んでくれ」と、林が言って、全員が出て行った。

部屋には窓がなく、何かの機材が置かれているが、ベッドとテーブルが置かれてホテルの部屋のようになっている。

「涼子、大丈夫か！」

真木は、縛られたまま涼子にすり寄ったが抱き寄せることはできない。

「大丈夫よ。あなたこそ、大丈夫？　よくここが分かったわね」

「よかった！　涼子が無事で。どれだけ探したとか。それにしても、お前、どうしてここに連れてこられたんだ。マンションは人手に渡って入ることもできない」

「もう、私、一人でここに閉じ込められて生きた心地がしなかったわ。助けに来てくれてありがとう」

張り詰めた糸が切れたように大粒の涙がこぼれ落ちた。

「ありがとうはまだ早いよ。助けに来たのに捕まってしまった。

それにしても、これはどういうこと？」

ひとしきり涙をこぼした後、涼子が話し出した。

プレイバック

眞木が公園でキャンプすると言って出て行った二日後の日曜日。

涼子は、明日には健二も帰ってくるわねと思いながら、日曜日とあってゆっくりテレビを見ていた。すると、昼過ぎにマンションの玄関にあるインターホンのチャイムが鳴った。

「SNシステムズの吉田と言います。急なことで申し訳ありませんが、家に伺いたいのですが」

「主人は、今外出していませんが、」

「いえ、実は奥様に用があつて参りました」

眞木がSNシステムズの仕事をしているのは知っていたが、自

分に用があるというのはどうということかと訝しみながら家に通した。

家のドアを開けると吉田以外に二人おり、いっしょについて入って来た。同業者ということと夫の取引先であるという安心感で三人をリビングに通した。吉田以外の二人は、三十くらいの若いエンジニアであろうか。二人は宮下と鷺尾と名乗った。

「実は、眞木さんがCCTソリューションズでやっておられるシステムを早急に仕上げることになり、SNシステムズも協力することになったのです」

「ええっ、そんな話は聞いていませんわ」

CCTソリューションズから、これは極秘プロジェクトで、たとえ主人にも話してはいけないと言われていた。

「SNシステムズがこのプロジェクトに入るとは聞いていませ

ん、確かな話ですか？」

「内閣府から至急完成するために当社を使えとCCTソリューションズに話があり、島田さんも了解されたのです。これは内閣府の肝いりのプロジェクトだと聞いています」

そう言われると、そこまで知っているのだなと思い、日曜日でもあり島田に確かめようとしなかった。

「このシステムの中核部分を眞木さんがやられており、終盤に近付いている。そこで、至急を要する仕事なので、眞木さんのためにオフィスと部屋を用意しました。そこに二、三日泊まり込んでシステムの完成に協力してほしいのです」

「ええっ、今からそこに行って仕事をしろと言うのですか？」

「そうです。もしお疑いなら島田さんに連絡して確認してください」

「しかし、私のコンピュータはここにあるし、資料もこの家にあるわ。それに主人が外出していて明日帰ってくる予定です。私がいなくなったら彼は家にも入れません」

「大丈夫です。そのために若い者を連れてきました。必要な物は彼らに運ばせます。仕事も彼らがお手伝いします。ご主人には我々の方で連絡して問題ないようにしますのでご安心ください」

「連絡がつかなかったらどんなに心配するかわかりません。本当にきちんと主人に連絡してくれますか？」

「大丈夫です。任せてください。絶対にきちんと連絡します」

結局、涼子は説得されて吉田の言うとおりに必要な荷物を持って家を出たのだった。

眞木によればSNシステムズのオフィスは大崎にあったはず

だと思ったが、着いた先は品川駅に隣接した品川ガーデンビルという高層ビルであった。四十一階に案内されたが、そこは「DANA研究所」と小さく名前が書かれており、SNシステムズのオフィスではなかった。SNシステムズと何の関係があるのだろうかと思ひながら妙な違和感を覚えたが、吉田に促されて中に入る。そこは受付カウンターが置かれ、その後ろは大きな応接室になっており、正面に大きなガラス窓が部屋の一面全体を占めている。窓の外には眼下に東京の街並みが広がっており、その街並みは東京湾にまでつながっている。窓際に矩形に配置されたソファが置かれ、大柄の男がソファの横に立って窓の外を見ていた。涼子が入っていくと、振り返って、

「やあ、涼子さん、久しぶり」と言った。

「えっ、あなたは！」と涼子は息をのんだ。

それは、林源太郎であった。

「あなたに最後の別れの挨拶を言ってから一五年くらいになりますかね。あれから天才プログラマーとしてあなたが階段を上がっていくのを同業者として陰ながらずっと注目していました」

「えっ、同業者というと今はＳＮシステムズにおられるのですか？」

「ええ、ＳＮシステムズは私が起こした新鋭の会社なのですよ。ご存知なかったですか？」

「ええっ、ではあなたがＳＮシステムズのオーナーなのですか。まったく知りませんでした」

涼子にとっては思ってもみないことであつたが、ひさしぶりに会う林が成功者になっていたことに驚くと同時に尊敬の眼差しをもつて見た。

一五年前、林源太郎は、CCTソリューションズでプロジェクトリーダーとして働いていたのだ。そこで涼子は林源太郎の部下であった。林はすでに重要なプロジェクトを任せられる立場になっており、涼子は林のもとでプログラマーとしての才能を開花させていったのであった。林は上昇志向が強く普段から人一倍働き、会議でも大きな声で明確な筋立てで話し、他から一目置かれる存在であった。そんな林は才能あふれる涼子に期待を寄せるとともに、いつしか好意を抱くようになった。

そのころCCTソリューションズが、ある機械メーカーの生産ラインの管理システムを受注し、林が担当することになった。CCTソリューションズとしても、ハードと一体になったシステムの構築ということで将来のマーケティングの観点から重要

プロジェクトと位置付けられた。このようなシステムでは様々な機械の設計、品質管理、安全管理などいろいろな方面のエンジニアが集まって総合的なシステムが構築される。依頼された機械メーカーと綿密な打ち合わせを行って、生産管理システムが出来上がった。システムを納品した日の夜には、上司の部長がプロジェクトメンバー全員を集めて食事会を開き、

「今回のプロジェクトの成功で、会社も新しい分野に踏み込めることになるだろう。よく頑張ってくれた」と賛辞の言葉を言うてくれた。林はますます将来を嘱望される立場になった。その夜の二次会で涼子は、林から「以前から君に好意以上の思いをもって君のことを思っていた。付き合ってほしいと思っているがどうだろうか」と言われた。涼子も尊敬し眩しい上司であると思っていたが、林がそんな風に思っていたとは考えたこともなく、

「考えさせてください」と言うに留めた。

しかし、新しい管理システムが導入され、生産ラインが稼働し始めたのであるが、まもなくして販売した製品にクレームが出始めたのであった。当然、管理システムを依頼した機械メーカーはCCTソリューションズにクレームを言ってきた。再度プロジェクトチームが招集され、大至急システムのチェックが行われた。不眠不休で行われたチェック作業で、システムに不全部分があり、工場内の温度とラインのスピードがある一定以上に上がると誤差を感知できなくなっていたことが分かった。これはシステム側と設備側の連携が不足していたともいえるが、機械メーカーはCCTソリューションズに賠償請求を申し立てた。この事件で将来を嘱望されていた林は一気に責任を追及されることになった。賠償問題は法廷での闘争になり、もはや林の居場

所はなくなってしまう。そして、失意のうちにひとり静かにCTソリューションズを去って行ったのであった。

「今日は、天才プログラマー・門田涼子の助けが必要で来てもらった。何とか助けてほしい」

そういわれて、十五年前のことを思い出していた涼子は、急に現実に戻った。門田は、涼子の旧姓である。

「先ほど、『Bプロジェクト』を至急完成させたいから来てほしいと言われて来たのだけれど、このプロジェクトを早急に仕上げる必要があるとは聞いていないわ。このシステムは、考え方を変えれば大変な凶器にもなるので慎重に仕上げてくれと言われていたはずよ」

「まったくその通りだ。しかし、現在、北朝鮮、中国などの脅威

が現実になって、わが国で独自に対抗する手段を構築すべきということになり、SNシステムズも参加をして至急完成させることになったのだよ」

「しかし、他社が参加しなくてもCCTソリューションズだけでもうすぐ完成するわ。どうしてSNシステムズがここにきて参加することになったのよ？」

「もともとこのシステムの受注に向けてわが社も営業していたのだよ。特にSNシステムズは、IOT関連のシステムに強いのだ。完成を急ぐために当社の力が必要だとNSSが考えてくれたのだと思う」

「何かあやふやな話ね。明日になったら、田島さんに確認させてもらおうわ」

「ああ、そうしてくれ。作業部屋は隣にある。案内しよう」と言

って、隣の部屋に涼子を誘った。

部屋の中央に大きな会議テーブルが置かれ、窓際に四個の大きな机と椅子が並べられており、四十一階から下界を見下ろすような形で仕事ができるようになっていた。快適な作業環境である。さらに奥に扉があり、それを入ると広いベッドルームがあった。またその作業部屋には別の扉があり、その奥にも事務室かベツドルームがいくつもあるようであった。

「私以外のスタッフを改めて紹介する。こちらが原田専務、吉田部長、宮下君、そして鷺尾君。宮下君と鷺尾君が君のアシスタントをする。彼らは優秀なSEだ、役に立つと思うよ」
そして、

「涼子さん、あなたが結婚しているとは知らなかった。明日にでも旦那さんには、きちんと連絡しておきますから何も心配しな

いで大丈夫ですよ」と微笑みながら安心させるように言った。

結局、「付き合ってほしい」とまで言われたことのある元上司であり、懐かしさと親近感から林の言うことを信用して作業にかかった。宮下と鷺尾は確かに優秀なシステムエンジニアで、すでに『Bシステム』についてかなり把握しており、次に何が追加されなければいけないかを分かっているようであった。しかし、このシステムを仕上げるには、さらに数十万行のプログラムが必要である。詳細なシステムフローを涼子から指示されて、宮下と鷺尾も作業にかかった。この仕事は、集中力が切れたらミスをする。一心に集中して作業を進めて、集中力がなくなったと思ったら作業から離れて休息をとるようにする。エンドレスのような作業であるが、メリハリをつけることが重要である。

次の日、涼子は田島に電話をした。どういふことでSNシステムズがこのプロジェクトに参加することになったのか、そして自分がSNシステムズのオフィスで缶詰になって働く必要があるのかを聞くためである。携帯電話をかけるが、「先方が電源を切っているか、電波の届かないところにいます」といふアナウンスが流れてきて繋がらない。しばらくしてもう一度かけてみるが、同じアナウンスが流れてきて繋がらない。仕方なく、仕事に戻ってプログラミングに集中した。

それから、何度か田島に電話するも繋がらず、そのまま仕事を続けた。そして、とうとうこのオフィスにきて五日目の夜になり、システムが完成した。『βシステム』ではターゲットを決めてターゲットに対する情報操作を命令するだけで、ターゲットから知られることなくあらゆる情報監視、情報操作ができる。つ

まり、特殊なハッキング技術や装備は必要がなく、操作方法さえわかれば、誰にでも『Bシステム』を操作できるのである。ただし、システムは完成したものの、このシステムを動かすには起動プログラムが必要である。極秘システムであり、厳重なセキュリティのもとで運営されなければならない。

「できましたよ。ただし、このシステムを稼働させるには別に起動プログラムが必要よ。それがないとテストもできないわ。私はそれがどこにあるかも知らないわ」

「分かっている。それは、ここに用意している。宮下、」
宮下に持ってくるように合図をした。

「えっ、起動プログラムを用意しているの!」

涼子は驚いた。このプログラムは極秘に管理されていたはずで、簡単には持ち出せなかったはずだ。どういうことだろうと思わ

ずにはいられなかった。すぐに宮下が、CDを持ってきて、

「これです。起動させてみてください」と言って差し出した。

CDドライブに差し込むと、『B2030』というプログラムが出てきた。確かに本体と連動させて動かすためのプログラムのようである。プログラムの指示に沿って『Bシステム』を連動させて起動させる。しかし、何も動かない。さらにもう一度同じ操作をする。動かない。涼子は、宮下に貰った起動プログラムの身をチエックする。しばらくして、

「これは、動かないわね。何かフィルターがかけられていてそれを取らないと、役に立たないわ」

「なに！それはどういうことだ。くそっ、あの爺、何か仕掛けおったな」と林が慌てて言った。

「えっ、何か仕掛けがあるの？」と訝しげに訊く。

「いや、何でもない。ところでそのフィルターを取り除くことはできないのかね？」と慌てたのを取り繕うように言う。

「そうねえ、できないこともないけど時間がかかるわよ。これは相当手の込んだ仕掛けになっているわ」

「どのくらいかかるのかね？」

「まあ、一日はかかると思う。ただし、やってみないと取れるかどうかもわからないわよ」

「天才プログラマー、門田涼子にできないことはない。頼む、頑張ってみてくれ」

「でも、本当にできないかもしれないわよ」と言いながら、キーボードをたたき始めた。これは普通のSEで対処できるようなものではない。よほど厳密にセキュリティをかけているのだなと思った。

そして、6日目の夕方になって、涼子は、

「できましたよ。少し休ませてもらうわ。本格的なテストは後にさせてもらうわ」と林に言った。

「涼子さん、さすがに天才プログラマーと言われただけあるな。本当にご苦労さん。隣の応接にお祝いと慰労のための酒と肴を用意した。みんなで乾杯しよう」

応接のテーブルには、豪華な料理とワインが置かれており、その場にいた全員で乾杯をした。しばらく顔を見せなかった原田と吉田も加わって涼子にお礼を言った。

「田島さんに連絡が取れないまま、日数が過ぎてしまい、システムも完成した。CCTソリューションズから何も連絡がないのはおかしいわね」

「大丈夫ですよ。儂から連絡しておきますから、しばらくしたら
CCTソリューションズの人たちもここに来られると思います
よ」

「そう、きちんと伝えてくださいよ」

涼子はワイングラスを持ちながら、達成感の中に身を沈めつつも、この場にCCTソリューションズの人が一人もいないことに不信感が湧いてきていた。

その後、他の人が加わることもなく酒席が進み、一時間ほどしたところで林と宮下が隣の作業部屋に移って行った。涼子は鷺尾と話していて特に気に留めることはなかった。しかし、二人は二十分ほどしても戻ってこず、鷺尾との会話も途切れがちになった。そこで、涼子も作業部屋で二人が何をしているのか見るためにワインを持ったまま隣の部屋に入っていった。林と宮下は

並んでコンピューターに向かって座っていたが、涼子の顔を見た途端、はっと息をのんだようであった。涼子がふたりのそばに近づくと、林が立ち上がった、

「ご機嫌のようですね、今日はシステムの完成祝いですから、もっと楽しんでください」と言っ、涼子の前をふさぐようにした。涼子は、それをかわしてコンピューターを覗き込んだ。

「あら、『Bシステム』を起動させているのね。何をチェックしているのよ？」

「ええ、我々で最終確認をしているのですよ。あなたは隣の部屋で楽しんでいただいで大丈夫ですよ」

林がそう言っている間も、宮下はコンピューターを操作し続けている。涼子は、林が画面を見せまいとしているのを感じて、余計に画面を覗き込んだ。

「あら、何よ、これは。ターゲットはSNシステムズの社内のプロジェクトではなく、ほかのものね」

ワインをテーブルに置いて、さらに画面に見入る。

「宮下さん、あなたひよっとして社外にある実際のターゲットにアクセスしているわね。それは、クライアントの許可なしではできないことよ」

「涼子さん、そうだが実際にどこにでもアクセスできることを確認しないとNSSにできませんでしたと言って納品できないでしょう」

横から林が言い訳をする。

「だから、実際の対外試験はNSSと共同でやることになっていたはずよ。あなたたち、何をしようとしているの?」

「今言ったように、単なる確認ですよ」と言う林を無視して、宮

下の操作を食い入るように見つめた。すると、しばらくしてターゲットへのアクセス方法が表示され、宮下はそれに従ってキーボードを打ち込んでいく。

「ちよつと待ちなさい！あなた何をやるのよ！」
しばらく間をおいて、画面上に

『Target successfully destroyed (ターゲットは、予定通り破壊された)』と表示された。

「あなた、何をしたの?! どこかのシステムを壊してしまったの?」

涼子の言葉を見無視して、宮下は操作を続けている。

「涼子さん、単なるシステムの試験ですよ。そう慌てなくてもいいですよ」

林が後ろから開き直ったように言う。

「いや、これはどこかの機械に侵入して、その機械を破壊したと
いっているわ。これは犯罪です。すぐにやめなさい！」

「そう慌てるなど言っているだろう」

林が低い声で言いながら涼子の肩を掴んだ。

「何をするのよ！」

「涼子さん、あんたは天才プログラマーと言われ、誇り高く、皆
よりも高みにいると思っっているだろうが、世間のことには疎い
ようだ。あんたのおかげで、『Bシステム』が完成し、我々のプ
ログラムは次の段階に入っているのだ。邪魔してもらっては困
るね」

「あなた、私をだましたのね」

涼子は、林の手を振り払って睨みつけた。何か騒動が起きたと思
ったのか、原田、吉田、鷺尾も隣の部屋から入ってきて涼子を取

り困んだ。

「威勢がいいが、今さらどうしようもない。おとなしくしてもらおうか」と林がすごんだ。

「何かしたら大声を出すわよ」

「おとなしくしろと言っているだろう！ここは防音材で覆われている。大声を出しても誰も来ないぜ」

「一体全体、あんたたちは何をするつもりなの？このシステムは使いようによってはとてつもない犯罪を起こすことができるわ」

「儂らは、このシステムを使って世直しをするつもりだ。痛い目に会いたくなければ、静かにしていてくれ。あんたには、万一、システムに異常があった時のために、しばらく儂らに付き合ってもらおう」

「世直しって、何よ。テロでも起こすつもりじゃないでしょうね。私は帰らせていただくわ」

涼子は隣の部屋に向かおうとする。

「わからん人だな。しばらくここにいて付き合ってもらおうと言っただろう！」

林が、そう言ったと同時に周りの三人が詰め寄った。涼子はかまわずに三人の間を割って進もうとした。とその時、林の手が涼子の肩を押さえた。

「何するのよ！」

振り返る間もなく、「バシッ！」と涼子の頬がなって、体が飛ばされるように床に転がった。涼子は一瞬にして恐怖に覆われ声も出ない。ひりひりと痛む頬を押さえながら林を見上げた。

「これでわかっただろう。協力してくれたらすぐに殺すような

ことはしないから、静かにしてその椅子に座っていてくれ」涼子は、頬を押さえたまま立ち上がり、言われた通りに会議テーブルの椅子に座った。座ったと同時に涙が溢れて止まらない。なんでこんなことになってしまったんだろう。ここに来てからシステムの完成に夢中になっていたが、健二はどうしているのだろうかと思うと益々涙が溢れてきた。そして、自分が何かの犯罪に巻き込まれてしまったのではないかという焦燥感にも苛まれていた。そんな涼子の思いに追い打ちをかけるように、離れたところで林と原田の話声が聞こえた。

「とりあえず後藤先生には消えてもらった。あの先生にいろいろしゃべってもらおうと都合が悪いからな。それにしてもこの『Rシステム』というのは予想以上にすごいな」

「そうですね、起動プログラムを盗まれたと公安にでもしゃべ

られると足がつきかねないですからね」

次の日になって、白人の男と大柄で屈強な男二人がオフィスに現れた。白人の男は、涼子を一瞥した後、奥の部屋に入り、林と英語で話しているのが聞こえた。『システム』について何を話しているのかはわからないが、白人の男も加わり、これを使って何かを企んでいることは想像できる。屈強な男たちはボディガードであろうか、会議室にいて四六時中涼子を見張っていた。原田と吉田は、応接室の反対側に部屋があるようで、主にそちらで仕事をしているようであった。つまり、涼子はこの仕事部屋に監視付きで閉じ込められたと言ってよい。

昼前に全員が会議室に現れ、林が皆に向かって、計画を始めることを告げる。

「ではいよいよ、我々の本来の計画に入る。宮下君、準備に入ってくれ」

「分かりました」

宮下が言って、コンピュータに向かう。同時に他のメンバーも宮下とコンピュータを取り囲むように椅子を移動させた。涼子は離れたところから黙って見ているしかなかった。宮下が、コンピュータを操作していく。

「ターゲットが首相官邸の近くで衝突するように選べるか？」
「すでに地下鉄システムに侵入しています。少し待ってください」

「今オペレーションシステムを乗っ取りました。オペレーションシステムの運転方法を解析中です」

それを聞いた涼子は、連中が何をしようとしているか即座に分

かった。

「宮下さん、やめなさい！地下鉄で事故を起こすつもりなのね！」

椅子から立ち上がろうとする。が、同時にガードマンに肩を掴んで押しとどめられる。

「放しなさい、そんなことしたら大勢の犠牲者が出るわ！」

「おい、女を黙らせるろ！」

林がガードマンに言った、と、同時に「バシッ」と涼子の頬が鳴り、体が椅子から飛ばされた。「ああっ、」と言いながら床に倒れたまま泣き崩れる。

「制御方法が分かりました。これでこの列車はこちらでマニュアルピレートできます」と宮下が言った。

「よし、そのまま行って前の列車に衝突させろ」

「後、三分二十秒で衝突します」

周りのメンバーは押し黙って画面を見つめている。

「後、一分で衝突」

「後、三十秒」

宮下が秒読みを始めた。

とその時、床に倒れていた涼子が素早く起き上がると、コンピュータに向かって走った。

ガードマンも「あっ」と言ったが、止める間がなかった。そのまま走ってキーボードのどれかを強く打った。

「くっそー、なにしやがる！」

林が大声を出して、手の甲で涼子の頬を打った。唇から血を飛ばしながら体が床に転がる。

「お前、何をしていたんだ！ ふんじばって部屋に閉じ込めてお

け」

焦りと怒りを募らせてガードマンを怒鳴った。

「宮下、どうだ？」

「衝突の寸前にブレーキがかかったようですが、そのまま衝突しました。見てください」

画面には、

『Target successfully crashed (ターゲットは、予定通り衝突した)』と出ていた。

「よし、うまくいったな。ご苦労」

林はほっとしたように薄笑いを浮かべながら言って、メンバーを見渡した。

涼子はベッドルームに連れ込まれて、ナイロン製の結束バンドで両手を手錠のように拘束された。

その後、二日近くベッドルームに閉じ込められていた。

『DANA 研究所』

「涼子、よく無事でいてくれたな」と言いながら真木は涼子を抱きしめようとしたが、結束バンドで手足を縛られていてできない。涼子がひどい目にあわされたことを聞き、涙が溢れてきた。

「それにしてもよく無事だったな」と涙声でもう一度言った後、「それにしても連中がニュースで言っていたテロリストだったとは思ってもよらなかった。普通のサラリーマンがテロリストになるとは考えられない。原田や吉田に何があったのか想像もできない」と呟いた。

「それじゃ何、地下鉄事故や飛行機事故を起こしたのは、こいつらだってこと？」と美紀が目を丸くして言った。

「涼子、こちらは美紀さんと亮太だ。妙な縁でここに来るのを助けてもらった」

「まったく、とんだことになっちまったぜ。テロリストに捕まったら今度こそお陀仏だけ、だからさっさと帰ろうと言っただろう」

亮太が美紀に向かってかすれ声で言った。そう言われて美紀も泣きそうな顔になる。

「真木さん、あんたに頼まれて来たのよ。何とかしてちょうだい」

美紀が顔をゆがめて真木を責める。

「ここは、品川のビジネスの中心地で人目が多すぎる。僕たちを

殺すにしても、「ここ」で殺そうとはしないはずだ。僕たちをここから連れ出そうとするはずだからその間にスキを見て逃げよう」
「そんなに簡単にいくかしら。何とか携帯で助けを呼べないかしら」

思いついたように美紀がズボンのポケットに入っている携帯電話を皆に示すようにした。しかし、手足が縛られているので、携帯電話に触ることさえできない。

「それができるといいんだけど、たぶん、難しいわね。私も何度も携帯で連絡しようとしたんだけど、何か特殊な電波を出しているようで、このオフィスからの携帯の電波がコントロールされているみたいよ」と涼子が言った。

真木にも具体的な案があるわけでもない。全員が縛られたまま時間が過ぎてゆく。

深夜になり、四人は、手足を縛られたまま会議室に引きずり出された。会議室には林以下全員が集まっていた。例のアラブ人も加わっている。手足を縛られ床に転がされている四人の横にプラスチックの丸いごみ箱が四つ置いてあった。

「さて、邪魔者は消えてもらおう。おい」

林がボディガードに合図をした。まず亮太を押さえつける。そして宮下が注射器を取り出した。

「くそっ、なにしやがる！」

「おとなしくしろ！」

ボディガードの一人が言って、なんとか抵抗しようとする亮太の顔面を殴りつける。唇が切れて血が飛び散る。

「亮ちゃん、」

美紀が叫ぶが身動きができない。

ぐったりして倒れこんだ亮太の肩に注射針が刺さり、「うわっ、くっそう、」と言ったが、しばらくして音もなく床に臥せった。

「亮ちゃん！」

美紀が叫ぶが、身動きしない。

「大きな声を出すな！ まだ死んではいけない。眠っているだけだ」
林が騒ごうとする美紀を黙らせるように言った。

しかし、今度は泣いている美紀をボディガードが押さえつける。縛られた両手で抵抗するが押さえつけられたら身動きできず、美紀も宮下に注射され、しばらくして亮太の横に倒れこんだ。ボディガードが、まず亮太を抱え上げ、ごみ箱に入れ込む。そして、もう一人のボディガードが同じように美紀を抱えてごみ箱に入れて蓋をした。

「お前たち、何が目的でこんなことをするのだ。誰かへの復讐なのか？」と真木が林に向って言った。

「お前、儂らの声明を見ていないのか。儂らは『太陽の国革命』である。マナーに支配され腐敗した資本主義をリセットして、人々が平等に対価を得られるようになる新資本主義とそれを実現するための新民主主義を実現することを目的とする」

「そんなまやかしのようなことを言って、テロを繰り返す輩に人々がついていくわけがないだろう。原田さん、吉田さん、あんたらは、騙されている。目を覚ましてください」

原田も吉田も黙ったまま林を見た。

「黙れ！ 儂らの理想は高邁である。理想の実現のためには少々の犠牲はやむを得ない。すでに革命の列車は目標に向って走り出している。宮下、さっさとやれ」

涼子に注射するように宮下に合図をした。

「待て、やめろ！」

真木が叫んで両足を縛られたまま飛び起きた。だが、ボディガード二人が涼子を押さえつけた。すかさず宮下が注射器を突き立てた。

「くっそう、お前ら、」

と真木が言ったと思った瞬間、縛られた両手でそばにあった椅子をボディガードに投げつけた。椅子はボディガードに当たらず、そのままガラス窓を直撃した。

「ガシヤツ！」と大きな音がして窓ガラスが砕け、ガラスの破片が地上に向けて降って行った。と同時に夜中の涼しい風が部屋になだれ込んだ。

「なにしやがる！」と言って、ボディガードの一人が真木の後頭

部を別の椅子で殴った。「ガッ、」と鈍い音がして真木は一瞬にして気が遠くなっていた。

「大量のガラスが地上に降ってしまった。すぐに警備員が駆けつけてくるだろう。全員この場から撤退する」

林が日本人に向かって言った後、アラブ人に向かって続けた。

「Mr. Hakim, this is your office. Do something for the rest. Japanese are vulnerable to foreigners (ハキームさん、ここはあなたの事務所だ。あとはうまくやってくれ。日本人は外国人に弱い)」

「Okay, I will manage to do something after that. Take this garbage out soon as possible and get outside (分かっ

た。後のことは何とかする。一刻も早く、このごみを持って外に出て行ってくれ」

とアラブ人が言つて、ごみ箱を指さした。

涼子と真木の体を素早くごみ箱に入れると同時に、部屋にあった必要なコンピューター類、機器などをひとまとめにした。それらを台車に乗せて荷物用のエレベーターに運び込んだ。ものの二、三分のことであつた。アラブ人を残して全員がエレベーターに乗り込み、地階を目指して降りて行った。エレベーターは地下駐車場まで降りていき、まず宮下が飛び出す。残つた連中でごみ箱と機器類を運びだす。宮下が小型トラックを運転してきてエレベーターホールの前に着けた。全員でごみ箱と機器類を手際よく、トラックの荷台に積んでいく。その間に、鷲尾が別のバンを駐車場から持ってくる。荷物を積み終わると、二台の車は勢

いよく駐車を後にした。

林たちが出て行った後、一〇分もせず三人の警備員が「DANA 研究所」のインターホンの呼び鈴を鳴らした。何度かブザーを鳴らすと、外国人がドアを開けた。警備員らは一瞬ためらったが、「ここのオフィスの窓ガラスが割れて、地上に落ちてきました。幸い夜中で人に当たることはありませんでしたが、何があったのでしょうか?」と日本語で訊ねた。

「I'm very sorry. I mistakenly turned over the document shelf that was at the window. Were there any injuries? (大変申し訳ありません。誤って窓際にあった書類棚を倒してしまつたのです。けが人はありませんでしたか?)」と英語の答えが返ってきた。

警備員らは、言葉が通じないことに困惑しながら、その中の一人が、

「You OK? What happened? May I see the room? (大丈夫ですか?何が起きたのですか?部屋を見せてもらえますか?)」とたどたどしい英語で言っ、中に入ろうとする。

「I, m OK. The shelf was turned over (私は大丈夫です。棚が倒れたのです)」と手で棚の形を作って説明しようとするが、警備員らは理解できない。中を覗こうとする。外国人は仕方なく警備員を中に入れた。

「どこの窓が割れたのですか?」と言いながら外国人の後に付いていく。応接室から次の部屋に案内されて、
「ああっ、」と驚いて声をあげた。

窓際に書類棚が倒れ、書類が散乱していた。窓に大きな穴が開い

ていて、風が吹き込んでいます。

「どうして、棚が倒れたのですか？」

日本語で聞くが、外国人は、何を言っているか分からないという
仕草をする。

「Why this happened? (これは何がおきたのですか?)」と簡単な英語で聞く。

「That happened with my mistake (これは私のミスで起こったことです。)」と答える。

「ミステークだと言っている。間違っ**て**ぶつかっ**た**くらいでこんな棚が倒れるかな」

警備員同士でいぶかしみながら話すが、それ以上は聞こうとしな**な**かった。

「明日になったら警察が来ると思います」と言って警備員は帰

っていった。

ボディガードの運転するバンに先導されるように、小型トラックがその後について芝浦ふ頭の横の海岸通りを新橋方面に向かって疾走していく。深夜の海岸通りはたまにタクシーが通る以外には車両の通行は少ない。五色橋の交差点に先行するバンが黄信号で入り、そのまま突き切った。後続のトラックは赤信号を前に一旦ブレーキをかけるが、そのまま交差点を突き切ろうとした。とその時、左からタクシーがゆっくりと交差点に入ってきた。両方とも咄嗟にブレーキをかける。

「わっ、」と言いなながら宮下は、衝突を避けるべく大きくトラックのハンドルを切る。衝突を免れたトラックは大きく蛇行しながら交差点を抜けていく。しかし、その反動で荷台に積んであつ

たごみ箱が横に倒れ、中に入っていた人間が抜け出してしまった。

「ううっ、」と呻きながら真木は荷台の上で気を取り戻した。他の連中は薬が効いており倒れたままである。真木は咄嗟に今の状況を認識して、荷台の手摺につかまって起き上がろうとするが、ナイロン製の結束バンドで手足が縛られたままである。手摺のエッジに結束バンドを何度も擦り付けると切れた。

自由になった手足を確認すると、疾走する車の荷台から外に出て運転席の横まですり寄っていく。宮下は運転に夢中で真木がすり寄ってきたのに気が付いていない。ドアの横に来た瞬間、正拳突きで窓を直撃する。窓ガラスが割れて中に零れ落ちる。

「わっ、なんだ！」

宮下が叫んだ瞬間、次の突きが顎をとらえる。トラックは大きく

蛇行しながら左側のガードレールにこすりながらスピードを落としていく。宮下がブレーキを踏んだ瞬間にドアが開き、トラックのドア枠にぶら下がりながら、真木の両足が宮下の体を助手席の方に蹴り飛ばした。宮下は助手席のボディガードにぶつかり意識が薄れていった。真木が運転席に滑り込んだ瞬間、ボディガードがパンチを繰り出してくる。左腕でかわし、強烈な右正拳がボディガードの顔面をとらえ、ボディガードの体が反対側のドアに打ち付けられる。次の瞬間、助手席のドアを開け、二人の体を外に蹴りだした。ここまで十秒ほどの出来事であった。

その時、先行していたバンが、トラックが付いてきていないのに気が付き、一旦止まった後、そのままスピードを上げてバックしてきた。真木は、トラックのアクセルをふかしてバンを目掛けて急発進させる。異変に気付いたバンが急ブレーキを踏んだが、

そのままトラックが右後方に突っ込んできた。「ガシャン！」と大きな音がして、バンは回転しながらガードレールに突っ込んだ。その間にトラックはバンの横をすり抜けて、スピードを上げて走り去っていく。

「くっそう、なんとということだ。何としても捕まえろ！」

林が運転しているボディガードに向って叫ぶ。バンはすぐにバツクして追尾の態勢をとり、ボディガードがアクセルを踏み込む。しかし、「キュルキュル、キュルキュル」とタイヤが擦れる音がする。衝突したときに、前輪のフェンダーがへこんでタイヤと擦れているのだろう。ボディガードは擦れる音をさせながらアクセルをさらに踏み込んでいく。

眞木は、トラックのアクセルをいっぱい踏み込み、海岸通りを直進して行く。バンらしきヘッドライトが迫ってくる。日の出

埠頭まで来たところで、左に折れて新浜公園の中の道路を突き切っていく。バックミラーを見るとバンのヘッドライトも付いてくる。そのまま直進してJRの線路の下をくぐり抜け、増上寺の横の道路に出る。深夜であるが、ここまできるとタクシー以外の交通量も多い。片側二車線の道路をトラックを左右の車線にシフトさせながら前方の車を追い越していく。しかし、バンも同じように他の車を追い越しながら付いてくる。このままでは、追いつかれるなと思うと両手が汗ばんでくる。

麻布十番を通り越し六本木ヒルズの横に出ようとしたとき、「キュルキュル、キュルキュル」と音を立てていたバンの前輪から白い煙が出てきた。煙は前方から後方へと流れていく。

「おい、スピードを落とせ。このままじゃ怪しまれる」と林がボデイガードに言った。

「しかし、逃げられてしまいましたぜ」

「あいつの行き先はおおよそ想像がつく。すぐに見つけ出す」
バンは、道路の脇に止まり、ボディガードはフェンダーを直し始めた。

新宿中央公園

眞木は、常にバックミラーを見ながらフルスピードで逃げたが、六本木ヒルズあたりから追尾してきたバンの姿が見えなくなった。さらにミッドタウンまで来ても付いてくるようには見えない。どうしたのか不思議に思ったが、安心感が溢れてきて「ふうっ、」と大きく深呼吸した。そのまま車を進めて青山一丁目、国立競技場を経て新宿通りに出る。そして、早朝の新宿中

央公園に着いた。都庁の方角の空がわずかに赤みを帯びてきている。真夏とはいえ早朝の時間はさすがしく爽やかである。

トラックを公園の西側の道路に停めて、荷台に倒れている涼子を抱き上げて公園に入る。暗い木陰の中を自分のテントを求めて歩いていく。ここに来るのはずいぶん前のように思えたが、ほんの二日前に出ただけであった。真木のテントはすぐに見つかった。二日前と同じ場所に同じように立っていた。テントの入り口を開けて涼子を中心に横たえた後、包丁で手足の結束バンドを切った。よく無事でここまで帰ってこられたと、暗いテントの中で涼子の顔をまじまじと眺めた。また、涙が溢れてくる。

しばらく涼子を見つめた後、隣の山さんの小屋を覗いた。山さんはいつものように、横向きに寝転んで寝息をかいている。

「山さん、」と小さく声をかける。すぐに起きるわけではない。三

度目の呼びかけで、

「ううっ、誰だ？」とまだ暗い早朝の訪問者を警戒するように聞いた。

「すみません、僕です。眞木です」

「ああ、お前か、無事だったか？」と安心して起き上がった。

「はい、大丈夫です。少し手伝ってもらえませんか？」

「どうしたんだ？こんな朝早くから」

「美紀と亮太を運んでくるのを手伝ってもらえんですか」

「ああっ、あいつらがどうしたんだ？」

「トラックの荷台の上で意識を失っているのです」

「なに！分かった。ちよつと待て」と言いながら小屋から出てきた。

ふたりでトラックまで行き、山さんが美紀を抱き上げ、眞木が亮

太を担いで二人の小屋まで運んだ。空も白み始めて二人の顔もはつきり分かるようになった。

「縛られているが、どうやら傷はないようだな。どういうことがあったのだ？二日も帰ってこないの心配してたぜ」

「何か食べるものはありませんか？ 急にお腹が減りました」

「ああ、昨日の夜取ってきたエサがある。俺の小屋に来るか」と言ってくれた。山さんの小屋に入る。相変わらずいろいろと拾ってきた雑貨や生活道具が所狭しと置いてある。それらを脇に片付けながら二人分のスペースをつくった。

最初の日に行った焼肉屋で買ったのであろうか、ビニール袋に入っていたさまざまな焼肉と生野菜を二つの皿の上に盛り付けた。二人で焼肉をつつきながら、最初に山さんが、

「それはそうと、お前、奥さんは見つかったのか？」と訊いてき

た。

「ええ、先ほど美紀や亮太と一緒に連れてきて僕のテントで眠っています」

「本当か、それはよかったな。大丈夫だったのか？」

「元気です。ただ美紀や亮太と同じように何かを注射されて眠っています。おそらく麻酔の時に使う入眠剤を打たれたのだと思います。だとすればもうすぐ覚醒するはずですよ」

そして、涼子を探してCCTソリューションズに行ったこと、そこで作られていた極秘システムが盗まれたこと、その極秘システムをつくっていたのが涼子だったこと、そしてSNシステムを訪ねて行って品川のガーデンビルにある「DNA研究所」というところに行き、林に捕まってしまったがそこで涼子を発見したことを、順を追って話していった。

「ちよつと待て、極秘システムを作っていたのがお前の女房だと言ったな」

「はい、僕は家内がどんなコンピュータシステムを作っていたのか全く知らなかったのです。一昨日、地下鉄のテロが起きましたが、それはそのシステムによるサイバー攻撃だったと言っていました。しかし、そのシステムを完成したのは涼子のようにですが、テロをやったのは林です。涼子はテロとは無関係です」

眞木は、冷めた焼肉を食べるのも忘れ、涼子がテロ攻撃とは無関係だと必死で訴えるように言った。それを聞いた途端、山さんが「むっ、」と詰まるような仕草をした。

「分かった、それでお前の女房というのは、眞木涼子というのか？」

「はい、」と眞木が答えると同時に、山さんが小屋を飛び出した。

山さんは、真木のテントの前に来ると勢いよく入り口を開けた。そして、涼子の寝顔をまじまじと見つめた。

「そうか、涼子さん、あんただったか」と言った。

「ええっ、山さん、あんたは涼子と知り合いだったのですか？」
真木が、山さんの後ろから叫ぶように言った。もはや真木には何が何だか想像だにできない。山さんが振り返って、

「あんた、一昨日に地下鉄テロが起きたと言っただろ。あんたは知らなかったのかも知らんが、続いて昨日は羽田でJALの飛行機が墜落寸前になる事故があった。この事故もテロだということだ。このまま行ったら日本はテロ集団に乗っ取られてしまいかもしれない。これは儂らが作ったとんでもないシステムによるものだ」とうなだれるように言った。

「えっ、昨日もそんなテロがあったのですか？しかし、涼子はテロとは無関係です。涼子はそんなテロ集団の仲間では決してありません」

「そんなことはわかっている。しかし、そのシステムを作ったのは儂らだ。こうなることは予測がついたが、その悪夢が現実になっってしまった」

「山さん、あなたは一体何者なのですか？ゴールデン街のママがあなたのことを天才数学者、山下耕助だと言った。尾沢組が持っていた難解なプログラムをいとも簡単に解いて見せた。そして、涼子と一緒にになってテロに使われたシステムを作ったと言っ
う」

「当たり前だ、尾沢組が持っていた起動プログラムは儂が作ったものだ。簡単に解けたのは当然だ。あのネットカフェで最初に

見たときは目を疑った。しかし、開いてみるとまさにそのプログラムだった。尾沢組に殺されそうになった時に解いたプログラムを渡したが、そこいらのプログラマーでは絶対に取れないファイルをかぶせておいた。ところがシステムは完成し、あらゆることかそのシステムが起動してテロを引き起こしている。僕は自分のしたこと、大きな犠牲が出てしまったことに居ても立っても居られんだ」

山さんは一気にしゃべったが、真木は何を言っているのかほとんど理解できていない。

「その極秘システムというのは一体何なのですか？どうして山さんや涼子がテロに巻き込まれることになったのですか？」

「あのシステムは、衆議院議員の後藤甚太郎が発案したものが、当初の目的であったアメリカ、ロシア、中国などに対抗する

ための情報監視システムとは違い、途中からサイバー兵器を志向するようになった。これは防衛省統合幕僚長の浜内眞太郎の意図によるものだ。儂は、NSSの宮田正太郎から頼まれて、コンピュータ制御になっているあらゆる装備、機械などのオペレーションを即座に学習して制御・運転ができるAIを作った。これを使えば人手に頼らずに、いろいろな機械や装置が正確に遠隔操縦できる。まさに未来志向の画期的なAIだと思った。しかし、後になってこのAIがどんなことに使われるかを浜内慎太郎の意を受けていた宮田から聞かされ、“極秘システム”の完成に協力してほしいと言われた。儂は、即座に断ったが、すぐに大学に圧力がかかり、儂の居場所がなくなっていた。せめても抵抗で、儂の作ったAIを動かすための起動プログラムを別に作って、それが起動できないと本体のシステムが動かないよ

うにして大学から姿を消すことにした。起動プログラムはもとの発案者である後藤甚太郎に送っておいた。後藤は防衛省の浜内らとは一線を画していると聞いていたからだ。儂は独り者だ、しばらくを潜めて連中があきらめるのを待つことにしたのだ」

「そうだったのですか、しかし、その浜内さんはあきらめなかったのですね」

「そうだ、儂が大学から消える前に、何度か自ら儂のところに来て脅しまがいの協力要請をしようとした。そのころにお前の奥さんに会った。天才プログラマー・真木涼子だと紹介された。周辺のプログラムは彼女がやるので儂はそのインターフェースをやるだけでいいと言われた」

「僕は何も知らなかった。涼子がそんなプロジェクトに参加し

ていたとは、」

「あの『Bシステム』が動いてテロに使われたと知ったとき、普通の人間には取り除けない起動プログラムのフィルターを取ってしまったのは、お前の奥さんだと直感で思った。お前の奥さんを甘く見た儂のミスだった」

眞木は改めて涼子の顔を見た。自分の連れ合いがそんな重要なことができ、そしてやってしまったのだ。「お前はどんなにすごいやつなのだ」と心の中で呟いた。とその時、涼子が、「うううっ、」と言って、薄目を開けた。

「涼子！気が付いたか？」

涼子の顔を掴みながら話しかける。

「ああ、あなた、ここは？」

「新宿中央公園だ。大丈夫か？」

「大丈夫よ、あなたは？」

「ああ、大丈夫だ、殺されずに済んだよ」

「おお、よかったな」

山さんが後ろから声をかける。涼子は、しばらく山さんを見上げていたが、「はっ、」と気づき、

「山下先生ですか？」と言って起き上がった。

「ああ、涼子さん、久しぶりだね、」

「どうしてここに？」

「はっはっはっ、それは後でご主人から聞いてください」

涼子は、何がどうなったかわからず目を白黒させながら眞木を見た。

「後でゆっくり話すよ。涼子が目覚めたということは、美紀さん、亮太もそろそろ目を覚ますころだな、目覚めたらみんなで警

察に行こう」と言ってテントを出ようとした。とその時、遠くから人がこちらに向って走ってくるのが見えた。

男がさらに近づいてきて、

「山さん、大変だ！」と大声で言った。

それは、代々木公園の浩さんだった。

「朝っぱらからどうしたんだい？」

息を切らして「はあ、はあ、」と言っている浩さんに尋ねる。

「どうしたもこうしたもないぜ。朝寝しているときに、またやくざに襲われて小屋をぐちゃぐちゃにされた」

「何だって！」

「そのうえ、山さんとあんたの居所を言えと言って殴られた。俺は、この代々木公園の何処かに居るはずだがどこにいるか知ら

んと答えた」浩さんが眞木の方を見る。

「浩さん、ありがとう。皆ですぐに警察に行こう」と眞木が言う
と、

「それは、ちょっと待ったほうがいいかもしれんぞ。山さん、あんたはテレビを見てないから知らんかもしらんが、あんた、警察から指名手配されているぜ。警察に行ったらすぐに捕まるぜ」と浩さんが山さんに向かって言った。

「何だ、それは！どういうことだ」

山さんは顔色を変えて浩さんに詰め寄る。

「俺が言っているわけじゃなく、テレビが言っているんだが、あんたがテロの容疑者になっているのだよ。俺はあんたがテロの犯人とは思っていないがな」

「当たり前だ、一体どういうことだ」

山さんが考え込む。眞木も涼子も、びっくりして言う言葉が浮かばない。

「いずれにしても、山さん、あんたはやくざからも警察からも追われている。新宿を離れてどこか遠くに逃げたほうがいい」と浩さんが言う。眞木は、CCTソリューションズを訪ねた時のことを思い出した。

―田島が、極秘システムが盗まれたことに涼子に関係しているかもしれないと言った。ということは、システムの開発者の一人であり、行方が分からなくなっている山さんがなにがしかテロ事件に関与していると警察が考えてもおかしくはない。

―つまり涼子も山さんも警察から見れば、重要参考人と考えられても不思議ではないわけである。

―しかし、現実にはテロ犯は林を中心としたグループであり、涼

子はその犠牲者と言っても過言ではないし、山さんはシステムがテロに使われないように対処しようとした貢献者だと言ってもいい。

「ただ待てよ、山さんによればこのシステムは政府がサイバー兵器として開発した極秘プロジェクトだと言う。もしそうならこれが表ざたになったら、今の政府は大きな非難を受けることになる。」

「とは言っても我々の身の安全が第一だ。やはり警察に行っても今までのことを話すべきではないか。」

とそこまで考えて、美紀と亮太の小屋に向った。小屋を開けると、二人ともちょうど目覚めたところのようであった。

「ああ、眞木さん、私たち無事だったのね。助けてくれたのは眞木さんなの？」と目をこすりながら美紀が言った。

「昨夜、僕だけが注射をされなかったので皆をトラックに乗せてここまで逃げてくることができた」

「ああよかった、ありがとう」

「ありがとうございます」と小さな声で亮太もお礼を言う。

「しかし、まだ安全じゃない。さっき代々木公園の浩さんがわざわざここまで来て、尾沢組が僕たちを追っているようだと思われる。おそらく林が尾沢に連絡して探しているに違いない。一刻も早く警察に行つて今までのことを話そうと思つている」

「ええっ、警察へ行くのかよ」と亮太がいやそうにする。

「お前、奴らに捕まったら、今度こそ殺されてしまうぞ」

「そうよ、亮ちゃん、眞木さんの言うとおりでわ。それにしてもお腹すいたわね、何か食べてから行かない？」と美紀が悠長なこ

とを言う。

「分かった。ちよつと待て、山さんに何か貰ってくる。食べたら皆で警察に行こう」と言つて、小屋を出た。とその時、木の陰から一人の男がすつと出てきて行く手を塞いだ。

「おい、警察に行く前に死んでもらうぜ。そこの浮浪者が案内してくれて探さずにすんだぜ」

尾沢組の辰であつた。右手に拳銃を持っている。

「お前ら、とつくに死んでいると思つたがどうやって生き返つたんだ？しぶといやつらだ。だが今度は逃がさないぜ」
横に視線を向けると、鉄パイプを持った五、六人の男が眞木のテントを取り囲むように詰め寄ろうとしている。腰を下げて空手の構えをとる。

「おつと、お前、拳銃が目に入らないのかよ、さっさとやられて

しまえ、」

辰がほかの連中に目で合図を送った。と同時に、後ろから鉄パイプが振り下ろされた。その瞬間、眞木の体は前転してあつという間に辰の足元まで転がった。

辰が「おっ、」と息飲んで後退した途端、眞木の右足が辰の拳銃を蹴り上げていた。「パン！」と乾いた音がして拳銃は遠くに跳ね飛ばされた。拳銃を拾いに辰が後ろを向いて走る。その背中に向って眞木の飛び蹴りがさく裂して、辰は前のめりになって倒れる。同時に他の男が鉄パイプを振るう。テントに向って走りながらかわす。男たちも走りながら眞木を取り囲もうとする。その時、亮太が小屋から顔を出した。

「なんだ！」

亮太が言った途端、眞木を取り囲もうとした連中が一斉に亮太

を見た。

「逃げる！警察に駆け込め！」

眞木が大声で叫ぶ。

「わああっ、」と言いながら美紀の手を引っ張って走り始めた。二人の男が追う。

眞木は自分のテントに向かって走る。

「涼子！」

涼子がテントから顔を出した。

「逃げろ！」

涼子は、何が起きたかわからず、

「えっ、」とためらっている。と次の瞬間、

「それまでだ、おとなしくしろ！」と辰の声が後ろから響いた。

さっと振り返った途端、鉄パイプが眞木の頭を直撃した。かすれ

る意識の中で、

「あなたあつ！」と叫ぶ涼子の声が聞こえたがすぐに遠のいて行った。

テロ予告（二）

同じころ、人々は朝食を食べながらテレビの朝のニュースを見ていた。ニュースの大半は、連日のように起こったテロに関してであった。今や平和国家日本で、しかも東京のどまんなかでテロが起き、犯行声明まで出た。この先日本の国がどうなってしまうのか、もう遠い国の出来事ではないのである。さらに世界中の国においても日本のテロのニュースはトップニュースとして大々的に報道されていた。イスラム国がついに日本に上陸した

かなど、さまざまな憶測を呼んでいる。現実には立ち返ると、ここに至ってニュースの焦点はテロの犯人は誰か、そして政府はどう対応しようとしているかである。

「今入りましたテロ関連のニュースです。政府・警察庁はテロ犯の所在がまだつかめておりません。そして次にどんなテロが発生するか予測不可能という非常事態に至って戒厳令を発令すると発表するという情報が飛び込んできました。それでは、中継を首相官邸に移します。」と言って画面が首相官邸に変わる。レポートが首相官邸でマイクを握っている。

「今報道しましたように、政府は現在の非常事態に鑑み、治安維持と暴動の阻止のため戒厳令を発令する模様です。しばらくしましたら廣田首相の声明が発表される見込みです。以上、首相官邸より島崎がお送りしました」

画面が記者会見場に移った、とその時、画面が消えて画像が島模様に変わった。そして次の瞬間、真っ黒の画面になり、白い文字が流れた。

『太陽の国革命』である。日本政府は、我々の要求にまだ応えておらず、この事態において軍隊を導入しようとしている。そのような暴挙は、国を自滅に向かわせるだけだということ知らしめられるだろう。それにより多大な犠牲者が出ても、それは現政権の責任である。我々の目的は国の破壊ではなく、平等社会の建設である。時間はない。直ちに、政府は我々に全権を一任する声明を出せ。再度通告する。軍隊を導入するような暴挙は国民の犠牲を生むだけである」

首相の記者会見は中止された。テロ予告が流れた後、首相官邸

の二階にある首相執務室に、廣田首相、麻川副総理、菅岡官房長官、小此田国家公安委員長が集まった。

「戒厳令を出すという情報を事前に流した途端、我々を強請つてきおった。我々はテロに屈服するわけにはいかない。菅岡さん、どう思うかね」

「いまだ犯人の目ぼしが付いていない状況では、次のテロを事前に阻止するためにも予定通り戒厳令を発令し、自衛隊を動員して警戒に当たるのが得策ではないかと思えます」と菅岡官房長官が意見を述べた。

「しかし、今の犯人の声明を見た民衆の中には、何かさらに大きなテロが起きるのではないかと不安が助長している。そんな中で、街中に自衛隊が溢れたらパニック状態になるんじゃないかい」

麻川副総理が注文を付ける。

「小此田さん、例のシステムを作った山下教授はまだ見つからんのかね？」

「はい、彼は独り者で家族はおらず、大学から姿を消した後の足取りが全くつかめないのです。ただ、もうひとりあのシステムの開発に携わったプログラマーも行方がわからなくなっているのです。彼女の行方も人数を増員して探しております」

「なに、そのプログラマーは女性なのですか？」

「そうです、女性ですが天才プログラマーと言われているようです」

「麻川さんの言うように、今自衛隊を街中に配備したらパニックになる可能性がある。野党やマスコミに私を叩く口実を与えるようなものだ。犯人に関する新しい情報が出てきたようだから」

ら、まず犯人探索に全力をあげよう」と廣田首相が言って、戒厳令の発令はしばらく延期することになった。

『クラブ恵』

ここは、新宿区役所通りに面したビルの三階にある『クラブ恵』の大きなホールである。『クラブ恵』は尾沢組組長・尾沢錬次の情婦である鈴木恵がママを務める店である。朝方まで酔い客や客引きであふれていた歌舞伎町も朝日が眩しくなってきたころには閑散となり人気も少ない。

「二人を取り逃がしただと！尾沢さん、あんたの手下は本当に役立たずだな、どうするつもりだ！」

林の大きな声がホールに響いた。

「面目ない、今探しているからすぐ見つかるだろう」

「なにをのんきなことを言っているんだ。そいつらが警察に駆け込んだらあなたの組事務所はすぐに警察に取り囲まれるぜ。一刻の猶予もない」

「ちよつと待ってくれ、あなたにそんなに指図される謂れはない。あんた、何をそんなに焦っているんだ！」

尾沢が逆切れして林に詰め寄った。林の二人のボディガードが林の前に進み出る。と、尾沢組の手下も尾沢の後ろから詰め寄る。

「まあ、待て、仲間割れしたら元も子もない。終わってしまったことはどうしようもない。どうするか俺に任せてくれ。お前たちも下がれ」と林がボディガードに言って、とりあえず両者の睨み合いは解消された。

ホールには林とそのグループと尾沢組の手下六人がホールの中央付近のテーブルに集まっている。ただ林グループの宮下と鷲尾、さらにあのハキームというアラブ人は、隅のテーブルでコンピュータを開いて何かを操作し続けている。そして、その脇に頭を血に染めた眞木、涼子、山さんが両手を縛られて床に転がされている。朝方、新宿中央公園で尾沢組に襲われ、眞木が鉄パイプで頭を殴られて気絶してしまっただが、美紀と亮太は逃げおおせたようである。

「うううっ、」と眞木が意識を取り戻した。顔にも血がこびりついている。

「あなた、大丈夫！」

涼子が眞木の顔を覗き込むように言った。

「おお、気が付いたか、」

山さんも心配と安堵がまじりあった表情をする。

それを聞いてホールにいた全員が眞木らの方を見た。

「何かの役に立つと思つて、殺さずに連れてきてやった。それにしてもしぶといやつだぜ」と林が言う。そして、続けて、

「もうすぐ全てが終わる。それまでの僅かな命だ。静かにしている」と言い残して、宮下らと話している。

「PAC-3の射程距離は二十キロほどだが、SM-3の飛行距離は五百キロだ。まず……」

「分かりました。では目標を……」

「そうだ。北の領海まで行けるか？」

「行けると思います」

という会話が聞こえてきた。

それを聞いて眞木は慄然とした。

「待て、お前ら今度は何をするつもりだ！」

林に向って大声を上げた。

「大声を出すな。話が聞こえたか？ 今度はもう少し怯えてもらうようにするだけだ。どうせ北朝鮮までは届かん」

「なに、北朝鮮だと！ お前、正気か、北朝鮮に向ってミサイルを飛ばしたら戦争になってしまうぞ。原田、吉田、お前らもこの気狂いと同じなのか？ 何が日本のためだ。そんなことをしたら国が滅んでしまうぞ。目を覚ませ」

原田と吉田に向って大声で言った。

それを聞いて、原田が「ああ、……」と何かを言いかけたが、そのまま原田も吉田も黙って考える仕草をする。そして、離れたところにいた尾沢が、

「林さん、あんた何をするつもりだ。ミサイルとかなんとか、穩

やかじゃないぜ」と言って話しに入ってきた。

「おい、やくざ、こいつらは今、日本中をパニックにしているテロリストだ。知っているのか！」

眞木が尾沢に向かって言った。

「なに、テロリストだと！ では地下鉄事故や飛行機事故を起こしたのはお前らなのか？」

「そうだ、こいつらがそのテロリストだ」

それを聞いて林が首をわずかに横に傾けながら、

「ああ、そうだ。尾沢さん、今まで協力してくれて礼を言うぜ。たっぷりお礼をはずむぜ。おい、宮下、やれ！」と宮下に命じた。

「待て、宮下、やめろ！」

眞木が叫ぶように言うが、宮下は操作を始めた。と、ここで、「あんた、やめたほうがいいぜ、」と尾沢が林に言う。

「だから、たっぷりお礼はすると言っているだろう！」
「いや、礼はいらん。儂らはやくざだがテロリストじゃない」と
言って林に詰め寄る。と同時にボディガードがその前に立ちふ
さがる。一触即発であるが、宮下は操作を続けている。

自衛隊市ヶ谷駐屯地、そして、

自衛隊市ヶ谷駐屯地は、歌舞伎町から靖国通りを皇居に向っ
て二キロメートルほど行ったところにあり、周りには高級マン
ションやオフィスが建ち並ぶ。山手線の内側の中央部に位置し、
東京の守りの要というところであろうか。市ヶ谷台ツアーと称
して一般人も駐屯地内の見学ができ、毎日数十人の人が訪れる
人気のツアーがある。

今日も暑い日であるが、朝から三十人ほどの人がツアーに参加して、女性の三好陸尉が先頭に立って案内をしている。ツアーは靖国通り沿いにある正門に集合した後、儀仗広場 → 市ヶ谷記念館 → 屋外へり展示場 → 厚生棟 → メモリアルゾーン → 儀仗広場を経て正門に帰ってくる。そして、ツアーも後半のメモリアルゾーンにやってきた。メモリアルゾーンというのは、警察予備隊創設以来、職務に殉じた自衛官の自衛隊殉職者慰霊碑が建てられている広場である。三好陸尉が慰霊碑を前にして、由来や歴史を話していた。

と、そのときである。庁舎の裏側から大量の真っ白い煙が押し寄せてきた。その場にいた人々が「うわっ、」と声を出した途端、「ゴオオーッ!」という轟音とともに黄色の火を噴きながらミサイルが飛び立った。

空を見上げると凄まじい勢いで東京湾方面に向かって飛び去って行った。そして、続けてまたも真っ白い煙が押し寄せてきた。と同時に、またも「ゴオオーツ！」という轟音が耳をつんざいた。周りは真っ白い煙に覆われ、ツアーの参加者は煙を吸ってむせかえっている。と、またも「ゴオオーツ！」という轟音が参加者の耳を襲った。三好陸尉が、

「外に逃げて！」

参加者を正門に誘導する。逃げる参加者の背中をまたも「ゴオオーツ！」という轟音が襲う。参加者は恐怖で声も出ない。外に飛び出してきた多くの自衛官も煙にまかれて口を押えながら呆然として立ちすくんでいる。

東京のど真ん中から飛び出した四発のミサイルはたくさんの人々が、いろいろな場所から見ていた。すかさずスマホで撮影す

る者もいたが、ミサイルを見たことのないほとんどの人々は、何が起こったのか、そしてどうなってしまうのかという不安と恐怖に苛まれていた。

市ヶ谷駐屯地から飛び立ったミサイルは、ちょうど国会議事堂の上を通過して、東京タワー、羽田空港上空を通過して東京湾に落下したようであった。一般人のほかにも議員宿舎で轟音を聞いた国会議員もいたし、霞が関の庁舎の外で轟音と赤白い炎を間近で見た官僚もいた。しかし、ミサイルが東京上空を飛んで行ったという現実をそのまま受け入れられない人がほとんどだった。

そして、その二十分後、そこは京都の舞鶴港である。海上自衛隊の日本海における最重要基地である舞鶴基地があり、ここも

基地見学ができる。舞鶴基地は一九〇一年に帝国海軍の舞鶴鎮守府が開府して以来、軍港として使用されてきた。海軍記念館、東郷邸などのほかに北吸棧橋で戦艦を間近に見ることができ、このことで人気のツアーがある。

今日も北吸棧橋には、二十人ほどの人々が見学を訪れていた。棧橋にはこんごう型護衛艦「みようこう」が停泊しており、その巨大な船影を見上げる人、またそれをバックに写真を撮る人などでにぎやかである。「みようこう」はイージスシステムを搭載しており、敵から発射された弾道ミサイルをSPYERレーダーで追尾して、みずからが搭載している弾道弾迎撃ミサイルSM-3によって撃墜できる海上自衛隊の最先端イージス艦である。艦長の村井は、いつものようにシステムを起動させてシステムのチェックを隊員に命じブリッジにて隊員の報告を受けていた。と、

その時、

「システムに異常発生！」という声がスピーカーに流れた。

「どうした。具体的に報告せよ」

「システムの操縦が不能！」

「どうということだ？」

「迎撃ミサイル発射準備が進捗！」

「なんだと！」と言った途端、前方のミサイル格納扉が開いた。

と、次の瞬間、

「SM-3、発射！」

スピーカーの音が響いた。

ブリッジの前が真っ白い煙で覆われたと思った途端、轟音が聞こえ、真っ赤な炎が目の前を上空へと通過して行った。

「一体どうということだ！」と叫んだ途端、

「SM-3、発射！」という叫び声が響いた。

前の煙を押しやるように新しい白い煙が前部を覆い、またしても轟音とともに真っ赤な炎が上空に向かって飛び去って行った。もはや村井の頭の中は真っ白で、何を指示したらいいかもわからない。

「くっそう、何が起きているんだ。とにかくシステムを切れ！」と大声で叫んだ。

「システムシャットダウン、不可能！」との返事に続き、「SM-3、発射！」という叫び声がブリッジ中に響き渡った。

またも真っ白い煙が溢れてきたと思った瞬間、真っ赤な炎がブリッジの目の前を轟音とともに空に向かって飛んで行った。

村井は、全身から血の気が引き、崩れ落ちそうになるがようやくブリッジの手摺につかまった。

首相官邸では、すぐさま国家安全保障会議が緊急招集され、メンバーが続々と会議室に入ってきた。

「俺もミサイルを見たぜ。えらい迫力だったな。鼓膜が振動しているのが分かるくらいだった」

麻川副総理が入ってくるなり言った。

「あなた、感心している場合じゃないでしょ。どんな犠牲が出たかもわからないのよ。まったく、どういう神経をしているのよ」と野島総務大臣がたしなめる。

全員が席に着いたところで菅岡官房長官が口火を切った。

「まずどういう状況か報告してくれ」と言っって宮田安全保障局長を見た。

「ご報告します。今朝十時三十分頃、自衛隊市ヶ谷駐屯地より、

PAC-3が四発発射されました。四発のミサイルは南東に向かって飛行し、東京湾上に落下しました。発射された原因は不明ですが、テロとの関連を調査中です。そしてただいま入った連絡によりますと、海上自衛隊舞鶴基地に停泊中のこんごう型護衛艦「みようこう」より、SM-3迎撃ミサイルが三発発射されました」

「なんだと！舞鶴のイージス艦からミサイルが発射されただと！」

宮田室長の報告を遮るように、廣田首相が大声で叫んだ。

「はい、PAC3と比べてSM-3は格段の飛行距離を持っています。舞鶴基地からの報告では、三発のミサイルとも日本海方向に向かって発射され、北朝鮮領海内に落下した模様です」

「ええっ、北朝鮮に向かって日本の自衛隊がミサイルを打ったというのか！」

会議室の全員が驚愕の声を上げる。

「小寺防衛大臣、どうするつもりだ。戦争になるかもしれないぞ」
廣田首相が小寺防衛大臣に向って声を荒げる。

「至急戦闘態勢に入りましょう」

「どうするつもりだと言ったんだ。戦闘態勢に入れとは言っていない」

「北の軍力はすべて把握されています。どこをどう攻撃したらいいかもすべてシュミレーションしています。先制攻撃の準備をただちにすべきだと思います」

「そんなことをしたら全面戦争になってしまうぞ。まずは外交ルートを使って大至急、北とコンタクトを取るべきだ」
河島外務大臣が言う。

「そうだな、どんなことをしても戦争は回避しなくてはならな

い。しかし、北が攻撃してくるかもしれない。それに対する対処は万全を期してしなければならい」
廣田首相が全員を見渡して言った。

「それでは、それぞれの官庁で首相の方針に沿って至急対応をお願いします。国民には「緊急避難命令」を出しましょう」
菅岡官房長官が首相の意図を引き取るように言った。

逃亡

『クラブ恵』のホールで、睨み合っていた林と尾沢組長の横で、コンピューターを操作していた宮下が、
「やったぜ！」と言った。
全員の目が宮下に集中する。

「今頃、外は大騒ぎです」

「舞鶴のミサイルも発射したのか？」と林が訊く。

「やりました、もうすぐ北の領海に落下するはずです」

「そうか、」と言って、林が薄笑いを浮かべながらハキームを見た。

「We did it (やったぜー)」と林が言つと、

「OK, Good. Finally the last finish (よし、最後の仕上げだ)」

「お前ら、何を言っていやがる。ーいつが言ったように、戦争にでもなったらどうするんだ」

尾沢がいらいらしながら林に詰め寄る。

さすがのやくざも事の重大さに気付いたようである。と、その時、

「分かったぜ！」

眞木が横から大きな声を上げた。

「なにが分かったんだ」

「こつらは、テロリストでも何でもなし。ただのペテン師だ」
「どういうことだ」

尾沢が眞木のところに歩み寄って眞木の胸倉をつかんだ。

「原田さん、あんたから貰った財務表では、S Nシステムズは大きな損金を計上する予定になっていたが、僕の見たところではすでに倒産状態になっていた。そしてその原因は、その『D A N A』への過剰投資と投資の失敗だった」と言って、ハキームを見た。

ハキームは自分のことを言われているなと思ったか、

「What, s wrong? (どうした?)」と言って首をすくめた。

「よし、引き上げるぞ！」と林がグループの全員に言った。

「ちよつと待て！ 話を続けろ」

と尾沢が言つて、尾沢の手下が林らを取り囲む。やくざに取り囲まれて原田と吉田は恐怖に震えているようである。

『『DANA』は、確か『Dubai Allfinanz National Associates』というドバイの金融会社だった。おそらくこのアラブ人がどこに投資したのかわからないが大損して、こいつの会社も倒産状態なのだろう』

「それとテロとどういふ関係があるのだ？」と尾沢が言つ。

「つまり、今回のテロは日本社会を恐怖に陥れ、日本の国が底に落ちていくように仕向けたのだ。犯行声明だのと大げさなことを言っているが、所詮、日本政府が要求に応えるはずがないのは最初から分かっていたのだ」

「お前、何を言っているのだ。さっさと行くぞ」

林が眞木の言葉を遮ろうとする。

「このアラブ人がさつきから見ているのは株価や為替のチャートだった。このテロ事件が起きてからあつという間に日経平均は半分以下になった。つまり、こいつらはテロ事件を起こすことで株価の操作や為替の操作をして短期間に莫大な利益をとるつもりなのだ。何が平等社会の実現だ、何が日本のためだ。単なるペテン師だ！」

「くっそう、儂らを使うだけ使って、金を独り占めして逃げるつもりだな」と言う間もなく、尾沢が林に殴りかかった。それをさつと後ろに下がってかわし、腰につけていた拳銃を取り出した。「なんだ、てめえっ、」

尾沢は二、三步下がった。辰が拳銃を抜こうと懐に手を伸ばす。

「おい、やめておけ！」

林が拳銃を向けてけん制する。すると、林の後ろで、

「ああ、もうだめだ、林さん、こんな計画はもともと無茶だったんだ」

あまりのことに愕然となった原田が床に崩れ落ちる。吉田も原田の横で小柄な体を震わせている。

と、その時、『クラブ恵』のドアが音を立てて開き、

「組長！ 警官が事務所に来ています！」と言って男が飛び込んできた。

「くそつ、もたもたしていたからこんなことになってしまった。どけっ！」と取り囲んでいるやくざに言った。と言った途端、林を目がけて鉄パイプが飛んできた。林は横に倒れるようにしてかわすが、それを合図にしたようにやくざがボディガードに襲

い掛かり鉄パイプを振るう。ボディガードも逃げ腰になる。

「パーン、」と音がして、全員が立ち止まる。

林が拳銃をかまえながら立ち上がると、そのまま涼子のところに行き、腕を掴んだ。

「立てっ！」と言った。

「あなた！」と涼子が叫ぶ。

「なにをするんだ！」と言って眞木が立ち上がるが、林が拳銃を涼子に向ける。

「動くな、人質に奥さんを借りていくぜ」と言って、拳銃をかまえながら涼子の腕を引き上げ、入り口に向かって歩きだす。

「Hakim, Let, s go! (ハキーム、行くぜ)」

ハキームが後を追う。他の連中も後に続くが、原田と吉田はその場にうずくまったままである。出ていこうとする鷲尾に鉄パイ

プが振られた。「ガーン、」と音がして鷲尾が倒れる。同時にやぐざたちが逃げようとするガードマン二人と宮下に襲いかかる。先行していた林は涼子の腕を引っ張って入り口を出て行った。ハキームはさらにそれより先に階段を駆け下りていた。

それを見ながら真木は縛られた両手を力いっぱい開き、ゆるみを作って縄をほどいた。そして、山さんの縄をほどきながら、

「山さん、このままじゃ北朝鮮と戦争になってしまう。『Bシステム』で北朝鮮の軍事システムを停止できないか」

「いくらこのシステムがすぐくてもそこまでは無理だろう」

「とにかくやってみてくれ、これはあんたの責任でもあるぜ」
山さんに強い視線で睨んだ。

「わ、分かった、とにかくやってみよう」

山さんは宮下が操作していたコンピューターに向った。

眞木はガードマンとやくざの乱闘をすり抜けて、入り口のドアを開けて階段を駆け下りる。

眞木がビルの外に出た途端、黒色の車が歌舞伎町の中の方に向って威勢よく出ていくところであった。目の前には昨夜運転してきた小型トラックが停まっている。躊躇なくトラックの運転席に飛び乗る。が、キーがない。

「くそっ、」と言いながら、ハンドルの下の方にぶら下がっている二本の電気ケーブルを力いっぱい引き出し、思いつきり爪を立てる。ケーブルの被覆が剥けた。二本のケーブルを一気にねじり合わせる。と、「ブルルッ、」と音がしてエンジンがかかった。黒色の車はスピードを上げたまま次の信号を右に曲がったのが見えた。眞木はトラックのアクセルを目いっぱい踏むとタイヤ

が音を立ててトラックを押し出した。

黒い車は、新宿六丁目の交差点を赤信号で突っ込み、明治通りを右に曲がった。同時にいくつもの急ブレーキの音と怒声上がり何台もの車が交差点内で止まった。眞木はその怒声の中を突き切って林の車を追う。黒い車は靖国通りの手前の道路を四谷方向に入って行った。信号はないものの道幅が狭く両側に歩行者もいるが、黒い車はクラクションを鳴らしながらスピードを上げる。クラクションの音に振り返った自転車がよろけて車道に出てくる。眞木もクラクションを鳴らしながらハンドルさばきでわずかにかわしたが、風圧で自転車は反対方向に転倒した。

右側に高層ビルが見えたところで、黒い車が右に曲がるのが見えた。外苑西通りに入ったなと思った。すぐに靖国通りとの交差

点が迫ってくる。赤信号を前にして黒い車にブレーキランプが点いたが、すぐに消えてそのまま突っ込んで行った。またもたくさんの急ブレーキの音と怒号が巻き起こる。急ブレーキで止まった車を縫うようにして眞木のトラックが付き切った。交差点を突き切った右側に四谷警察署があり、急ブレーキの音と怒号を聞きつけて署員が飛び出てくる。

「止まれ！」

警棒を持って警察官が走り寄ろうとするが、無視してトラックは走り去って行った。

林が運転する黒い車の中で、後部座席には両手を縛られた涼子が恐怖に震えている。その隣でハキームが、

「Take it to the airport anyway. I, I handle the rest (とにかく空港に着ける。後は俺が何とかする)」

「I know. Am in a hurry toward that (分かっている。そこに向って急いでいる)」

「Keep an eye on the woman! (その女をよく見張っているー!)」
「I know. Do not worry (分かっている。心配するな)」と言った後、ハキームは何処かに電話をした。かなり長く電話しているが涼子には内容が十分わからなかった。ただ何かを誰かに命令しているようであった。

スピードを上げたまま二台の車は外苑西通りを国立競技場方向に向って疾走していく。しかし、大型乗用車とトラックでは自ずと走行能力に差がある。眞木は追いつくどころか何とか付いていくのが精いっぱいである。後方でパトカーのサイレンがわずかに聞こえてくる。林の車は国立競技場の前で左に折れて、首都高速四号線のゲートに入って行く。高速道路のETCゲート

を通過していくのが見えた。眞木も同じゲートに侵入する。が、ゲートが開かない。かまわずゲートをへし折って通過する。衝突された開閉ゲートは、「バーン、」と音を立てて碎けて飛び散った。

首都高速は順調に流れていて渋滞している様子はない。林の車は一気にスピードを上げて先行の車を追い越していく。眞木も目いっぱいアクセルを踏むがトラックは徐々に離されていく。黒い車がトンネルの中で右に折れて都心環状線に入って行くのが見えた。おそらく羽田空港に向っているなと眞木は考えた。徐々に離されていくが視界から消えてはいない。案の定、谷町ジャンクション、一の橋ジャンクションを経て首都高速羽田線に入って行くのを視界にとらえられた。

眞木はこれ以上踏み込めないと思うほどトラックのアクセル

を踏む。エンジン音が運転席に充満するほどの唸りを上げていく。黒い車とトラックが前の車をどんどん追い抜きながら京浜運河沿いをモノレールと並行して疾走していく。その時、トラックの後ろからパトカーのサイレンが近づいてくるのが聞こえた。バックミラーに何台ものパトカーが回転灯を光らせているのが映る。眞木はかまわずにアクセルを踏み込む。黒い車はやがて昭和島のトンネルに入って行き、トンネルを抜けたところで赤いブレーキランプが点き、首都高速を降りて行くのが見えた。眞木も同じように出口に向かう。

回転灯を点けたパトカーがどんどん近づいてくる。林にもサイレン音が聞こえているはずである。黒い車はETCゲートを抜けてまっすぐに走っていく。すでに羽田空港は道路の左側に見える。眞木は先ほどと同じように開閉ゲートをバンパーで蹴

散らして通り抜けた。パトカーのサイレンはさらに近づいてくる。とその時、林の車は空港沿いの道路を左に折れてさらにスピードを上げる。そのまま空港のフェンスに激突した。金網のフェンスは大きく壊れ、黒い車はそのまま空港に入って行った。眞木もスピードを落とさずに壊れたフェンスを突破して空港の中に入る。

フェンスを突破して入ったところに小型機の駐機場があったのだ。三百メートル四方ほどのスペースに五、六機の小型機が駐機している。林の車はまっすぐに一つの小型ジェットに向かって走っていく。小型ジェットの周りにハキームに雇われた数人のスタッフが立っており、手招きをしている。ハキームが途中で電話して離陸準備をさせていたのだ。飛行機のタラップの横に車

を止めると、ハキームはすぐに車のドアを開けてタラップを駆け上がった。トラックがフェンスを突破して空港に入ってくるのが見え、パトカーのサイレンの音が近づいてくるが分かる。林は涼子の腕を掴んで車から引き出し、涼子を抱えるようにしてステップを上がって行く。中に入る前にトラックに向けて拳銃を発射した。「パーン！」と音がした途端、飛行機の周りにいたスタッフはびっくりして散らばるように駆けだした。

拳銃が発射された途端に、真木のトラックのフロントガラスに穴が開き、ヒビが蜘蛛の巣のように広がった。すでに小型ジェットエンジンのローターが唸りをあげて回りだしている。そして、さらにもう一度「パーン！」という音がして、またフロントガラスを貫通した。玉は真木のこめかみをかすめて行き当たらなかったが、ヒビがフロントガラス全体に広がり全く前が見

えなくなつた。フルスピードで走っている小型トラックに急ブレーキがかかり車体が左右にスクロールしながら減速していく。次の瞬間、「ガガガーン」と大きな音がして小型トラックが停まった。

小型トラックは小型ジェットの高ラップに衝突して高ラップをそぎ落としてしまったのだ。高ラップは入り口のドアと兼用していたため機体に穴が開いたようになった。

「Goddamn, What, s going on? (ちくしょう、どうなってるんだ?)」と言った後、ハキームは操縦席の男にかまわず機体を発進させた。操縦席の男はハキームの専用パイロットであった。

小型ジェットは、ドアをもぎ取られたままスピードを上げていく。林は入り口から入ってくる大量の空気に押されて涼子と

一緒に機体の後ろのほうに飛ばされるように移動した。その時、外では眞木が必死で小型ジェットを追いかけて走っていた。そして、入り口の枠に飛びついた。手が枠をとらえて眞木の体が機体にぶら下がった。

小型ジェットは、すぐ近くのB滑走路に入って行くとそのまま加速していく。管制官が必死で幾度も制止しようと呼びかけるが、停止するどころかスピードを上げて滑走していく。

前方上空からボーイング747が着陸態勢に入って高度を下げてくるのが見えた。

「、crashing the fucking plane! (くそ、ぶつかるぞー!)」と操縦席の男が大声を出したが、小型ジェットは滑空スピードに達し機体が浮かび上がった。着陸態勢にあったボーイング747は、異常を察知して小型ジェットが浮かび上がったと同時に急

上昇した。両機はわずかの差で衝突を免れた。空港の駐機場では何台ものパトカーが回転灯を付けたまま停まっており、何十人もの警察管が右往左往している。無線で連絡を入れたり数人が集まって話をしたりしているが、ほとんどは飛んで行った小型ジェットを見ながら唇をかんで立ちすくんでいた。

眞木は滑走していく飛行機にぶら下がりながら渾身の力で腕を曲げ、機体が浮かぶ寸前に上体を機内に入れ込れこもうとした。しかし、機体が浮かび上がったと同時に風圧で機外に飛ばされそうである。必死で入り口の枠に掴まりながらすぐ近くの座席の足に手を伸ばす。座席の足を掴んだ途端、腕の筋肉がはちきれれると思えるほどの力で腕を曲げて体を機内に引きずり込んだ。そのまま眞木の体は床の上を後方へ転がって行った。

「あなた！」

後方の座席から涼子が叫んだ。機内の前方は応接室のようになつており両側にソファが並んでいる。その後方には六席のゆったりした座席が縦に二列に並び、さらにその奥に個室がある。中に入ってしまったと先ほどまでの風圧はないに等しい。これは機内に空気の抜け道がないためである。

「涼子、無事か！」

眞木が床に倒れたまま後方を見ようとすると、

「何んというしぶといやつだ」

林が涼子の隣の座席に座ったまま眞木を睨みつける。手には拳銃があり、涼子に銃口を向けている。

「涼子に手を出すな！」

大声で言いながらゆっくり起き上がろうとする。

「Kick kim out! (叩き出せー)」

後ろの座席からハキームが叫んだ。

それに応えようと林が座席から立ち上がろうとする。と、その時後方の個室のドアが開いて、

「まあ、待て。こいつは使えるかもしれない」と男の声があった。声のした方を全員が見た。

眞木は驚愕の表情で男を見た。

男は、CCTソリユーションズの田島二郎であった。

「Oh, Jiro. Finally came out (おお、二郎、やっと出てきたな)」とハキームが言った。

「田島さん、何で！助けて！」

涼子が田島に助けを求めるように叫んだ。その叫びには応えず、「とにかくこいつを拘束しろ」

田島が顎で眞木を指しながら林に言った。

林が涼子に拳銃を向けながら、

「こちらに來い。ゆつくりとな。みような真似をしたら女の頭に弾をぶち込むぞ」と言って後方に来るように手招きした。

眞木は前の座席に座らされ、座席に上半身を縛り付けられた。前方を向いて座らされており、自分の後ろで何が行われているか見えない。

小型ジェットは太平洋上を低空で水平飛行している。圧力の低下を防ぐために高度を上げられないのだ。

涼子は何が何だか分からない。

「田島さん、これはどういうことなの？ 私たちはプロジェクト

トチームの仲間でしょ」

「涼子さん、あんたは天才プログラマーだ、よくやってくれた。」

しかし、世の中には道は一本だけではないのだよ」と言った後、涼子のそばに来て、

「涼子さん、あんたにはまだやってもらおう」と言った。そして、

「眞木さん、少し奥さんを借りるぜ。儂らの計画は今からなのだよ」と田島が眞木の後ろから言った。

「どういうことだ？ 涼子に何かしたら絶対に許さん！」

「おお、威勢がいいな。心配するな、あんたがじつとしていれば奥さんには何もしない。涼子さん、あんたも言うことを聞いてくれないと旦那がどうなるかもわからん」と涼子にも話しかけた。「くそっ、お前ら何をするつもりだ」

「儂らは戦争が起こってもらわないと困るのだよ。どうせ今頃、山下先生が北朝鮮の軍事システムに侵入してシステムをストッ

プさせようとしているだろう。涼子さんに山下先生と対決してもらって山下先生を打ち負かしてもらおう。そして金正成委員長の意味にかかわらず北のミサイルを発射してもらおう。涼子さん、分かったかい？」

「何だと！そんなことをしたら全面戦争になってしまいうぞ」

「だから農らの目的は戦争をしてもらおうことだと言っただろう」「どういうことだ！お前らは狂っている。涼子、そんなことするんじゃない」

「おっと、涼子さん、農らの言うことを聞いてくれないと旦那の命はないぜ。さっさと用意しな！コンピューターは奥の部屋にそろえてある」と涼子に言って立ち上がるように促した。林が涼子の腕を引っ張るようにして立ち上がらせる。涼子は、仕方なく立ち上がり、林に引っ張られるようにして後ろの部屋に入って

行った。ハキームもそれに続いて部屋に入って行った。

「涼子、そんなことをするんじゃない！」

縛られて前を向いたまま叫んだ。田島が眞木の横に来て、眞木の座席の前のソファに腰をかけた。

「叫んでも無駄だ。奥さんは旦那の命を救うためなら何でもするさ」

「くそっ、戦争を起こしてお前らに何のメリットがあるのだ。日本の国が減んでしまっぞ」

「世界には、いたるところで戦争や紛争があり、そのたびに莫大な利益を得ている人たちがいるんだよ。Mustafa Hakim（ムスタファ・ハキーム）は、ドバイに拠点を持つ武器エージェントだ。

「DANA」というのは見せかけの金融会社だ。戦争当事者とRSSとの間に立ってあらゆる武器の調達をする。RSSというのはアメリカ

力の武器メーカーだがね。ハキームはハードの武器だけでなく軍事ソフトウェアも取り扱っている。儂とハキームとはその分野で古い友人なのだよ」

「つまり、日本の軍事システムを横流ししているということなのか」

「そうあからさまに言ってもらっては困るね。もとは儂が作ったシステムだからな。儂が使い道を考えてもおおかしくはない」

「僕がお前を訪ねて行った時、涼子が『このシステム』を盗んだよ。うなことを言った。お前は最初からシステムを盗んだのを涼子になすりつけるように仕組んだのだらう。そんなことをしてもすでに涼子ではないことは露見しているはずだ」

「しかし、お前らがこのまま死んでしまえば警察はお前らの仕事だったのではないかと疑ったままだ」

「何というやつだ。林も最初から同じたくらみに加担していたのか？」

「いや、あいつはハキームの口車に乗って「DANA」に多額の投資をして大損した。首をくくる寸前に儂が助けてやったのだ」

「違うだろう、お前らは最初から林を使うために罠にかけたのじゃないのか。林はお前らに騙されて投資に失敗させられ、何の関係もない原田や吉田まで巻き込む羽目になってしまった。自分の手を汚さずにテロを起こさせ、万が一、林がつかまってもお前ら二人は高飛びできる」

「お前、頭のいいやつだな。ただのコンサルタントにしておくにはもったいないくらいだな」

後ろの部屋では涼子が「Bシステム」を起動させていた。涼子の両側に林とハキームが座って画面を見つめている。

新宿警察

眞木や林が出て行った後「クラブ恵」では、尾沢組と林のボディガードたちとの乱闘が続いていた。やくざが鉄パイプを振り回し店の中にはひっくり返ったテーブルや椅子が転がり、壊れたガラスの破片が散乱している。やくざの怒声が響く中、ボディガードはやくざの攻撃をかわして的確にパンチを打って応酬している。その店の片隅で、山さんが必死でコンピュータと向き合っていた。と、その時階段を駆け上がるたくさんの足音がした。次の瞬間、

「警察だ！やめろ！」

大音声が店中に響き渡った。

結局、店にいた全員が警察に取り押さえられて新宿警察署に連行された。その中にはコンピュータを抱えた山さんの姿もあった。この警察の搜索は尾沢組に追われた美紀と亮太が助けを求めて新宿警察署に飛び込んだ結果であるが、山さんが指名手配されている山下耕助であることが分かると、所内では慌ただしく警察庁に連絡した。警察庁から係官が来る前に取調室で新宿警察署の署員と山さんが向き合っていた。

「あんたが元早稲田大学の教授の山下耕助で間違いないな？」
「ああ、そうだが、儂のコンピュータを返してくれ。まだ仕事が終わっていない」

「あんたはテロの重要参考人として指名手配されているんだぞ。コンピュータで仕事ができる立場じゃないんだよ」

「そんなことを言っていると、北朝鮮からミサイルが飛んで来

るぞ。早くコンピュータをよこせ」

「あんたはテロの犯人だろう。今さら何を言っているんだ」

「何を言っているんだとは何だ。ばかたれ！」

「ばかたれとは何だ！」と署員が言ったとき、取調室のドアが音を立てて開いた。

「おい、早くコンピュータをその人に渡せ！」と入ってきた男が大声で言った。

「えっ、」と言って振り向いた署員はびっくりして立ち上がった。入ってきたのは署長の南田であった。そしてその後、数人の背広姿の男が入ってきて山さんを見つめていた。内閣安全保障室の宮田室長とその部下であった。

平壤

平壤は西暦四二七年に高句麗が都を移して以来数々の戦乱をくぐり抜け、現在では二百五十万人の人口を抱える北朝鮮で最大の都市である。町の中心を大同江が流れその西側に金日成広場が広がり、大同江を挟んだ東側には高さ一七〇メートルの主体思想塔がそびえている。北朝鮮は金正成が独裁者として君臨する独裁国家であり、特に近年では核開発、長距離弾道ミサイルの開発に熱中して軍事力を拡大し続けており、特に韓国、日本に対する脅威となっている。

町の北側で市内を見下ろすようにそびえる牡丹峰（モランボン）の丘につくられた地下要塞の一室で金正成は大きな体をソ

ファに沈めながら大好きなバスケットボールの試合をテレビで見っていた。試合はアメリカのNBAの試合でクリーブランド・キャバリアーズとメンフィス・グリズリーズの試合である。試合は始まったばかりで両チームのシュートが次々と決まっていく。金正成は強豪チームであるクリーブランド・キャバリアーズのファンで、キャリバーズのシュートが決まるごとに、

「よしっ、」と歓声を上げる。金正成の後ろに並んでテレビ観戦している五、六人の男女もそれに合わせて拍手を送る。キャリバーズがグリズリーズのボールをカットして一気にシュートを決めた瞬間、

「よっしゃあ！」と言ってこぶしを突き上げた時だった。部屋のドアが「ガタツ」と音を立てて開き、朴永哲大将が駆け込んできた。全員の目が朴大将に集中する。

「將軍様、たいへんなことになりました。日本のミサイルが我が領海に着弾しました。四発のミサイルが次々と飛んできました」
「何、それはどういうことだ！」

「日本が東海（トンへ）で軍事演習をしていたという事実はありません。どういふことかは分かりません」

「よし、司令室に行くぞ、全員をすぐに集めろ！」と言って、大きな体をゆすりながら立ち上がった。

数分後には、軍指令室に崔英春次帥以下陸海空軍の大將、上將ら幹部三十人が集められ、中央の大テーブルに金正成を囲むように席についている。

「もう一度聞くぞ。これは日本がわが国に故意にミサイルを打ってきたということか？」

金正成の甲高い声が響いた。しばらくの静寂の後、

「分かりません。日本が軍事演習をしていたという事実は確認されておりません。発射されたのは日本の舞鶴軍港からではないかと思われます」と朴大將が答えた。

「ということは、日本が独自に我が国に戦争を仕掛けてきたということだな」

「しかし、日本がアメリカを差し置いて攻撃してくるのでしょうか？」崔次師が口をはさんだ。

「お前、何を悠長なことを言っているんだ。戦争は先手必勝だぞ。すぐに戦闘態勢をとれ！ 打ってきた日本の軍港に向かってミサイルを撃ち込んでやれ」

全員を見まわしながら大声で命令を下した。

それと同時に全員が立ち上がり、各所に連絡をした。

三十分後、

「將軍様、戦闘態勢の準備が完了しました」

崔次師がいらいらして待っていた金正成に報告をした。

「よし、中距離弾を五発発射するぞ。かかれっ！」と命令した。

しかし、五分、十分しても発射の連絡がない。

「くそっ、どうしたんだ？敵が本当に攻めてきたらどうするんだ！」金正成がいらいらしながら甲高い声を響かせる。

「おい、まだなのか」

崔次師が朴大将に言う。そう言われた朴大将は、

「おい、どういうことだ！」と部下の李武勇上将に言う。

「お前ら、一体どうなっているんだ。全員首を刎ねるぞ！」

金正成の怒りが頂点に達しようとしていた。と、その時広大な司

令室に金夏一中将がバタバタと音を立てながら駆け込んできた。

「將軍様、報告します。我が軍の軍事システムが作動しません」

「なに！どういうことだ」

「何者かが、我が軍の軍事システムに侵入してシステムを壊したのではないかと思われます」

「そんなものがなくてもミサイルは発射できるだろう。何を言っているのだ！」

「それが、すべてのミサイルはコンピューターで制御されており、コンピューターが壊れたら動かないのです」

「ええいつ、何を言っているのだ。早急に復旧して発射しろ！」

怒りに任せて、灰皿を金中将の顔に向けて投げつけた。

攻防

新宿警察署の取調室で山さんがコンピューターに向って必死でキーボードをたたいていた。その周りでNSSの宮田室長らが山さんを取り囲んで画面を見つめている。

「いくらこのシステムが優秀でも儂はハッカーではない。簡単に北朝鮮の軍事システムに入ることなどできん」と言いながらキーボードをたたいていく。そして、二十分が経ったところで、「よし、侵入したぞ。後はAIが軍事システムの全貌を浮かび上がらせる」と言った。

「やりましたか、」

宮田室長が笑顔を見せる。

「ああ、しばらくして北朝鮮の軍事システムは停止する」

一方、小型ジェットの中で涼子は、林とハキームに見張られながら「αシステム」を起動させ、北朝鮮の軍事システムに侵入しようとしていた。

「誰かがすでに軍事システムに侵入しているわ」と涼子が呟いた。

「それはやはり山下だろう」と林が後ろから言う。

「すでに軍事システムは停止させられているわ。これを動かすのは無理ね」と言ってキーボードから離れようとする。

「待て、お前にできないはずはない。旦那の命がなくなってもいいのわ」

「しかし、できないものはできないわ」

「強情な女だ。よし、まずは旦那に片輪になってもらうぜ」と言
って拳銃を持って部屋を出て行った。ハキームは涼子の隣の椅
子に座ったまま涼子を睨んでいる。

そして、すぐに「パーン！」という音がしたと同時に、

「うああっ、」という悲鳴が聞こえた。

部屋に戻ってきた林が、

「おい、旦那の悲鳴が聞こえただろう。やれと言われたことはや
つてもらおう。やれ！」と言って涼子に拳銃を向ける。

「健二に何をしたのよ！」

「左手に穴が開いたただけだ。まだ生きているから安心しな」

「なんてことをするのよ！」

「またいやだと言って言ったら今度は右手が碎けるぜ」

「わ、分かったわ。だから健二に二度と手を出さないで！」

涼子は頭の中が空白になった感覚を覚えながら、言われたように北朝鮮の軍事システムに再度侵入した。そして停止させられているシステムの復旧に取り掛かった。AIが復旧方法を探し出していく。そして、二十分ほど経ち、

「復旧できたわ」と呟いた。

「よし、では中距離弾道ミサイルを日本に向けて打て」

「そんなことしたら大勢の日本人の犠牲者が出るのよ」

「革命に犠牲者つきものだ。早くやれ！」

「あなたまだそんなこと言っているの。あなたも日本人でしょ」

「いやならもう一度旦那に痛い目に会ってもらおう」と言って立ち上がった。

「わ、分かったわ。やめて！」

涼子は言われたように弾道ミサイルの発射準備をし、ターゲット

トを決めて発射した。

平壤の地下軍事指令室では、金正成がいらいらしながら大きな体をゆすってうろうろと動き回っている。周りの幹部連中はいつ何時自分に雷が落ちるかと戦々恐々としながら大テーブルに座り続けていた。

「お前らは今まで何をしてきたんだ。国産でミサイルを開発してきたんじゃないのか。どうなんだ、崔次帥！」と崔英春次帥に向って大声をあげた。崔次帥は下を向いて黙ったままである。

「くそ、なんとか言え！」と怒鳴った途端、またバタバタという足音がして金夏一中将が駆け込んできた。

「将軍様、報告します。軍事システムが稼働し出しました」

「おお、よし、金中将よくやった。さっそくミサイルを日本に向

って打て！」

「將軍様、すでにミサイルは発射されました」

「なに！それはどういふことだ。儂の命令なしで打ったと言ふのか」

「それが、我々が操作する前に自動的に発射されたのです」

「お前、何を言っているのだ。で、どこに向って発射されたのだ？」

「真っすぐに日本の東京に向って飛んでいます」

新宿警察署の取調室では、山さんが北朝鮮の軍事システムを停止させた後、停止したシステムの推移を観察していた。周りのNSSのメンバーは、携帯電話で何処かしこに連絡をしており、部屋の中が騒がしくなっていた。その騒音の中で山さんが、

「んっ、」と呟き、続けて、

「これは、誰かが軍事システムに侵入してきたぞ」と声を上げた。それに宮田室長が反応して、

「連中がシステムの復旧に取り掛かったのですね」と言った。

「いや、違うな。これは外部の誰かだな。内部のものではない」

「それはまずい。その侵入者を妨害できますか？」

「やってみる」

五分、十分と周りでは静かにして山さんの操作を見守っている。

「どうですか？」と宮田がしびれを切らして尋ねる。

「ああ、だめだな。どんどん修復されていく」

「まずいですね、」と宮田が呟く。

「ああ、まずい。全部修復されてしまったぞ」

「なんとかありませんか？」と宮田が言った次の瞬間、

「わあっ、ミサイルが発射されたぞ！」と山さんが叫んだ。

墜落

「後十分ほどで東京は火の海だな」

田島二郎が微笑みを浮かべながら言った。相変わらず小型ジェットは太平洋上空を南に向って低空飛行で飛んでいた。眞木は左手を撃ち抜かれて苦痛の表情をしたまま座席に縛り付けられている。涼子はコンピューターを抱えて眞木の隣の席に戻ってきた。

「あなた、大丈夫？」

「ああ、僕は大丈夫だ。それよりミサイルを発射したのか」
「だって、あなたが殺されると思ったから」

「くっそう、何ということだ」

その時、田島が眞木の隣に来た。

「儂らはこの先で飛行機を乗り換える。もうお前らに用はなくなった。ここらで降りてもらおうことにする」

「林、こいつらをここから突き落とせ」と林に命じた。

田島に命じられて林が眞木の縄を解く。縄を解く間、拳銃をテールの上に置いた。眞木の縄を解き終わり拳銃に手を伸ばそうとした一瞬のスキに眞木の左蹴りが林の横腹にめり込んだ。続いて右足で拳銃を蹴った。拳銃は前方に転がって行った。

「ぐあっ、」と唸って林がテールに倒れこむ。と、同時に田島が眞木の後頭部を拳で殴った。前のめりになりながら眞木が振り向くと、さらにパンチが顎をとらえた。眞木はたまらず前方に後ろ向きに倒れる。

「あなた！」と言って涼子が眞木のところに歩み寄る。涼子を横に突き飛ばして林が立ち上がる。

「この野郎！」と言いなから倒れている眞木に飛びついた。次の瞬間、飛びかかってくる林の体は眞木の巴投げで宙に浮かんだ。そのまま操縦席のドア打ち破って転がって行った。その音を聞きつけて、後ろの部屋にいたハキームが出てきた。

「What, s going on? (どうしたんだ?)」
手には警棒のようなものを持っている。

壊れて風が吹き込んでいる入り口の横に立っている眞木を目がけて走りながら眞木の頭を目がけて警棒を振った。倒れるようにしてかわしながら回し蹴りで背中を蹴った。ハキームはそのまま操縦席の中に転がり込んだ。中に倒れていた林の体にぶつかり、大きなハキームの体がパイロットの上に転がった。パイロ

ツトはハキームの体が衝突した衝撃で頭を前の計器に突っ込んだ。

「うわっ」とパイロットが言った瞬間、機体が大きく傾き急降下した。田島と涼子は前方に向かって転がってくる。大きく傾いたため眞木の体は壊れた入り口から外に飛ばされそうになる。必死になって右手一本で入り口の枠につかまる。

機体はどんどん降下して海が迫ってくる。

「くそっ、死ね！」

田島が入り口の枠を掴んでいる眞木の右手を蹴った。

「やめて！」

涼子が田島の体にしがみつく。

「なにをすするんだ。お前も一緒だ」

田島が涼子の体を突き飛ばした。涼子の体は外の空気に吸い込

まれるように外に飛び出した。

「涼子！」と叫びながら真木も右手を離した。

ふたつの体は海に向って落ちて行き、飛沫を上げて海の中へ消えていった。今にも海に飛び込みそうになっていた小型ジェットは急上昇した。間一髪でパイロットが態勢を立て直したのだ。「危ないところだった。世話を焼かせる奴らだ。このままグアムまでいくぜ」と田島がパイロットに話しかけた。

操縦室には林とハキームもいて安堵の表情で座り込んでいた。

「Good business! (よくやった!)」

と言ってハキームも笑顔を見せた。

と、次の瞬間、

「うわっ、なんだ!」

パイロットが大声で叫んだ。

その叫び声がかき消されるように小型ジェットは大きな炎とともに碎け散った。数分後には洋上にわずかな残骸が浮かぶのみで小型ジェットは跡形もなくなり、太平洋の大きなうねりが静かに走っているのみであった。

エピソード

北朝鮮からミサイルが発射されたと分かった後、数分後には全国瞬時警報システム（Ｊアラート）が人々の携帯電話に「ポ。ポ。ポ。ポーン」という着信音を鳴らし、区役所ではサイレンが鳴り、テレビでは速報が流れて緊急避難が呼びかけられた。すぐに地下道に逃げる人たちもいたが、ほとんどの人はどう避難したらいいか分からず何もしないまま立ち尽くしていた。

自衛隊市ヶ谷駐屯地では、ただちにミサイルの追跡を開始するとともにPAC-3の発射準備が行われた。しかし、PAC-3の射程距離は二〇キロメートル程度であり、相手のミサイルがよほど近づかない限り発射できない。どんどんと近づいてくるレーダーの画像を見ながら前田方面幕僚長の緊張が最高潮に達したその時、

「敵ミサイル、高度15,000メートル。東京上空を通過」とレーダー官が叫んだ。

「おお、」という安堵の声が指令室に沸き起こった。

「よかった。しかし、次のミサイルが飛んでくる可能性があるぞ。引き続き監視！」

前田方面幕僚長が司令を発した。と、その時

「敵ミサイル、太平洋上に落下。小型飛行物体を撃墜した模様」

とリーダー官が再び叫んだ。

眞木と涼子は、小型ジェットから放り出されたが超低空飛行であったため両足骨折という重症を負ったものの奇跡的に命は助かった。洋上に浮かんでいるところをアメリカ軍の救助ヘリによって救助されたのだった。小笠原諸島近辺を航行中のアメリカ軍の航空母艦カール・ビンソンは北朝鮮のミサイルを追尾しており、ミサイルが小型ジェットを撃墜する瞬間までを詳細にとらえていた。撃墜されるとすぐに艦載機「F-100ホーネット」が偵察に飛び立ち二人を発見した。

カール・ビンソンにはコンビニヤ病院が完備され、眞木と涼子は艦内に運ばれた後すぐに手術をうけた。二人は艦内の病院に並べられたベッドに隣同士に寝かされている。

「涼子、痛みはどうだ？」

「私は痛みはたいしたことはないけど両足を吊られていては寝返りもできないわ。あなたは痛むの？」

「いや、僕もたいしたことはない。それより小型ジェット機は北朝鮮のミサイルに撃墜されたようだな。お前、よくやったな」

「だって、日本にミサイルを撃ち込むわけにはいかないでしょ」

「いやあ、涼子はたいしたもんだ。日本を救った英雄だな」

「これであなたも当分動けないし、長年の夢だった長期休暇が取れるわね」

「そうだな、しかし、僕らは自分の家にも入れない」

「あら、家の鍵ならあなたが持っているわよ」

「ええっ、どういうことだ」

「ほら、あなたが首から下げている像の飾りのキーホルダーよ。

その中に鍵が入っているわ」

やくざに追われた後に自宅のマンションに帰ったら、涼子がいなくなっており家も他人の名義になっていると受付で言われた。その時に涼子が置いていった家の鍵に像の飾りのキーホルダーについていたのだった。それを自分のものだと言って貰ってきて首から下げていた。ホームレスをしている間の涼子との唯一のつながりであった。眞木が包帯された手の爪で像の飾りをこじ開けると、中から鍵が転がり出てきた。

ふたりはやっとこの事件が終わったなと実感すると同時に互いがどれほど愛し合っているかを思い返してずっと互いの瞳を見続けていた。

その後家に帰った眞木と涼子はしばらくして美紀から連絡を

もらった。尾沢組が捕まったことで彼らもやくざに追われることもなくなり元のアパートに住んでいるとのことであった。また二人は、原宿から代々木公園に行く道で山さんと浩さんが話しながら歩いているのを見かけたが声はかけなかったと言った。山さんが早稲田大学の教授に復帰したのかどうかは定かではない。

日本の外交筋によると日本の外務省が外交ルートを使って北朝鮮に接触し、今回の出来事は偶発的なもので日本が北朝鮮を攻撃する意思は今後とも全くないことを伝えた。それに対する北朝鮮からのメッセージはないが報復的な動きは今のところない。

完